

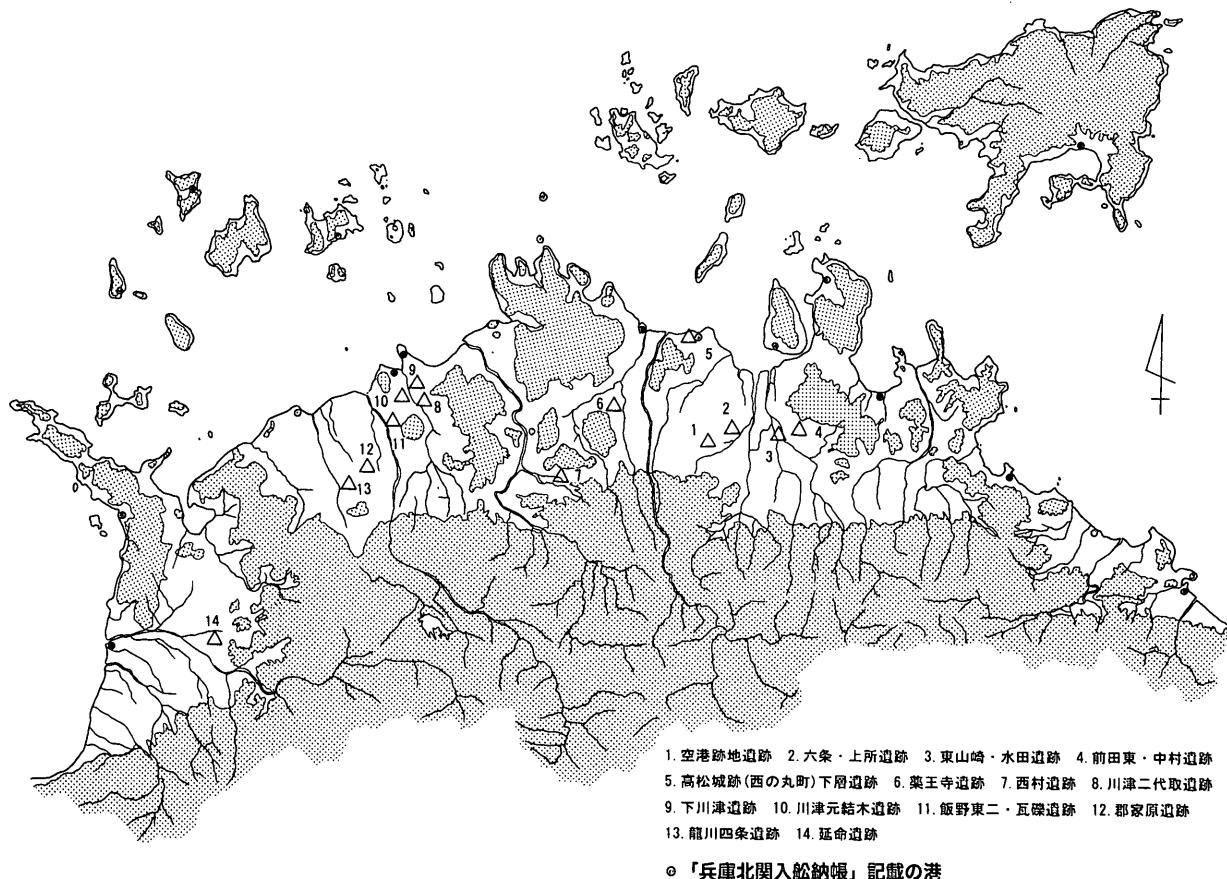
第5章 まとめ

第1節 高松平野と周辺地域における中世土器の編年

1. 目的と課題

ここでは、空港跡地遺跡と周辺地域の出土土器による編年案を提示し、第2節以下で行う議論の年代的な枠組みを明確にする。対象地域は高松・丸亀平野とその中間に位置する生産地の西村遺跡である。

従来は、生産地における個別的な編年案の構築（廣瀬1982, 片桐1992 a, 佐藤1993・1995）と、複数生産地の製品集積の場である消費遺跡での編年案の提示（野中1987, 片桐1990・1992 b）が行われてきた。いまここで個々の作業の内容について記述する余裕はないが、9世紀から16世紀までの網羅的な編年案が提示された片桐1992 bを踏まえて、本稿での課題を示しておく。



第402図 対象遺跡位置図 (1/25万)

片桐1992 bでは、丸亀平野での事例を中心として基準資料を抽出した上で各器種の変遷が分析されている。ただ基準資料抽出の基準や、基準資料の前後関係を想定した根拠が明確でなく、小期（I～III期を細分する単位）の「空白」や「接合」がどのような認識から導き出されたのかが、記述されていない。例えば、片桐編年II-③～⑥期の基準資料とされた川津元結木遺跡 S D 10の各層土器群については、片桐氏は最下層・第2溝・上層を堆積の時間差にとどまらない時期（様式）差とみるが、器種組成の主体をなす土師質土器杯・小皿や黒色土器碗の形態・技法の変化については整合的な説明が行われておらず、堆積の差＝時期差とした根拠が曖昧である。片桐氏は系譜を念頭に置いた形式設定を行っているが、それらの属性を整理した細別型式の設定にまで至っていないことが、このような不分明さを残すこととなったと考える。このため、片桐氏の想定する12世紀代の在地産土器の変化は、生産地である西村遺跡での編年（廣瀬1982）との対比が困難な内容となっている。また、中世後半にあたる片桐編年III-①から⑨期については、基準資料の提示が行われず、資料的な欠落も多いのにもかかわらず、いわば「均等割り」で時期が想定されている。したがって、III期の細分小期には資料の提示が皆無な「時期」が存在することになっている。

もちろん、急速に増加しつつあった資料状況に埋没せず、器種の系譜・地域色を考慮した全県的な枠組みを立ち上げた片桐氏の業績は高く評価されるべきである。ここでは、空港跡地遺跡出土土器を中心とした高松平野南部での様相を検討し、生産地である西村遺跡や丸亀平野での様相と比較し、各地域の様相の対応関係を明確化した上で編年案の提示を行いたい。なお、両平野間あるいは遺跡間の様相の対応関係を検討する際には、極めて少数派に過ぎない他地域からの搬入品による「実年代観」は用いない。まずは量的に安定して出土する土師質土器杯・小皿のもつ様相の類似度から類推し、在地産の中域流通品である十瓶山窯跡群（西村遺跡）産土器碗で検証したい。搬入品は年代の上限を考慮する際の補助資料として位置付けておく。また、中世後半については、後述するように空港跡地遺跡や周辺遺跡でも良好な一括資料が得られていない状況であり、現段階でも編年案の提示は極めて困難である。このため、断片的な一括資料にもとづく若干の見通しと、以前に筆者が国分寺楠井遺跡で行った土器編年と出土資料との整合性について、言及するのにとどめた。

2. 各器種の分類

(I) 土師質土器杯・小皿の分類

皿A 須恵器と同じ形態をもつ皿

皿B 底部ヘラ切りの小皿（口径11cm前後より小さいもの）

B I 形式 外傾度が強く長い口縁部をもつもの。ヘラ切りはL・Rの両者あり

B I - 1 型式 口径10～11cm前後

B I - 2 型式 口径8.5～9.5cm前後

B II 形式 直立気味の口縁部をもつもの。ヘラ切りはRのみ

B II - 1 型式 口径9.5～11.5前後

B II - 2 型式 口径9.0cm前後

B II - 3 型式 口径8.0cm前後

B III形式 外傾する短い口縁部をもつもの。ヘラ切りはL・Rの両者あり

B III-1型式 口径10~10.5cm前後

B III-2型式 口径8.0~8.5cm前後

B III-3型式 口径7.5~8.0cm前後

B III-4型式 口径6.0~7.5cm前後

B III-5型式 直立する極めて短い口縁部をもつ、コースター状の形態のもの。口径5.0cm台

皿C 底部糸切りの小皿

C I形式 外傾する口縁部をもつもの。口径7.5~9.0cm

C II形式 直立する太く短い口縁部をもつ、コースター状の形態のもの。口径6.5~8.5cm前後。

杯A 須恵器と同じ形態をもつ平底杯

杯B 須恵器と同じ形態をもつ高台付杯

杯C 器体が浅い小型杯

杯D 直線的に外傾する体部をもつ底部ヘラ切りの杯。ヘラ切りはL・Rの両者あり

D I形式 体部の外傾度が強く、口径と底径の差が大きなもの。口径13.0cm前後

D II形式 体部の外傾度が弱く、口径と底径の差がやや小さなもの

D II-1型式 口径13.0~14.0cm

D II-2型式 口径14.0~15.0cm前後。D II-1類よりも体部直立気味で深手。底部と体部の境は丸味を帯びる

D II-3型式 口径13.5~14.0cm前後。D II-2類よりも深手

D II-4型式 口径12.5~13.5cm前後。D II-2類とほぼ同じ形態

D II-5型式 口径11.5~12.5cm前後。底部と体部の境は明瞭に屈曲

D II-6型式 口径10.5~11.0cm前後。D II-5類とほぼ同じ形態

D II-7型式 口径9.5~10.5cm前後。器壁薄くロクロ目が顕著

D II-7'型式 口径12.0前後。器壁薄い

D II-8型式 口径9.0~10.5cm。器高低く、器壁薄い

D II-8'型式 口径11.5cm前後。器高低く、器壁薄い

D II-9型式 口径9.5cm前後。体部の外傾度が強く浅い器体

D III形式 体部が直立気味であり、口径と底径の差が小さなもの

D III-1型式 口径14.0前後。体部と底部の境が丸味をもち、体部はやや外傾度が強い。

D III-2型式 口径11.0~12.5cm前後。底体部の境が明瞭に屈曲する。

杯E 底部糸切りの杯

E I形式 やや直立気味の体部をもつ浅手のもの。回転糸切り(W)と静止糸切り(S)あり

E I-1型式 口径14.0~16.0cm前後

E I-2型式 口径13.0~14.0cm

E I-3型式 口径11.0~12.0cm

E II形式 直線的に外傾する深手のもの。

E III形式 体部中位に強いロクロ目によるアクセントがつくもの

E III-1型式 体部が明瞭に屈曲

E III-2型式 体部が弱く屈曲

E III-3型式 体部が内弯するもの

E III-4型式 体部が直線的に立ち上がる

杯F 体部～底部外面に指頭圧痕が顕著な手捏ねの杯（あるいは「底部押し出し」か）

(2) 土師器甕・羽釜の分類

甕A 内弯する口縁部と肥厚もしくは平坦面の端部をもつ布留系の甕

甕B 丸く太い口頸部と器壁の厚い体部をもつ粗雑な調整の甕

甕C シャープな端部調整とハケ目調整を多用する器壁の薄い甕

甕D 口縁端部をツマミ上げ、ハケ目調整を多用する甕

D-1型式 シャープで短い端部のツマミ上げが施されるもの

D-2型式 上方に拡張気味の端部を長くツマミ上げるもの

D-3型式 D-2型式よりも長く端部をツマミ上げるもの

甕E 器壁の厚い甕。ハケ目調整は外面の一部のみ

E I形式 口縁部器壁に斜交する直立気味の端面をもつもの

E II形式 口縁部器壁に直交する端面をもつもの

E II-1型式 端面がやや窪んだ平坦面をなすもの

E II-2型式 端面が丸味をもつもの

甕F 器壁が薄く頸部が緩やかに外反するもの。ハケ目調整を多用する

羽釜A 頸部が緩く外反する甕形の器体に長く伸びる鍔部を伴うもの

羽釜B 甕D・Eの体部上半から頸部にかけて鍔を貼付するもの

B-1型式 甕D-1型式に鍔を付するもの。頸部と鍔基部が明確に分離する。

B-2型式 甕D-2型式に鍔を付するもの。頸部と鍔基部が明確に分離する。

B-3型式 甕D-3型式に鍔を付するもの。頸部と鍔基部が明確に分離する。

B-4型式 甕E I形式に鍔を付するもの。頸部と鍔基部が近接もしくは一体化する。

羽釜C 短く直立する頸部と水平に太く伸びる鍔部からなるもの

C I形式 口縁部と鍔部の外面が緩やかにカーブして連続するもの。菅原正明氏の摂津C 2型

C I-1型式 口縁部と鍔部長がほぼ同じで、両端部に明確な平坦面を作るもの

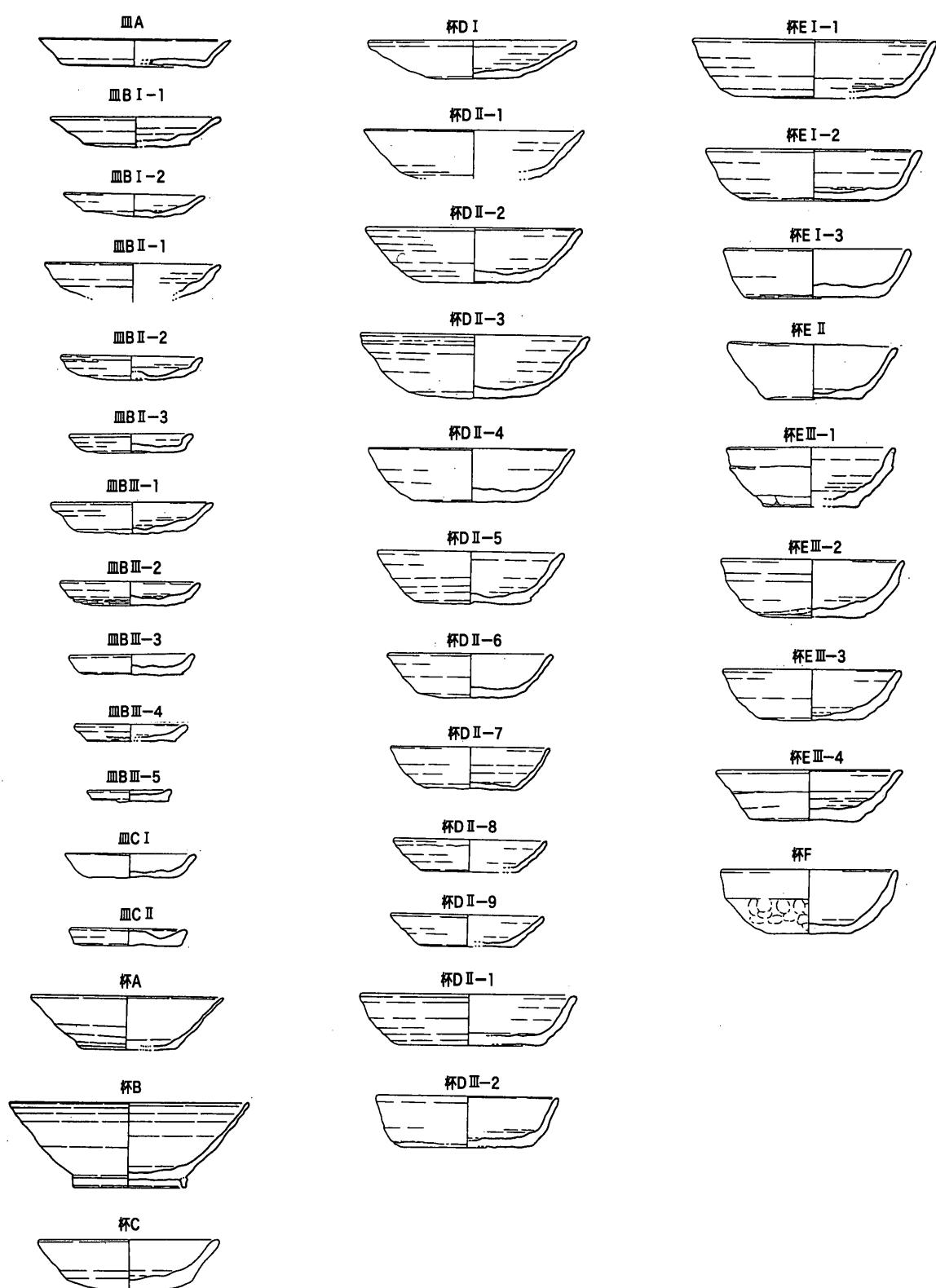
C I-2型式 鍔部の方が長く、口縁・鍔の端部に平坦面をもつもの

C I-3型式 鍔部の方が長く、内傾して丸く収まる口縁端部をもつもの

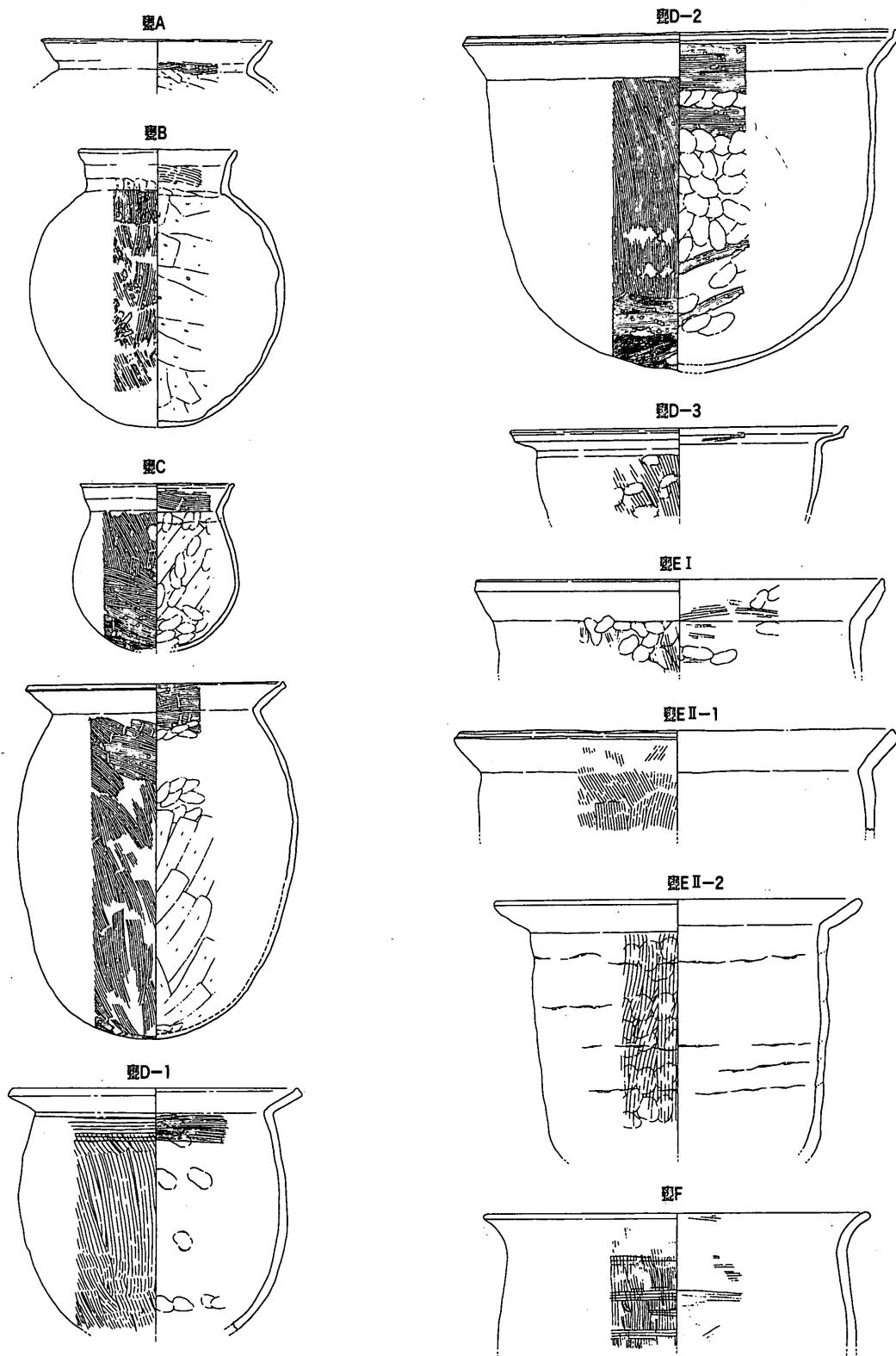
C II形式 口縁部と鍔部の外面が比較的明瞭に屈曲するもの

C II-1型式 内傾して丸くツマミ出される口縁端部をもつもの

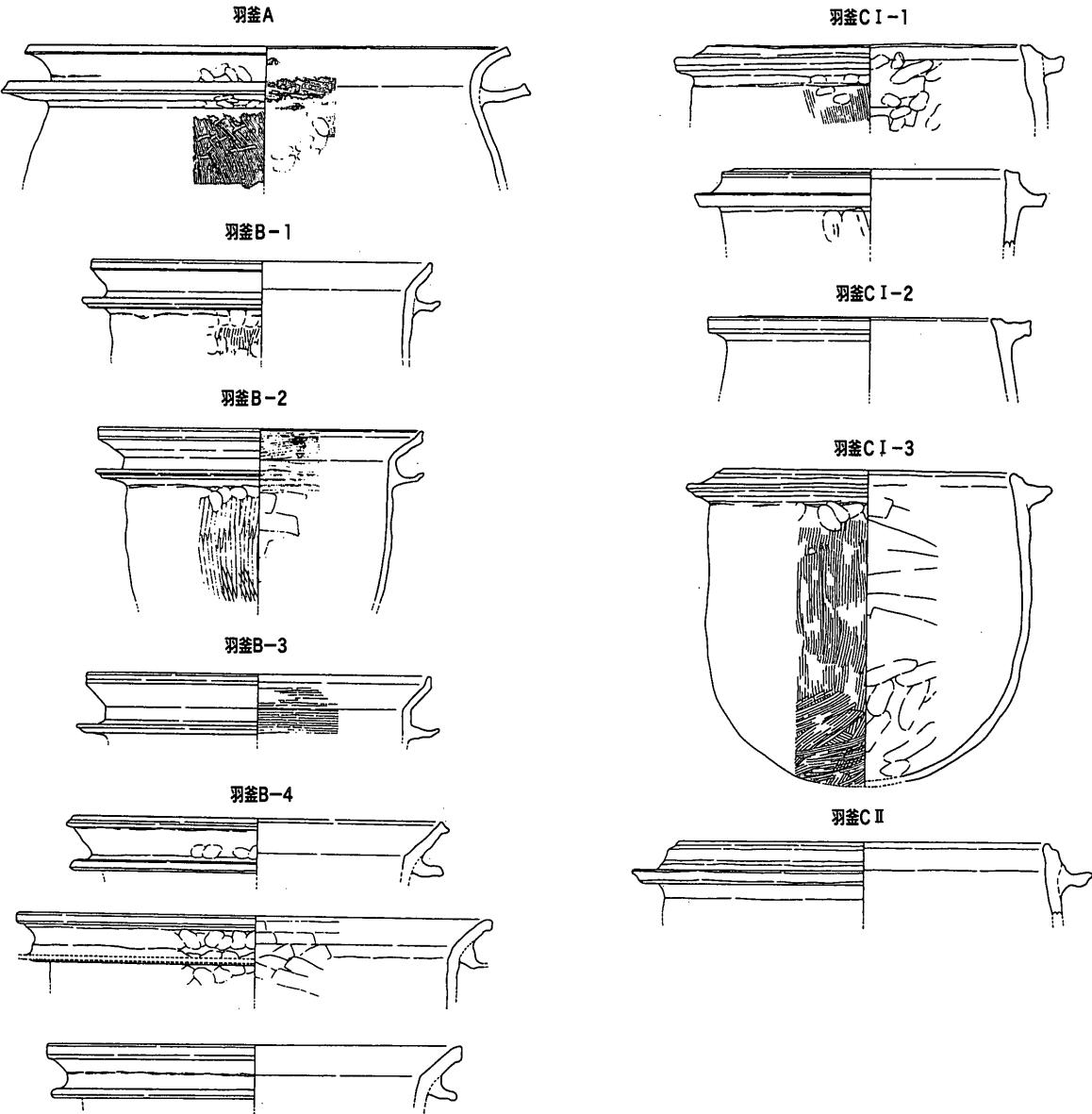
C II-2型式 平坦な口縁端部と鍔端部をもつもの



第403図 器種分類図 (1) 土師質土器皿・杯 (1/4)



第404図 器種分類図 (2) 土師器甕 (1/6)



第405図 器種分類図（3）土師器羽金（1/6）

(3) 土師質土器鍋・足釜の分類

佐藤1995に依拠し、該当しないものについては個別に記述する。

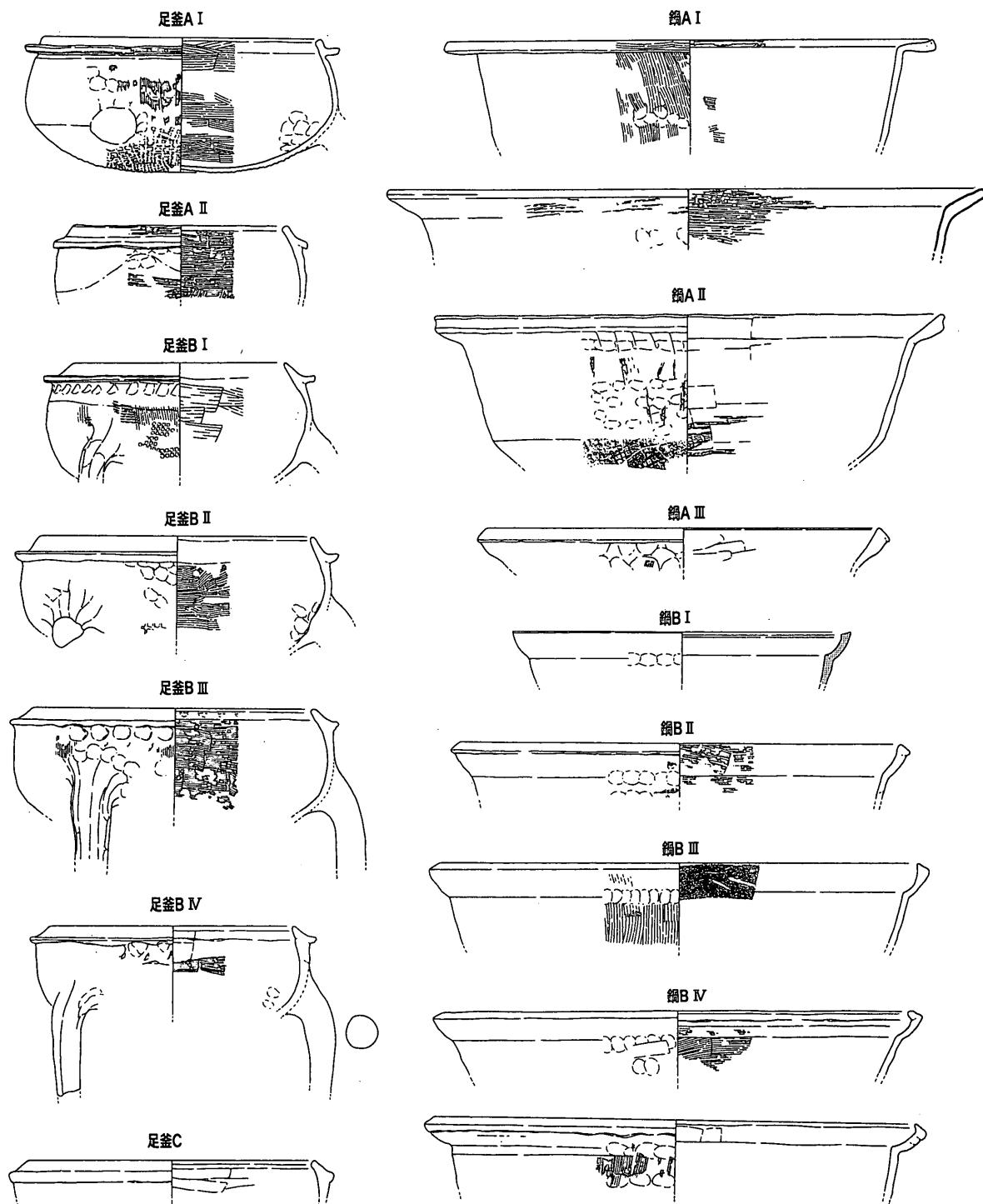
(4) 須恵器の分類

佐藤1993に依拠するが、今回、十瓶山窯産須恵器椀A IIならびに共通した形態・技法を伴う黒色土器椀、平高台をもつ椀B、鉢D・E、壺C、甕Cについて細分を行った。また、西村2号窯跡出土須恵器の再整理で存在が明確になったヘラ磨き調整を施す杯については、新規の形式を設定した。

椀A 輪高台を貼付する椀。

A II形式 内面に板ナデ調整と、特徴的な回転ヘラ磨きを施すもの

A II-1型式 直立気味の口縁部・体部上半と、大きく内弯する体部下半をもつ「深椀」形態。径高指数44前後。高台高1.0cm前後、同径7.8cm前後。内面板ナデ（コテあて）後、見込み複数方向の平行磨き、体部内面6分割磨き。外面の磨きなし。



第406図 器種分類図（4）土師質土器足釜・鍋（1/6）

A II - 2 型式 口縁部から体部下半まで同じカーブで内弯（口縁部はやや直線的）。径高指数41～45。高台高0.6cm前後、同径7.0cm前後でA II 1よりも小振り。内面板ナデ後、見込み複数方向の平行磨き、体部内面6分割磨き。外回転磨きと体部下半に回転ヘラ削り。

A II - 3 型式 口縁部から体部下半まで同じカーブで内弯（口縁部やや直線的）。径高指数39～43。高台高0.6cm前後、同径6.0～6.5cmでA II 2よりも小振り。内面板ナデ後、見込み一定方向の平行磨き、体部内面4分割磨き。外回転磨きと体部下半に回転ヘラ削り。

A II - 4 型式 口縁部から体部下半まで同じカーブで内弯（口縁部が直立気味）。径高指数34～38。高台高0.6～1.0cm、同径6.0～7.0cmでA II 3と同じかやや大振り。内面板ナデ後、見込み平行磨き、体部内面4分割磨き。外回転磨きと体部下半に回転ヘラ削り。

A II - 5 型式 口縁部～体部上半は直線的に外傾、体部下半は内弯。径高指数33～36前後。高台高0.6cm前後、同径5.5～6.0cm前後でA II 4よりもやや小振り。内面板ナデ後、見込み平行磨き、体部内面に斜放射状もしくは円弧状の磨き。外回転磨きで、体部下半の削りなし。

A II - 6 型式 口縁部～体部下半は外傾気味に緩く内弯。径高指数31～33。高台高0.6cm、同径5.0cm台でA II 5よりも小振り。内面板ナデ後、体部から底部にかけて斜放射状もしくは円弧状の磨き（見込みと体部内面の磨きが一体化）。外回転磨きで、体部下半の削りなし。

A II - 7 型式 口縁部～体部下半は外傾気味に緩く内弯。径高指数31～32。高台高0.6cm、同径5.8cm前後でA II 6と同じ。内面板ナデ後、無調整（磨きなし）。外回転磨きで、体部下半の削りなし。

A II - 8 型式 口縁部～体部上半は外傾気味に緩く内弯する。径高指数31～33。高台は粘土紐を押し潰したような形態で粗雑に貼付され、径4.0～5.5cm前後。内面板ナデで、内外面ともにヘラ磨きなし。

A II - 9 型式 口縁部～体部上半は外傾気味に緩く内弯。径高指数29～34。体部下半に弱い屈曲部をもつ。高台は突帯状に矮小化し、径4.5～5.0cm。内面粗いハケ目状の板ナデ。

A II - 10 型式 杯形の器体に高台を貼付。径高指数26～30。体部下半に明瞭な屈曲部をもち、この部分までヘラ切りされている。高台は粗雑で不定形。内面粗いハケ目状の板ナデ。

椀B 平高台をもつもの

B - 1 型式 ヘラ削り調整による明瞭な平高台をもつもの。底部から直立気味に屈曲して体部下半に立ち上がるため、見込みが窪んでみえる。

B - 2 型式 B - 1 同様の平高台をもつが、底部から体部下半の立ち上がりが連続的であるため、見込みが窪んでみえない。

B - 3 型式 調整が粗雑でやや低い平高台をもつもの。底部と体部は連続的

B－4型式 不明瞭で痕跡的な平高台状の底部をもつもの。

杯C ヘラ磨き調整を施す杯

鉢D 外反する口頸部をもつ鉢

D－1型式 頸部の屈曲が明瞭で、口縁端部を上方に長くツマミ出すもの

D－2型式 頸部の屈曲が明瞭で、口縁端部を上方に短くツマミ出すもの

D－3型式 頸部の屈曲がやや緩やかで、口縁端部を上方に短くツマミ出すもの

D－4型式 頸部の屈曲が緩やかで、口縁端部はツマミ上げず、やや肥厚するもの

鉢E 口縁部が屈曲せず、体部から連続して伸びる鉢

E－1型式 口縁部にやや丸味を帯びた外傾する平坦面をもつもの

E－2型式 口縁部の外傾する平坦面の外側がわずかに横方向に挽き出されるもの

E－3型式 口縁部端面の外側が明瞭に横方向に挽き出されるもの

E－4型式 口縁部端面の両側が明瞭に挽き出されるもの

E－5型式 口縁部外面直下が強くナデ調整され、端面外側が相対的に肥厚するもの

E－6型式 口縁部端面に凹面が作られるもの

壺C 大きく外側に開く口頸部をもつ長胴の瓶

C－1型式 口縁端部が長く上方にツマミ出され、体部最大径が体部上半1/5付近の部位にある、肩の張った形態をもつもの

C－2型式 口縁端部が短く上方にツマミ出され、体部最大径が体部上半1/3付近の部位にある、ややなで肩の形態をもつもの

C－3型式 口縁端部が上方にツマミ出されず、外傾する平坦面をもつもの。体部形態はC－2型式と同じ

C－4型式 口縁端部が丸味を帯び、頸基部の屈曲が不明瞭なもの

甕C 短く外反する口頸部をもつ長胴平底の甕（森浩一氏のいう十瓶山式甕）

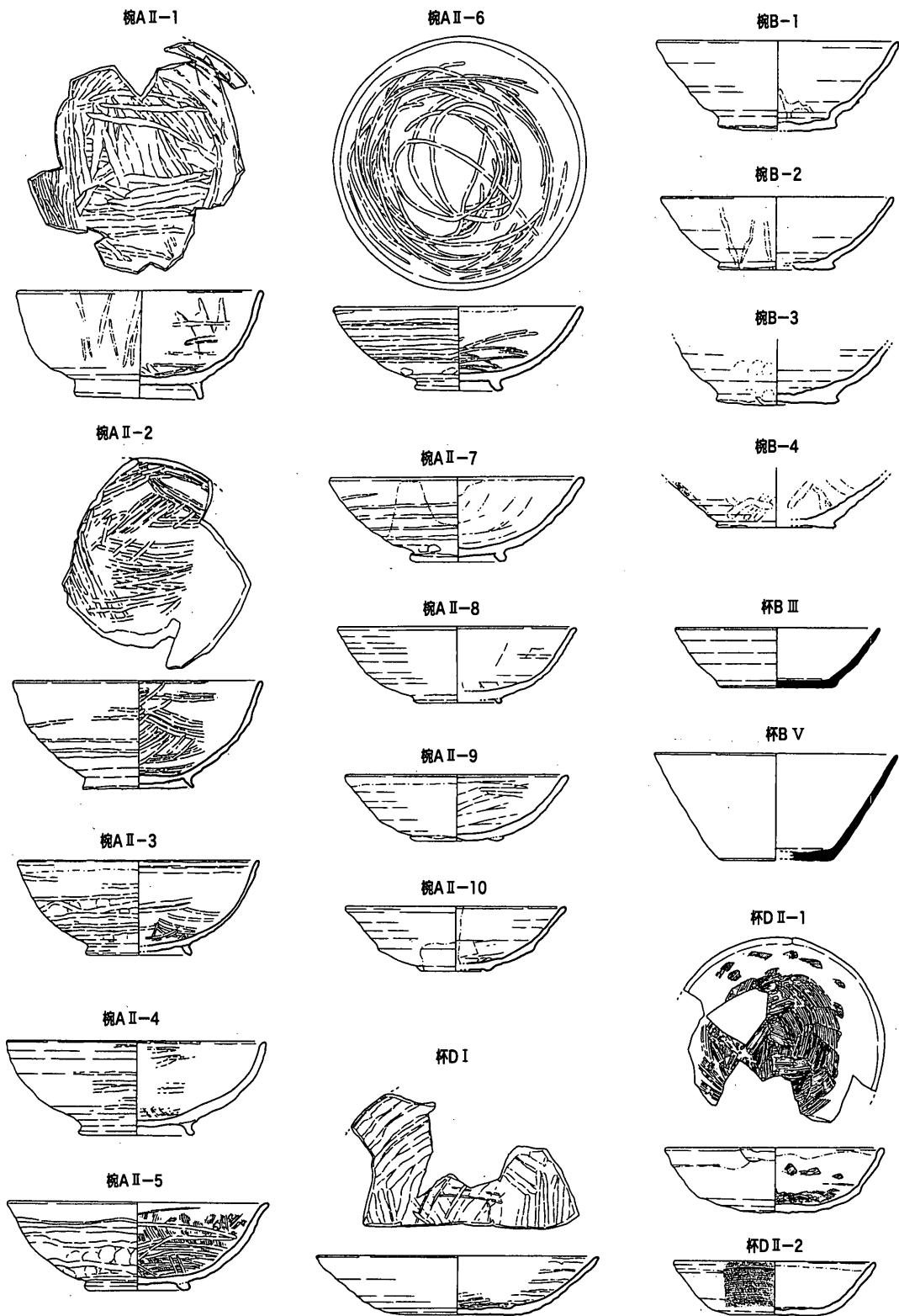
C－1型式 比較的長い口頸部をもち、口縁端部を横方向にシャープに挽き出すもの。頸基部は体部から明瞭に屈曲

C－2型式 C－1型式よりもやや短い口頸部をもち、口縁端部を横方向にわずかに挽き出すもの。端面には弱い凹面がある。頸基部は体部から緩やかに屈曲

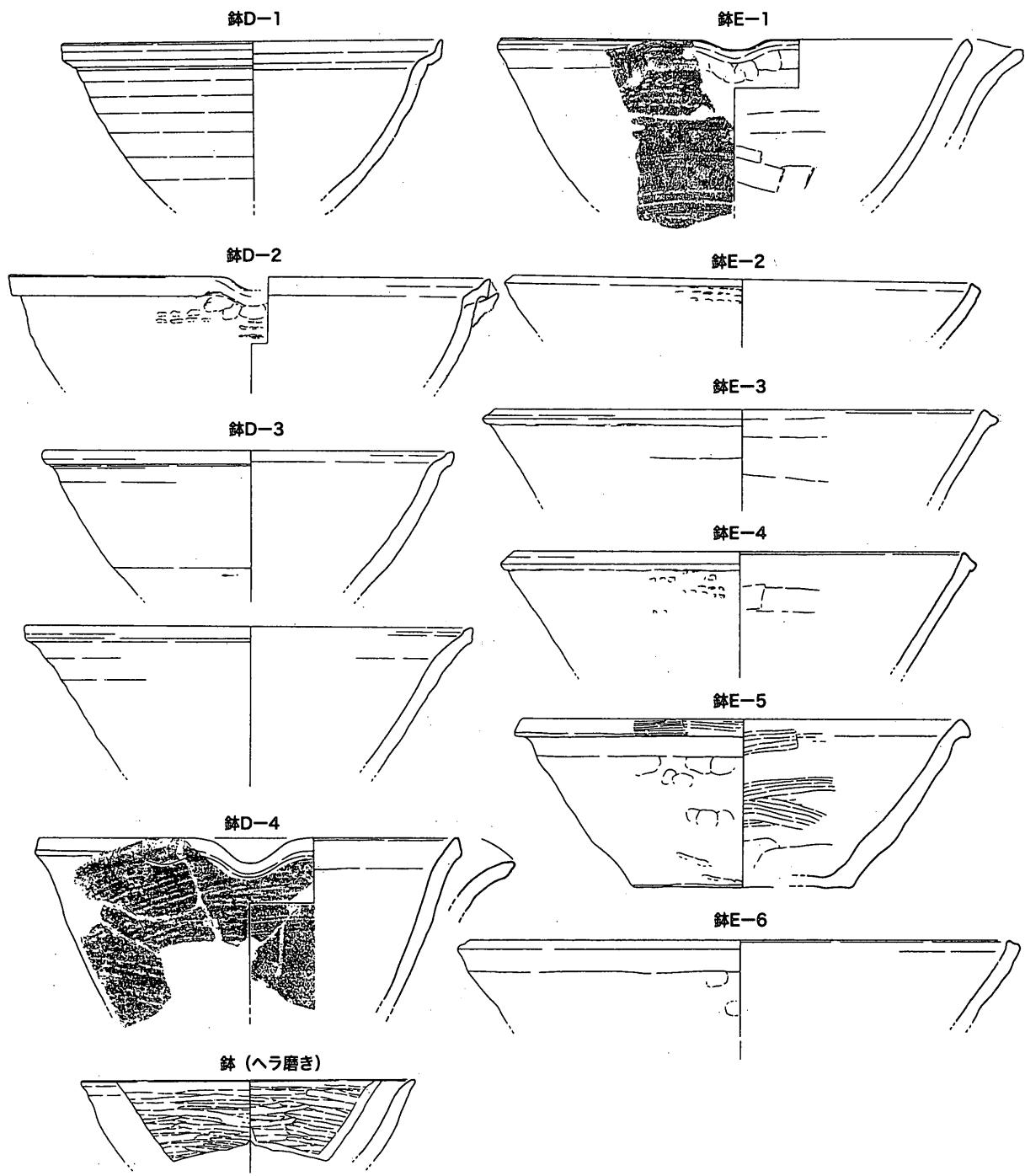
C－3型式 口縁端部を挽き出さず、外傾する平坦面とするもの。頸基部の形態はC－2型式と同じ

C－4型式 口縁端部が口頸部に斜交して直立気味の面をなすもの

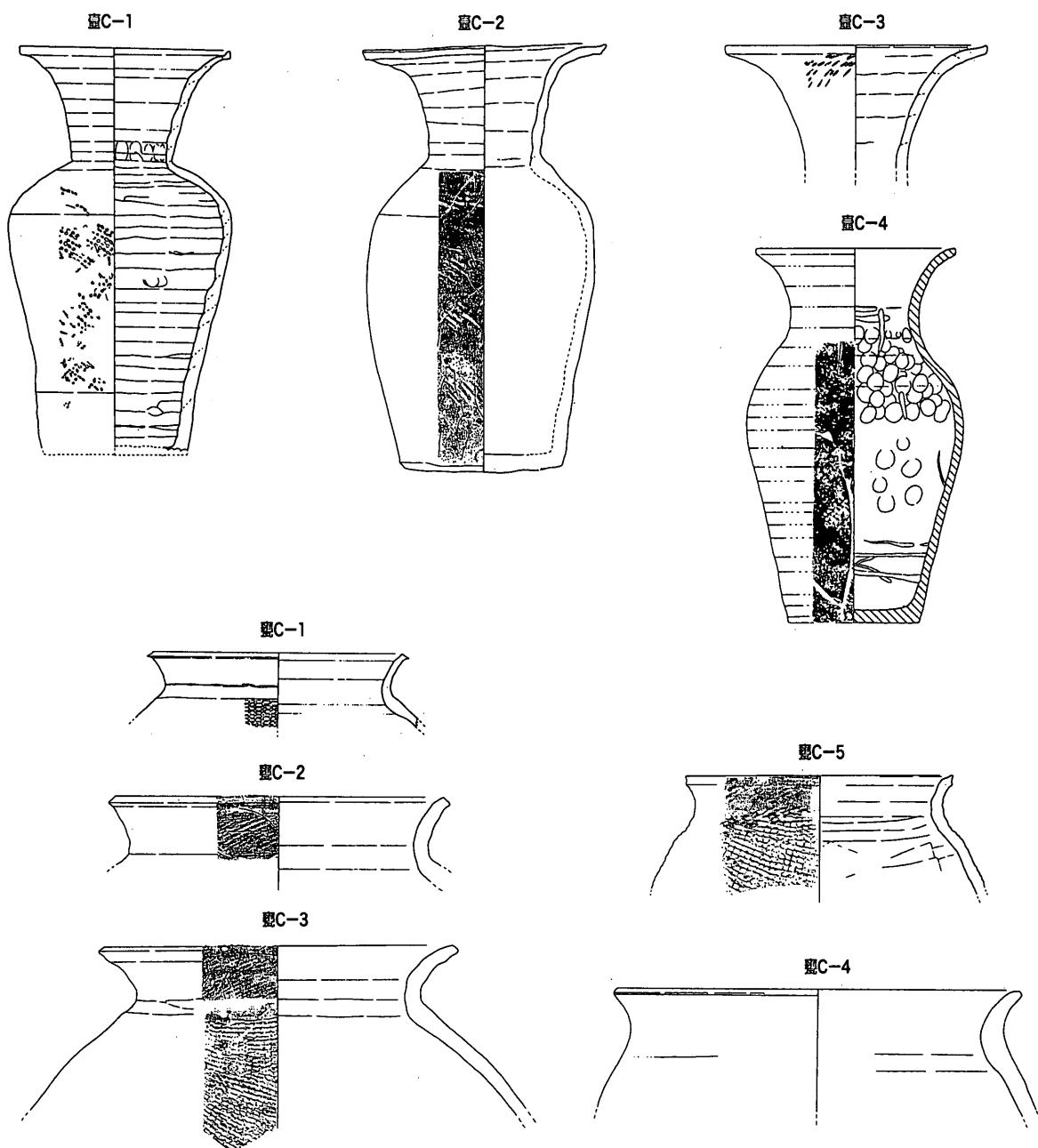
C－5型式 口縁端部が丸味を帯びて頸基部の屈曲が不明瞭になるもの



第407図 器種分類図 (5) 須恵器杯・椀, 黒色土器椀 (1/4)



第408図 器種分類図 (6) 須恵器鉢 (1/4)



第409図 器種分類図 (7) 須恵器壺・甕 (1/6)

3. 高松平野南部における中世前半の土器群

(1) 空港跡地遺跡での対象土器群と出土状況

今回報告した中世前半の区画を伴う屋敷地から出土した土器群には、出土状況と安定した出土量から編年作業の基準資料としての扱いが十分可能な資料が多くみられた。それらは以下の通りである。

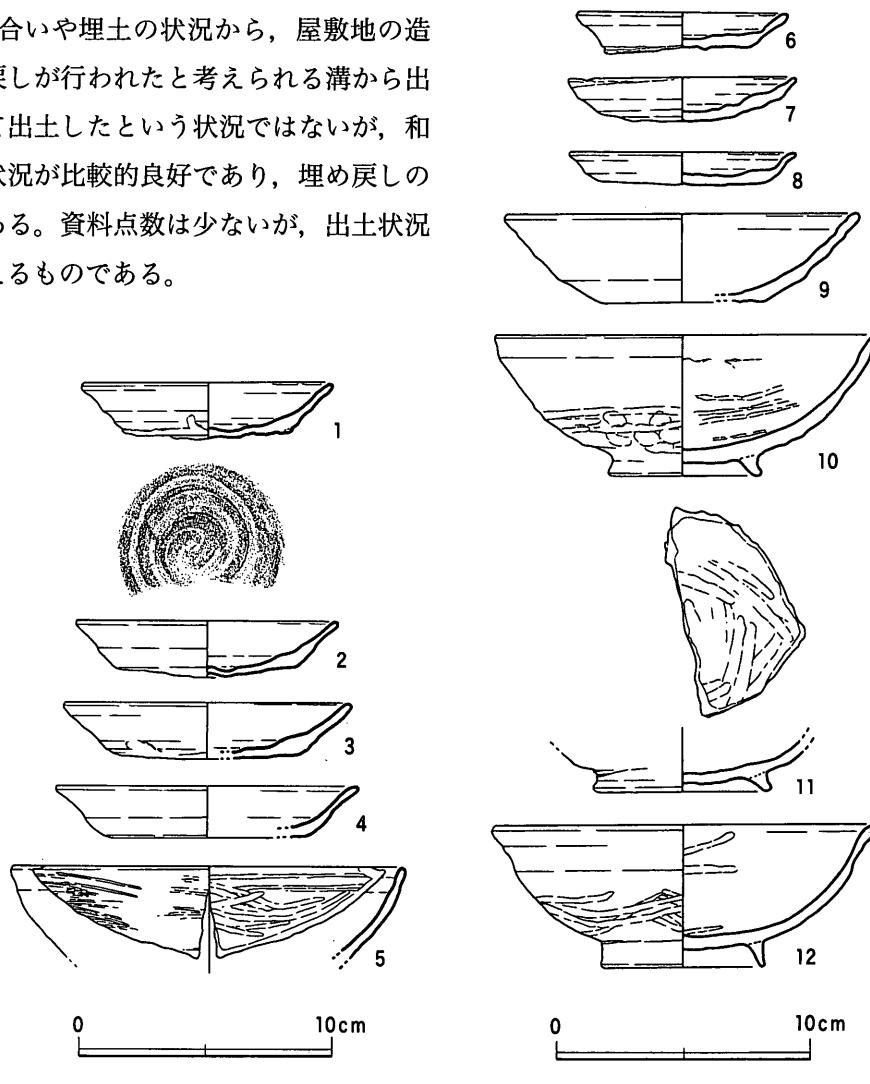
- a) S D f32 出土土器
- b) S T f01 出土土器
- c) S D f16 上層・中層・下層出土土器
- d) S D f19 出土土器
- e) S Tf01 出土土器
- f) S D f48 下層出土土器

詳細は第3章第3節の報告に譲るが、ここで再度出土状況を確認しておく。

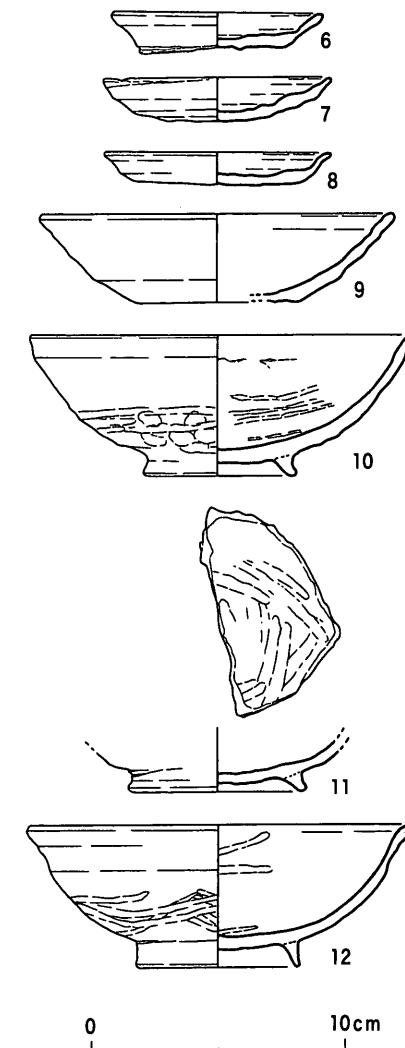
a)は小区画溝との切り合いや埋土の状況から、屋敷地の造成に伴って人為的な埋め戻しが行われたと考えられる溝から出土した。1箇所に集中して出土したという状況ではないが、和泉型瓦器碗も含めて遺存状況が比較的良好であり、埋め戻しの際に投棄された可能性がある。資料点数は少ないが、出土状況からまとまった資料といえるものである。

b)は屋敷地東部の屋敷墓から出土した土器である。礫敷きの火葬施設をそのまま墳墓としており、礫敷き上面から土師質土器杯・瓦器碗・白磁碗などが出土した。土師質土器杯・瓦器碗は二次的な被熱痕跡が明瞭に認められることから、火葬の際に副葬されていたものと推測でき、一括資料としての要件を備えているといえる。

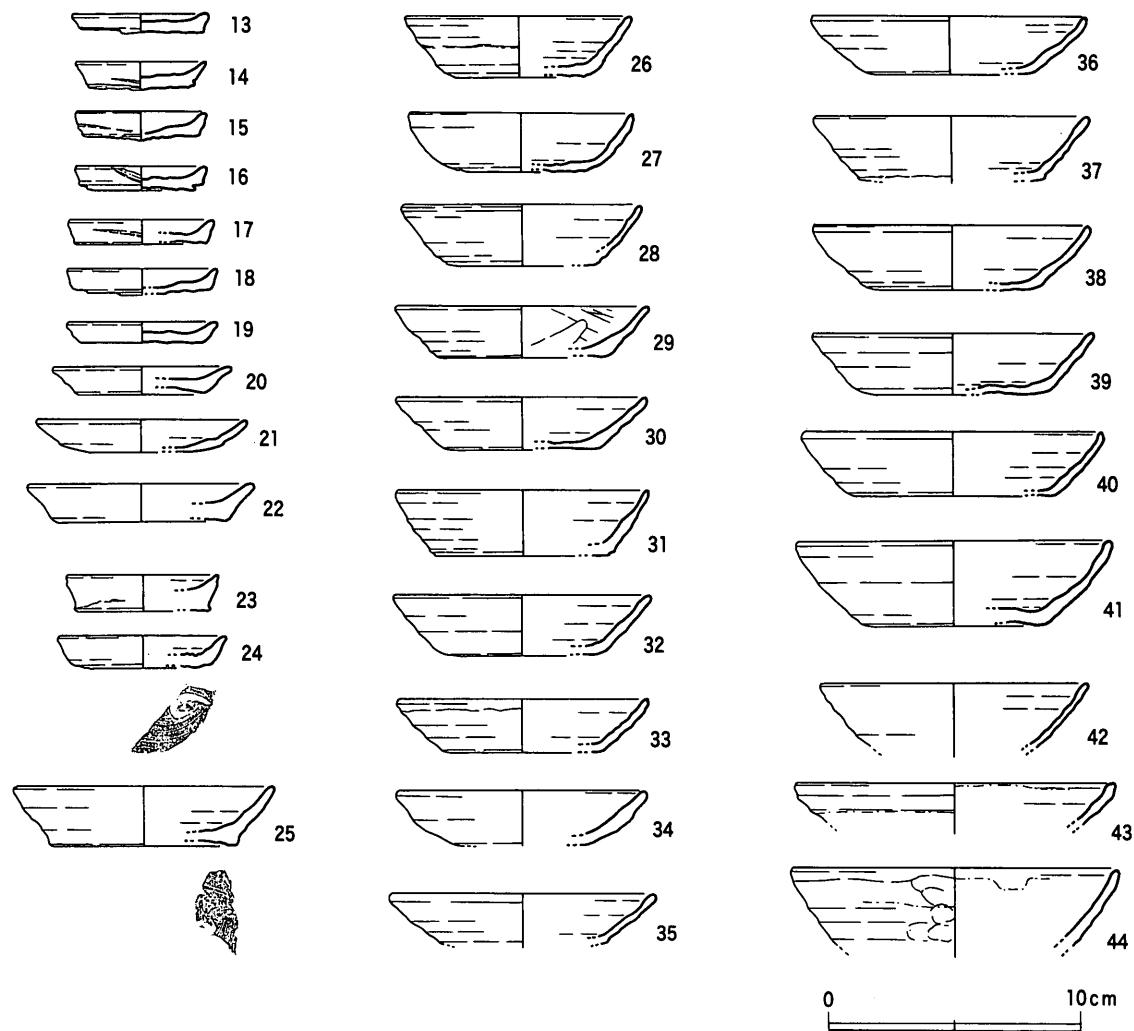
c)は屋敷地西側の区画溝で、明確に3つに区分できる土層に伴



第410図 SPi122出土遺物 (1/3)



第411図 SPi121出土遺物 (1/3)



第412図 Skc77出土遺物 (1/3)

って出土した土器群である。下層は滯水状態を示す黒色系の粘土であり、その直上の中層は一定の水流があったことを示す砂層もしくは混砂層である。さらにその上の上層は、周囲からの流れ込みを主体とするシルト層である。堆積の状況が各層位で異なるため、層を超えた遺物の混在が起こる可能性は否定できず、この遺構のみの所見を普遍化するのは困難である。しかし、特に上層と中層についてはある程度まとまった廃棄の状態で出土していることから、検討の対象とする。

d)は屋敷地中心部の西側の小区画溝であり、幅・深さともに小規模であるが、遺物は完形品もしくは残存率の高いものが多く出土している。一定程度の時間幅を見込む必要はあるかもしれないが、基準資料に準じて扱う。

e)は区画内の屋敷墓から出土した土器群である。墓壙底面から出土した完形品と、埋土中に多量に含まれた破片とに分けられるが、埋没に時間差があるとは考えられず、短期間のまとまった一括資料として位置付け、検討資料とする。

f)はc)の北側延長部 (SDf16 (III-2区)) を切り込む区画溝から出土した土器群である。

この他、既報告もしくは概報で実測図の提示が行われたもので、今回の検討資料として加えたものがある。詳細は各報告書・概報を参照されたい。

第7表 高松平野各遺跡における形式・型式の組み合わせ

パターン	出土遺構	須恵器・黒色土器椀										捏鉢 D E			
		Ⅲ B	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	杯 D	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ
1	S P i 121														
2	SD f32														
3	東山崎・水田E区SD 03														
4	SD f16 下層														
5	SD f01														
6	SD f16 中層														
7	SD f19														
8	六条・上所SB 03														
9	ST f02														
10	SD f16 上層														
11	前田東・中村SX 04														
12	SD f48 下層														
13	SK c 77														
14	百相坂SX 08														
15	薬王寺SE 03														

g) S P i 122 (空港跡地・Ⅲ) ピットへの一括埋納

h) SK c 77 (空港跡地・Ⅰ) 素掘り井戸内からの出土

(2) 形式・型式の組み合わせと組列

形式・型式の組み合わせ 各遺構出土土器の型式の組み合わせをまとめたのが、第7表である。量的に安定して出土する土師質土器皿B、杯Dに着目すると、6つのパターンに区分することが可能である。仮にパターン1～6と呼称しておく。各パターンで明確に型式の組み合わせが異なるのは、皿BⅢ・杯DⅡのみであるが、皿BⅡ、十瓶山産椀AⅡの組み合わせ、また杯EⅢ、十瓶山産須恵器杯と捏鉢D・Eの存否については、複数のパターン毎に異なる。

型式組列 SD f16での層位関係から、パターン3→4→5が確定できる。またⅢ-1区部分の北側延長部にあたるⅢ-2区部分がSD f48によって切り込まれているので、パターン5→6も認めることができる。以上から、パターン3→4→5→6という序列が認定できる。パターン1・2については明確でないが、SD f32はSD f19に切り込まれているので、パターン2→4は確実である。パターン2・3の時間的関係を示す遺構・層位は得られていないが、見通しとしてパターン1→2→3という順序を想定しておきたい。

以上の前提に立ち主要器種の型式組列を整理すると、以下のようなになる。

土師質土器皿BⅡ-2→3

皿BⅢ-2→3→5

杯DⅡ-1→3→4→5→6

→7→8

十瓶山産黒色土器・須恵器椀AⅡ-4→

7・8→9

(3) 周辺遺跡との比較

空港跡地遺跡で想定した形式・型式の組み合わせが、周辺遺跡でも確認できるか検討する。

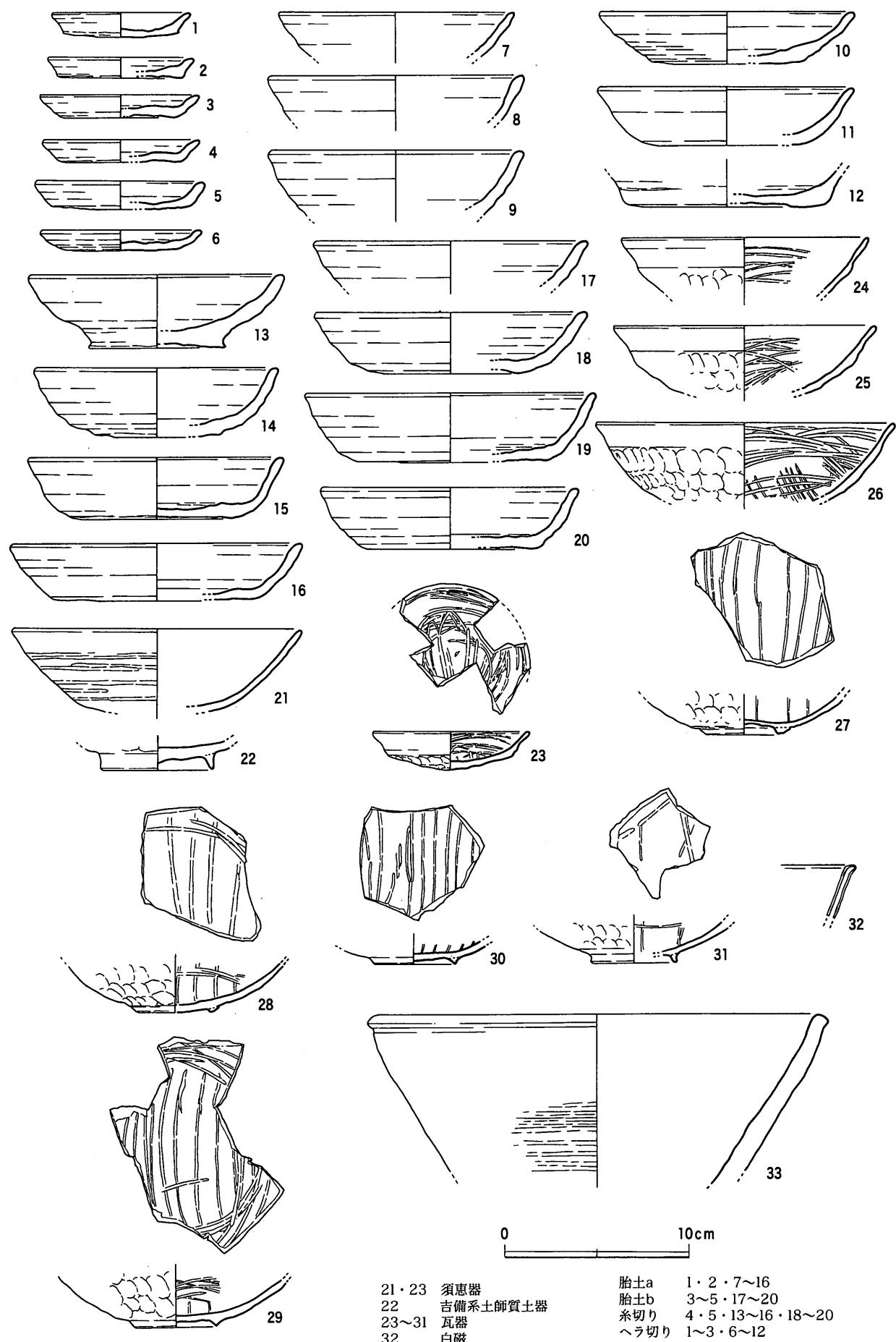
同一小地域の遺跡 空港跡地遺跡と同じ山田郡に属し、郷名は異なるが同じ古川（春日川支流）水系の微高地上に位置する六条・上所遺跡 S B 03 柱穴出土土器を取り上げる。土師質土器皿 B I - 3・B III - 3, 杯 D II - 5 が出土しており、法量的にはまとまった土器群である。皿 B 形式には、系統の異なる 2 群の小皿が存在するが、形態的な差異を超えて口径が同じ点であることが注目される。杯 D II - 5 は、胎土・技法・焼成を同じくする一群で構成されており、空港跡地遺跡の杯 D II - 5 と同じ系統と思われる。これらは、パターン 4 と同じ内容をもつといえる。

近接する小地域の遺跡 山田郡に属するが、春日川を隔てた別の小地域に位置する遺跡の資料を取り上げる。まずは春日川に接した低地部に所在する、東山崎・水田遺跡 E 区第 1 面 S D 03 出土の土師質土器をみてみる。皿・杯の胎土は、砂粒を多く含むもの（胎土 a）と、砂粒をさほど含まない精良なもの（胎土 b）に分かれる。胎土 b は明黄褐色系と暗褐色系に分かれ、明黄褐色系のものは空港跡地遺跡でみられるものに近い。一方、底部切り離し技法はヘラ切りと糸切りがあるが、胎土 a の色調の違いとは一致せず、明黄褐色系も暗褐色系も両技法が混在する。また形態も色調の違いと対応しない。このため、胎土 b 以外は一括して取り扱う。皿・杯の型式には、皿 B III - 2・3, 杯 D II - 4, E I - 1・2 がある。糸切り底の杯 E I 形式の法量にややばらつきがみられるが、皿 B IV 形式・杯 D II 形式の口径にはまとまりが読み取れる。これらから、空港跡地遺跡のパターン 3 と共通した型式組成といえる。伴出した十瓶山窯産須恵器碗（A II - 8）や和泉型瓦器碗（III - 2～3 期）とも矛盾しない。

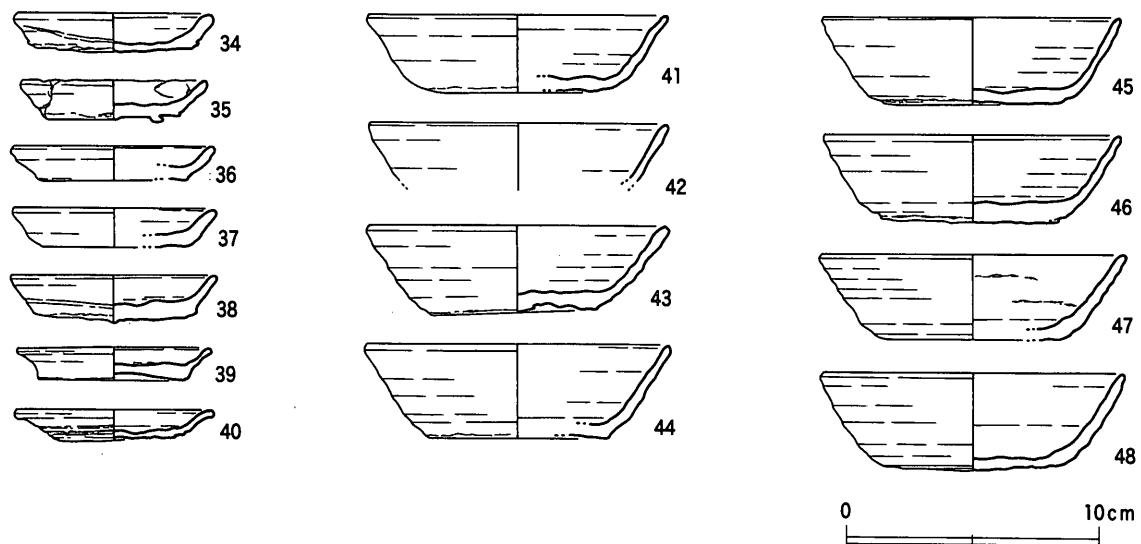
次いで丘陵部に立地する前田東・中村遺跡 S X 04 出土土器を取り上げる。土師質土器皿 B III - 4, 杯 D II - 6 形式・D III - 2 形式の他、十瓶山窯産須恵器杯、青磁碗 I - 5 b 類、土師質土器足釜がある。土師質土器皿 B 形式と杯 D II 形式は、空港跡地遺跡出土資料に似た胎土・焼成であり、比較が可能である。杯 D III 形式が多いことが空港跡地遺跡とは異なるが、パターン 5 に共通しているといえよう。

やや離れた高松平野の遺跡 香東郡の百相坂遺跡 S X 08 と香西郡の薬王寺遺跡 S E 03 を取り上げる。空港跡地遺跡からの直線距離は、前者が³ 4 km、後者が 6 km である。百相坂遺跡 S X 08 出土土器には、土師質土器皿 B III - 4・5, 杯 D II - 7 の他、青磁碗 I - 4 a 類、十瓶山窯産捏鉢 E、土師質土器足釜 B II・III、鍋 A II がある。小皿・杯がパターン 6 と共通しており、伴出した捏鉢・足釜・鍋の型式も矛盾しない。薬王寺遺跡 S E 03 出土土器には、土師質土器皿 B III - 5, 杯 D II - 7・8・8'・9 の他、土師質土器足釜 B II・III、土師質土器甕 A II、東播系捏鉢などがある。これもパターン 6 と共通しているといえよう。

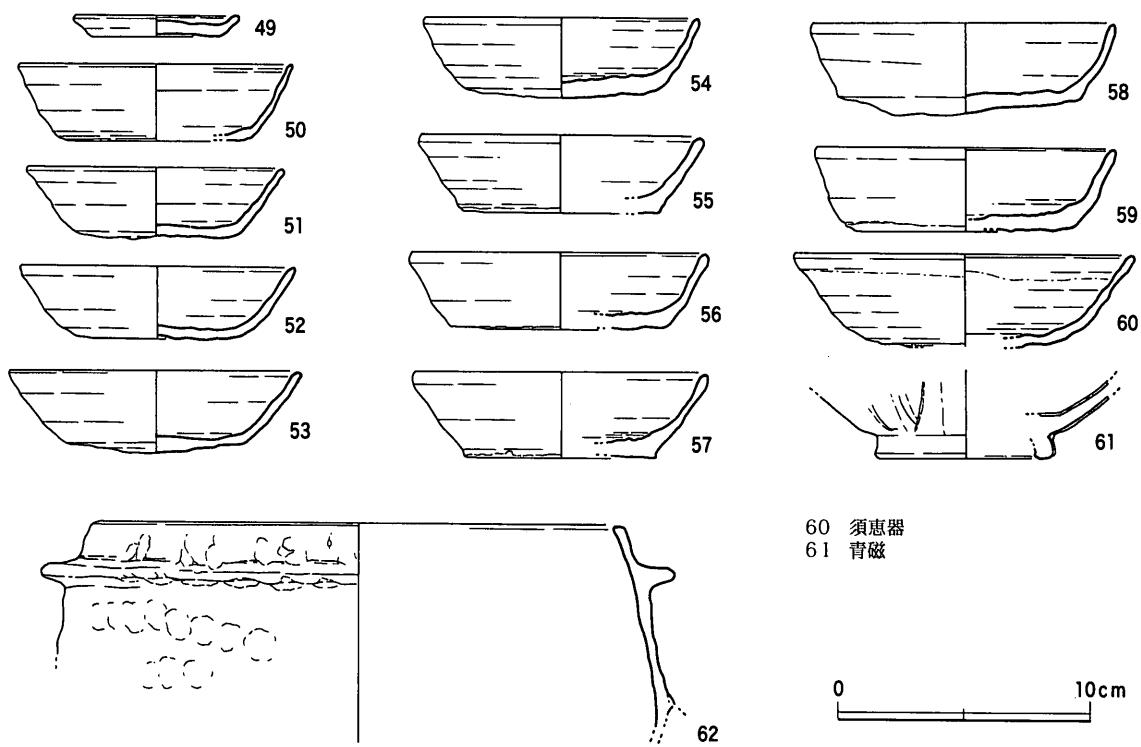
共通点と相違点 土師質土器皿 B III 形式と杯 D II 形式の細別型式内容と組み合わせについては、空港跡地遺跡周辺でも同様な型式の組み合わせ（パターン 3～6）をもつことが確認できた。伴出する土師質土器足釜 B 形式や十瓶山窯産須恵器碗 A II 形式との組み合わせも大枠では矛盾していない。肉眼観察による限り皿 B IV 形式・杯 D II 形式の胎土や焼成状況は、空港跡地遺跡、六条・上所遺跡、前田東・中村遺跡と東山崎・水田遺跡の一部では共通するものの、百相坂遺跡、薬王寺遺跡ならびに東山崎・水田遺跡の一部では異なっている。しかし、このような相違点を超えて形態・法量が共通していることが重要である。このことから、上記土師質土器小皿・杯を指標としたパターン 3～6 は、少なくとも高松平野南部では共通した範疇で捉えることが可能である。中世土器をめぐる「小地域生産」・「自給自足的



第413図 東山崎・水田遺跡E区 SD03出土遺物 (1/3)



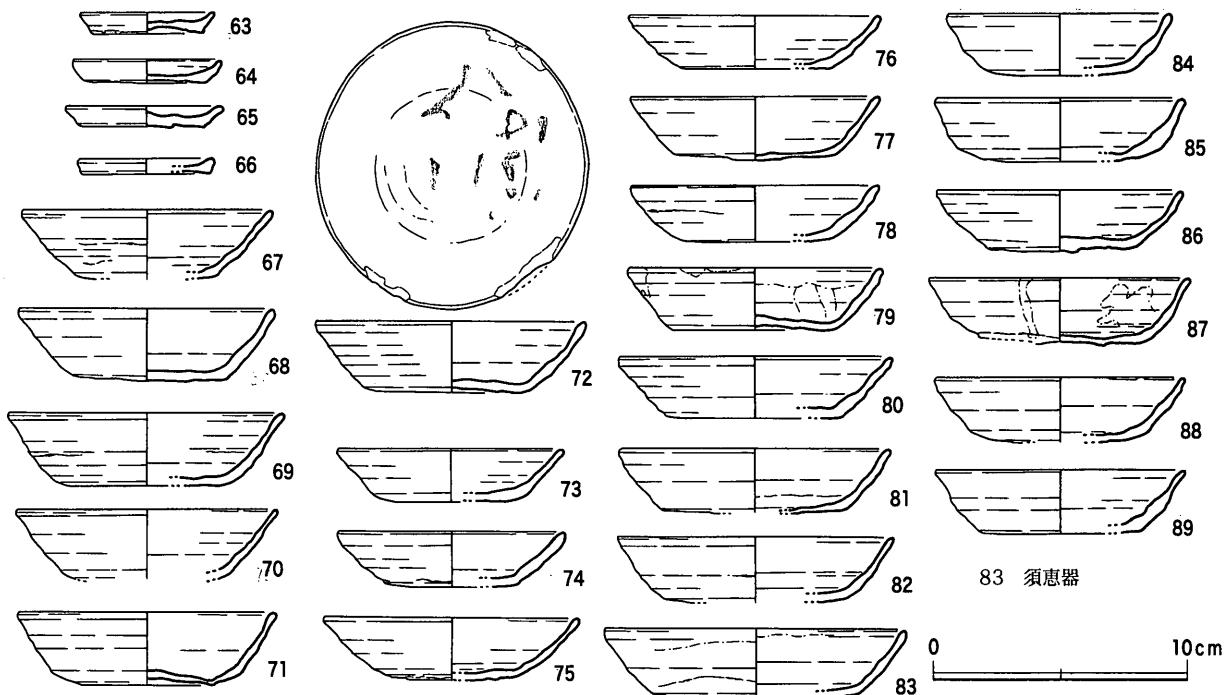
第414図 六条・上所遺跡SB03出土遺物 (1/3)



第415図 前田東・中村遺跡SX04出土遺物 (1/3)

「生産」というイメージは、少なくとも系統（生産地）・型式を適切に把握する限り、編年作業を制約する要因とはならないと考える。

反面、型式の存否については、遺跡もしくは小地域での違いを認めることができる。何より空港跡地遺跡での土師質土器杯E形式（糸切り底）の大量出土は、先行する様相の東山崎・水田遺跡以外では確認することが困難であり、当遺跡での際立った特徴といえる。また前田東・中村遺跡の杯DIII-2は、



第416図 薬王寺遺跡SE03出土遺物 (1/3)

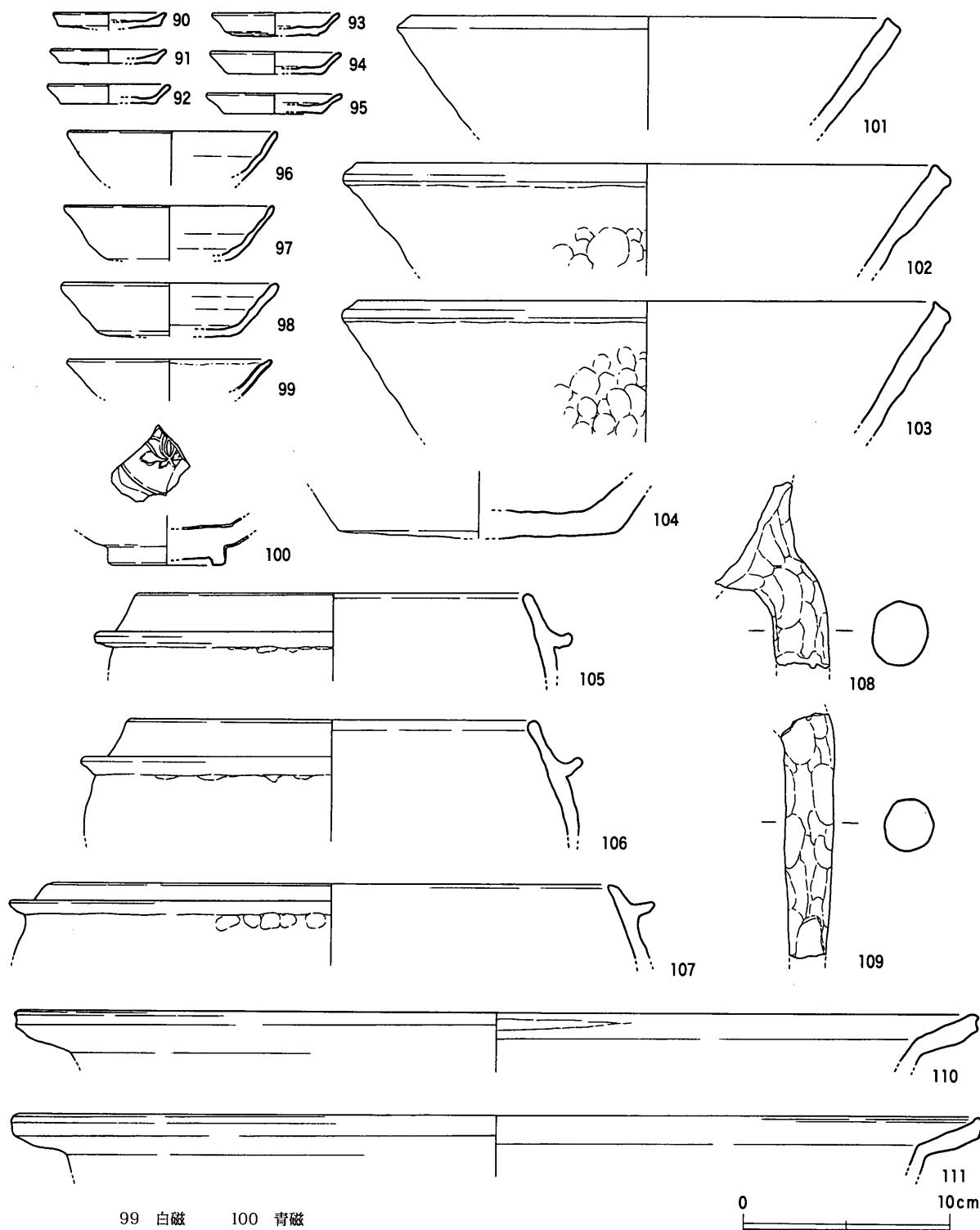
東讃地方（寒川・大内平野）の土師質土器杯に系譜をたどることができ、高松平野ではやや異質な存在である。しかしこうした違いを過大評価することは現段階では有益な議論とは考えられず、共通の時間軸の中での遺跡・地域単位の偏差（すなわち生産・流通の問題）として捉えることが望ましい。

4. 生産遺跡での様相の検討～西村遺跡～

(1) 既往の研究

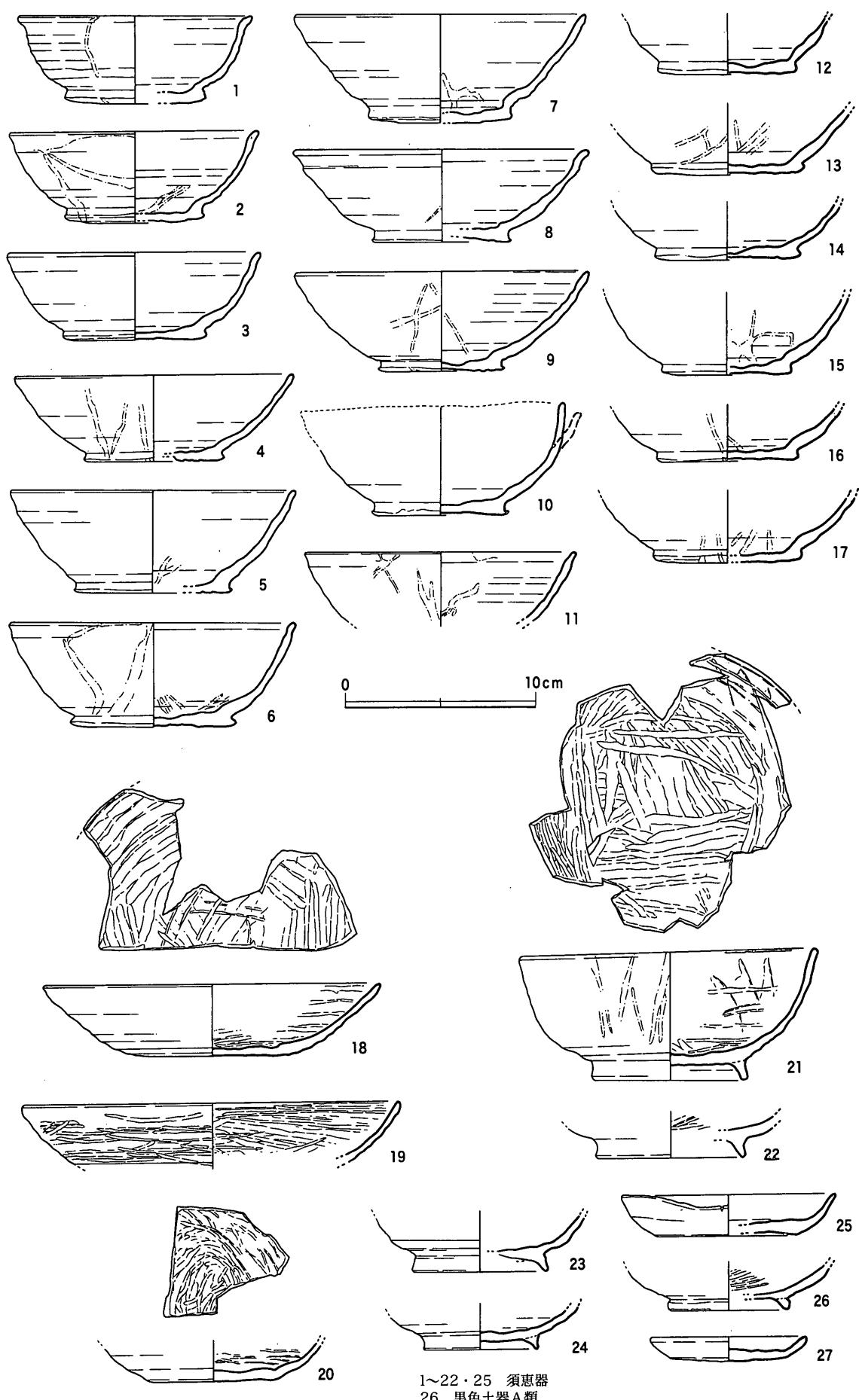
片桐氏は、西村遺跡における土師質土器杯の法量について、同時期の他地域のものよりも大振りのものが多いと指摘している（片桐1992）。その理由として、片桐氏は「西村遺跡周辺部において土師器碗・黒色土器碗・須恵器碗（瓦質土器碗）などの碗形態を作る際にこの土師器坏D（片桐氏の分類。本稿での土師質土器杯D II形式にあたる）の形態が必要になるからである」と説明している。片桐氏の議論は、土師質土器杯の法量が地域や生産地によって異なることにとどまらず、十瓶山窯産黒色土器碗・須恵器碗（以下、西村型土器碗とする）の「底部押し出し技法」にも関わる内容を含んでいるといえる。しかし筆者は、高松・丸龜平野で形態・技法を共有している土師質土器皿B III形式・杯D II形式の法量差については懐疑的である。片桐氏の指摘する現象は、西村遺跡と周辺遺跡との併行関係の認定方法に問題があるために生じた見かけ上の差異であり、実態としては法量的な違いはないと考えている。このことを以下、検討していく。

なお、前提となる西村遺跡の土器編年については、既に廣瀬常雄氏による試案が提示されている（廣瀬1982）。この編年案は、土坑出土のまとまった土器を基準資料として設定されており、大枠での変更の要はないと考える。ただ、属性分析に問題があり型式設定が不十分なこと、また型式組列の判定方



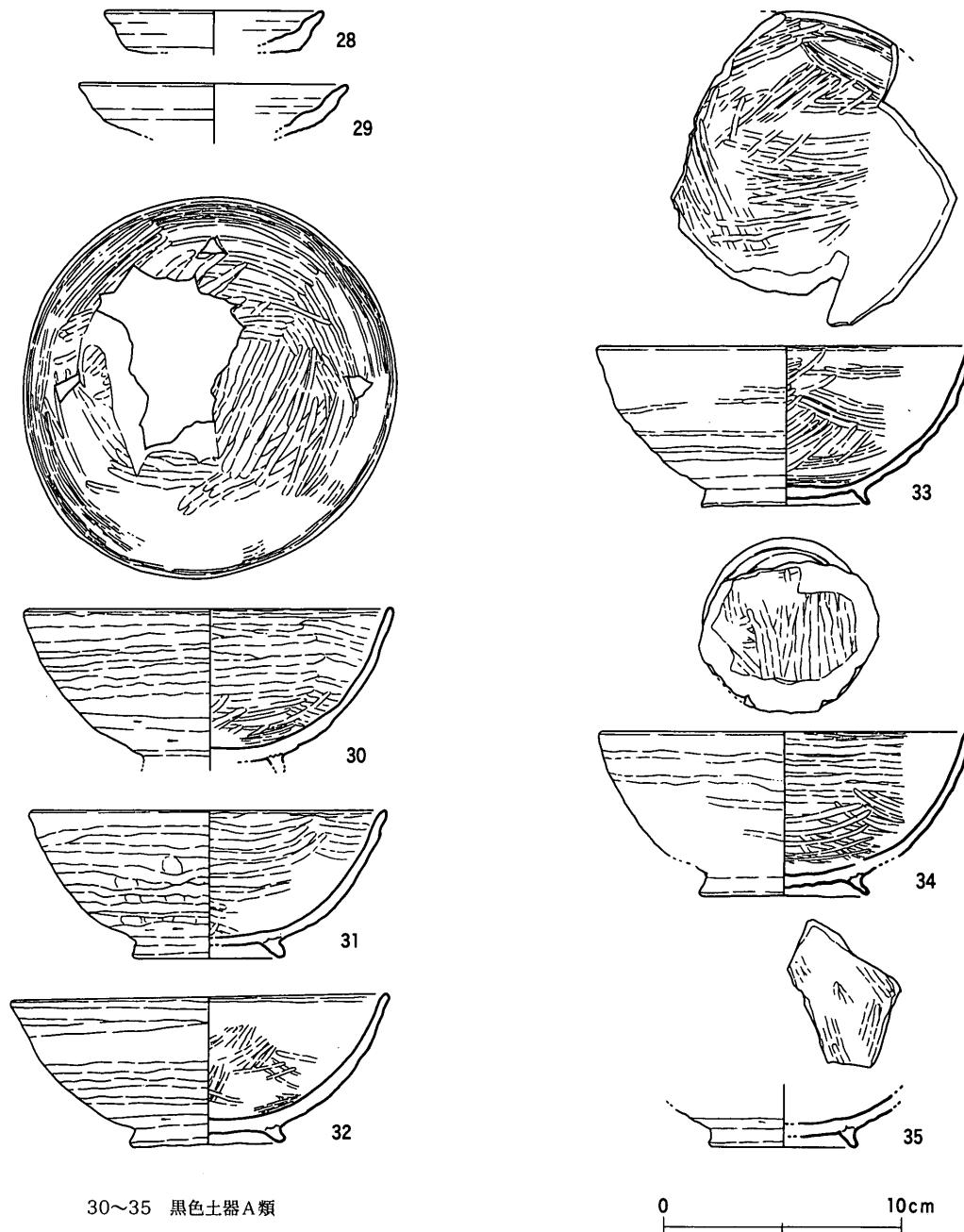
第417図 百相坂遺跡 SX08出土遺物 (1/3)

法が遺構の切り合いや層位によるのではなく、椀の属性の変化（高台の高低や磨き調整の精粗など）に依拠した、いわば経験的な直観によることが問題点として挙げられる。後者の問題点は、結果としては変化の方向を逆転するものではないと考えているが、同一時期での形態・技法の幅について、硬直的な理解を示すことにつながる危惧がある。以上の問題点と、基準資料の公表が一部にとどまっていたことから、今回いくつかの遺構出土土器について再検討を行い、その成果を提示する。本来は全ての器種に



1~22・25 須恵器
26 黒色土器A類

第418図 西村遺跡西村2号窯跡灰原出土遺物 (1/3)



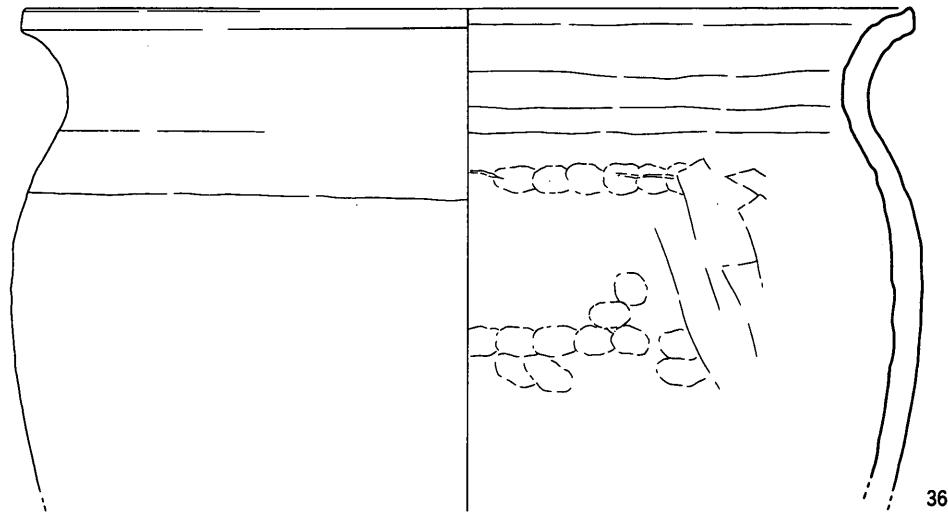
第419図 西村遺跡西村北地区N3-SK01出土遺物(1) (1/3)

についてこの作業を行うべきだが、ここでは土師質土器小皿・杯、西村型土器椀などの供膳器種を検討対象とし、須恵器捏鉢・広口壺・甕については補助的な取り扱いにとどめた。

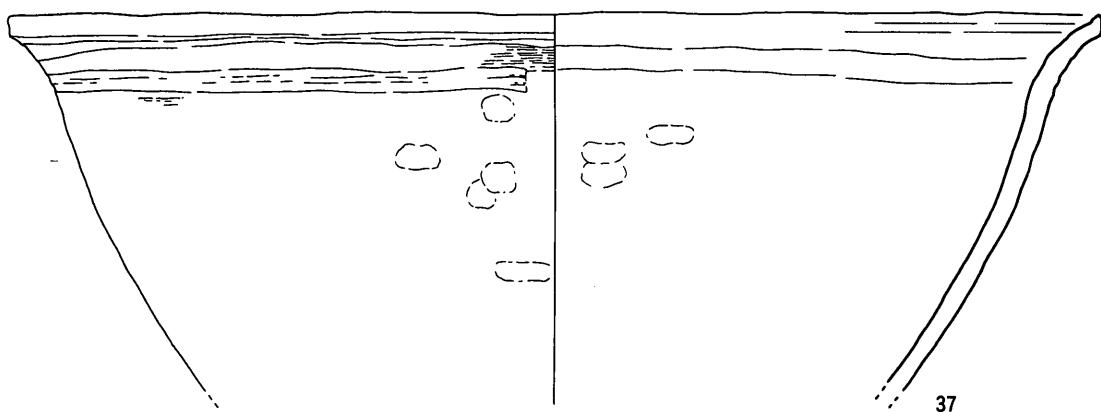
(2) 対象土器群と出土状況

ここで対象とする資料は、以下の12遺構出土土器である。

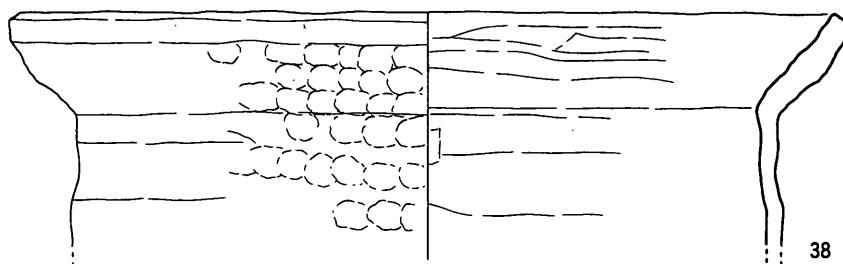
- a) 西村2号窯跡灰原出土土器
- b) 西村北N3-SK01出土土器



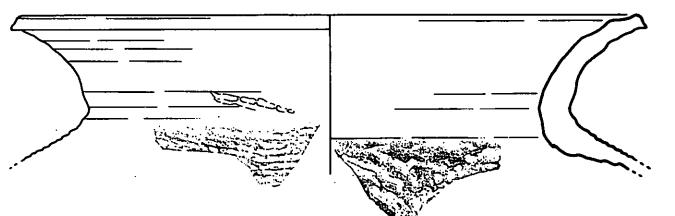
36



37



38

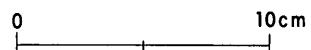


39



40

39 須恵器



第420図 西村遺跡西村北地区N3-SK01出土遺物 (2) (1/3)

- c) 庄屋池3号窯跡採集土器
- d) 川北N 31・32-S D 01出土土器
- e) 西村1号窯跡焚口・灰原出土土器
- f) 西村北N 2-S K 02出土土器
- g) 川北N 35-S K 25出土土器
- h) 山原S 20-S D 01出土土器
- i) 山原S 16-S K 16
- j) 川北S 33-S K 01
- k) 西村北S 5-S K 01

a)・e)は灰原が層位的に重複しており、a)→e)という順序が明確である。ただし窯体の遺存状況が悪く、操業期間の長短については明らかではない。e)の焚口部から灰原の土層堆積状況をみると、窯体内埋土の上位層が灰原に連続しており、そこから多量に遺物が出土しているが、この上位層が操業時の嵩上げ（補修床面）なのか、廃窯後の埋積土なのかは調査時の記録からも明確にできない。一応、以上のような状況を踏まえつつ、上位層出土遺物も一括して取り扱う。

b)は長さ0.58m、残存幅0.4mのほぼ正方形を呈していたと考えられる焼土坑からの出土資料である。土坑は壁面が被熱しており、出土状況は明確でないが内部から黒色土器碗A II、土師質土器B II・甕・鍋が出土している。黒色土器碗は残存率の高い個体が多く、薄い器面の剥離がみられる部分は炭素の吸着が不十分になり、焼けムラが認められる。このことから、黒色土器碗の焼成施設内に廃棄された土器群とみることができ、かなり一括性の高い資料と位置付けられる。

c)は焼成部中央付近から煙道部付近が比較的良好に遺存している窯であり、池水の浸食によって崩壊した焼成部前半付近に窯壁とともに須恵器・黒色土器が散乱していた。発掘調査によらない採集資料であるが、こうした状況から窯体内遺存の最終操業時の土器を主体としていると判断できる。

d)は建物群の小区画溝（雨落ち溝？）から出土した土器で、「一括出土」と報告されているが、限られた範囲・層位から集中して出土したという状況ではない。ただ出土遺物は比較的残存状況が良好であり、ある程度まとまった資料ということはできよう。

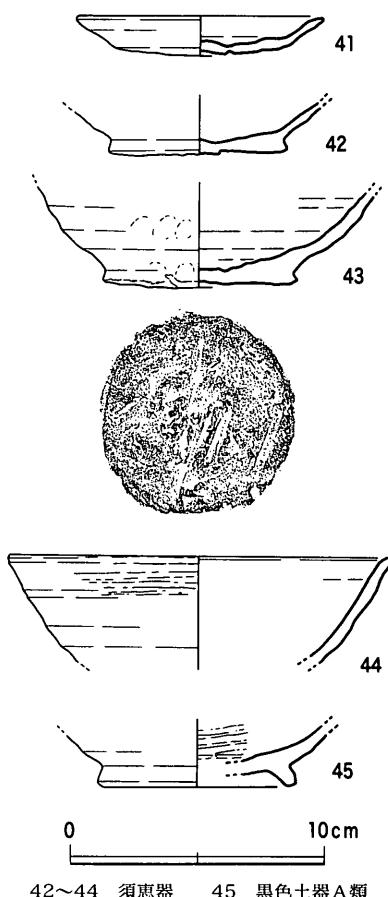
f)は直径1.5m、深さ0.5mの土坑下層を主体とした出土資料である。出土遺物の中には須恵器甕片も多く、その一部は二次的に被熱している。直近にある西村1号窯跡との関わりを想定できれば、生産に伴う廃棄土坑という性格が与えられ、ある程度のまとまった資料という位置付けができる。

g)は粘土採掘坑とみられる土坑群中の1基に一括廃棄された資料である。

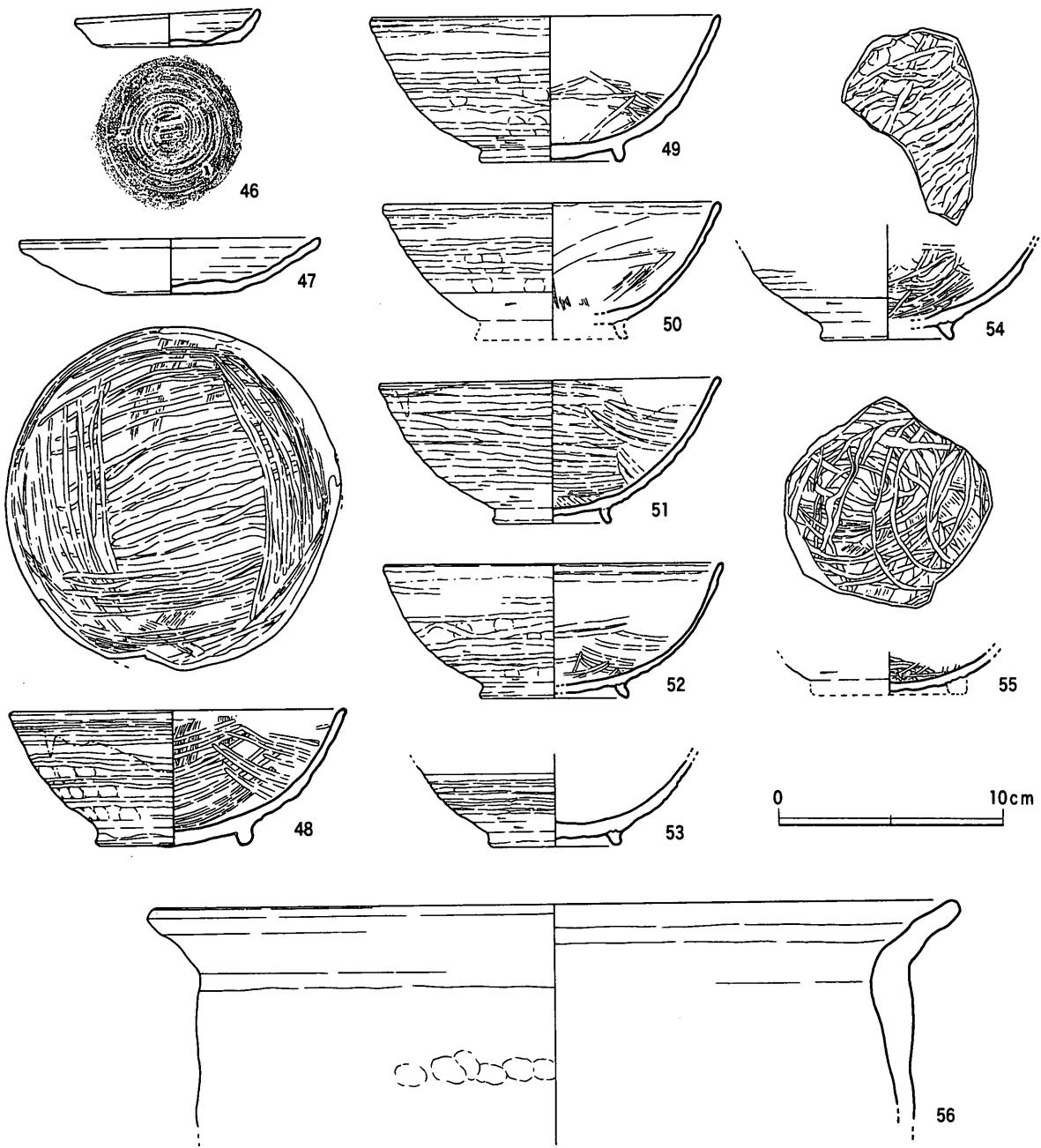
h)は建物の雨落ち溝からの出土資料である。

i)はg)とは異なる地点で検出された、土坑群中の1基に廃棄されていた資料である。

j)は2.05m×1.55m、深さ0.205mの不定形な土坑内から多量に出土した。土器とともに窯の構



第421図 庄屋池3号窯跡灰原採集遺物 (1/3)



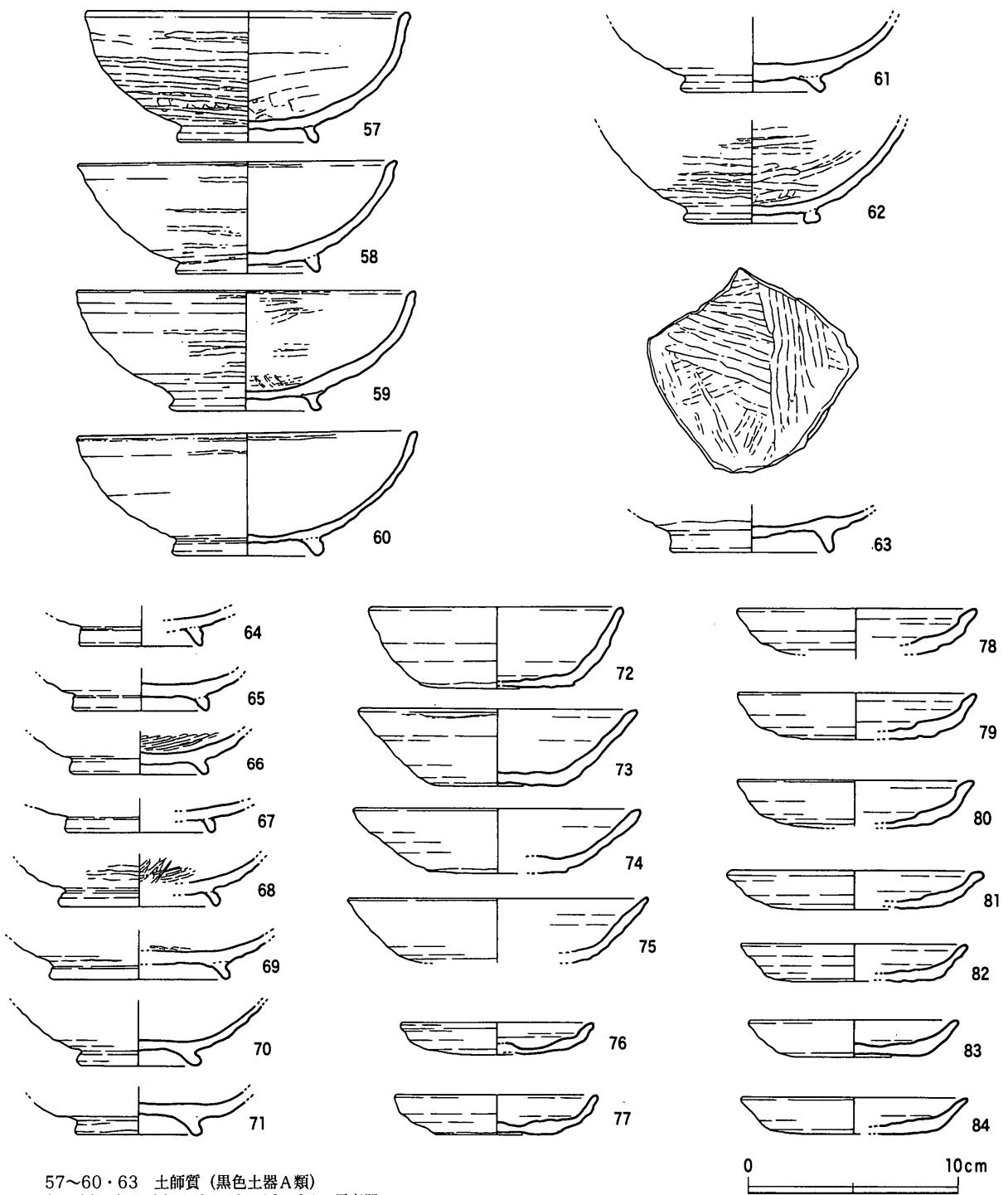
48~55 黒色土器A類

第422図 西村遺跡川北地区N31・32-SD01出土遺物 (1/3)

石材とみられる焼土塊（表面に自然釉付着）が出土していること、また須恵器の焼成不良品がみられることから、生産に伴う廃棄土坑とみられる。

k)は径2.7m、深さ0.6mの平面円形を呈する土坑であり、多量の土器が礫とともに出土した。埋土は4層に分層できるが、遺物の出土状況は層位毎の差異はなかったようであるが、第1層からは土師質土器杯D II-8が5個体重なって出土している。廃棄の最終段階で意図的な土器の埋納（地鎮？）が行われたとみられ、一括遺物としてよかろう。

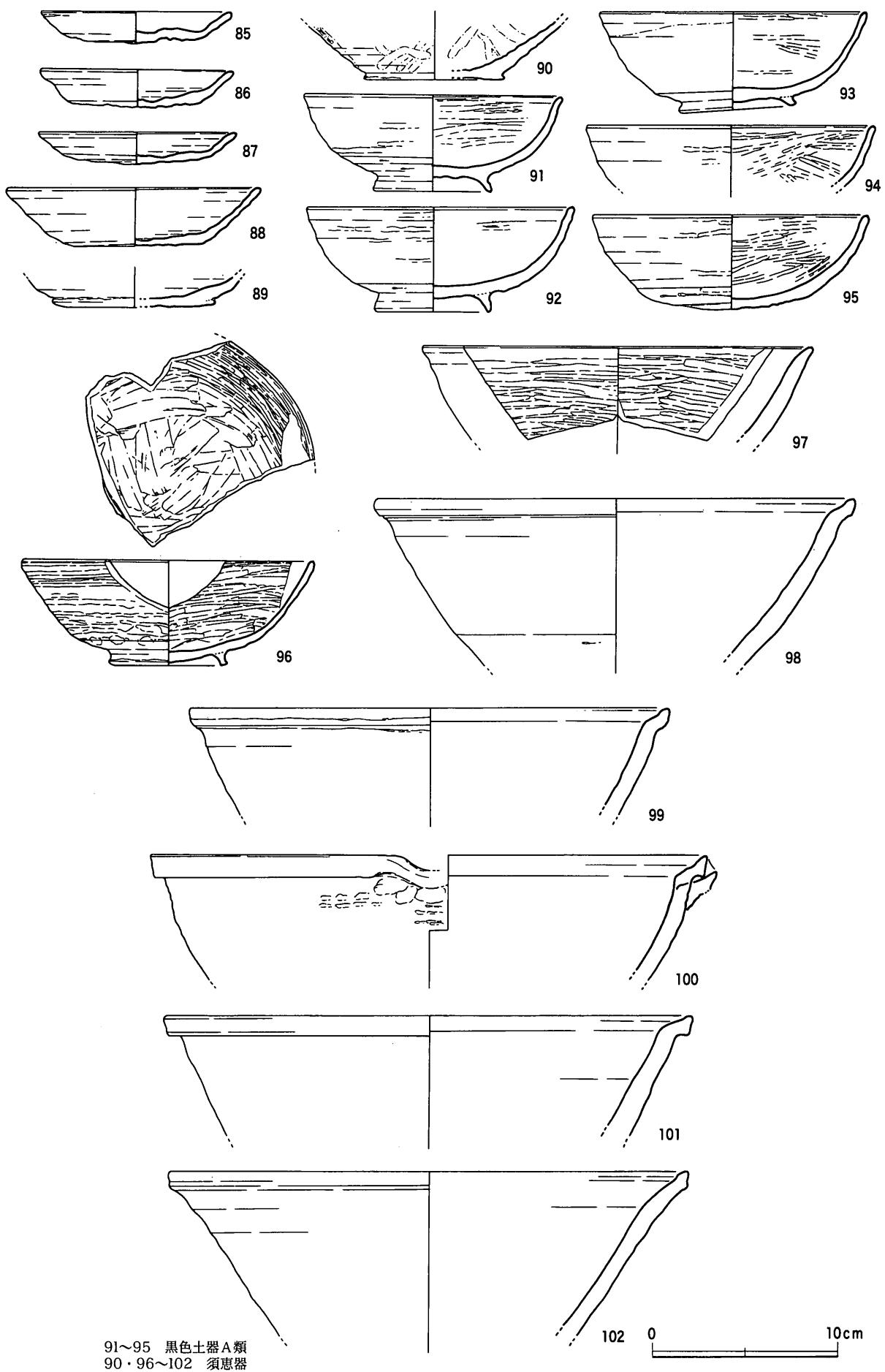
以上のほか、遺物量は僅少だが補助的な資料として西村北N 6-S B 03出土土器（1）も使用する。



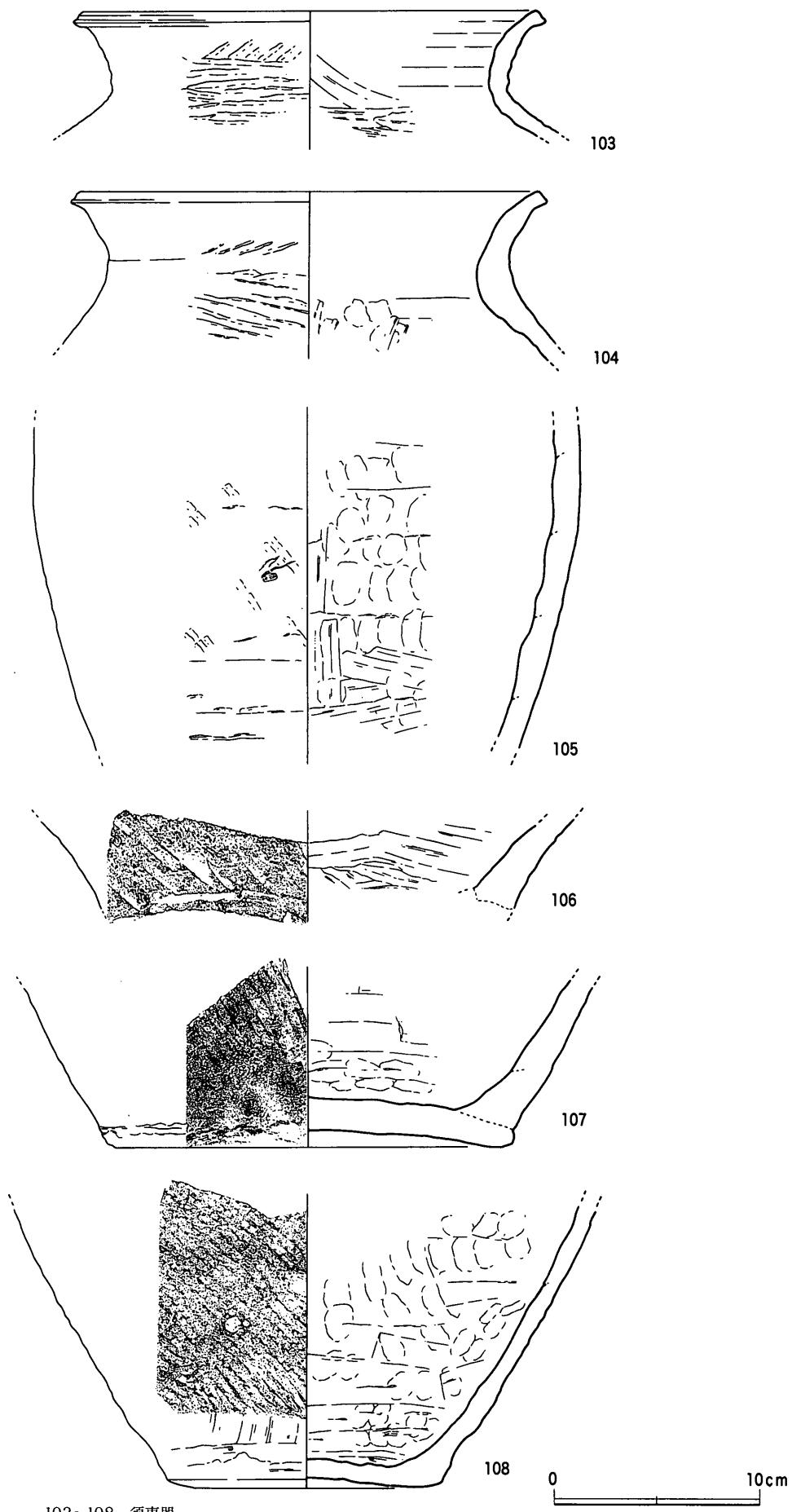
第423図 西村遺跡西村1号窯跡焚口・灰原出土遺物（1/3）

(3) 形式・型式の組み合わせと組列

形式・型式の組み合わせ 第8表に各遺構出土の形式・型式のセット関係をまとめた。高松平野南部よりも器種組成がやや単純な傾向にあるが、共通する器種である土師質土器皿B II・IV・杯D II、十瓶山窯産黒色土器・須恵器椀A IIなどから、7つのパターン区分が可能である（パターン1～7）。各パ

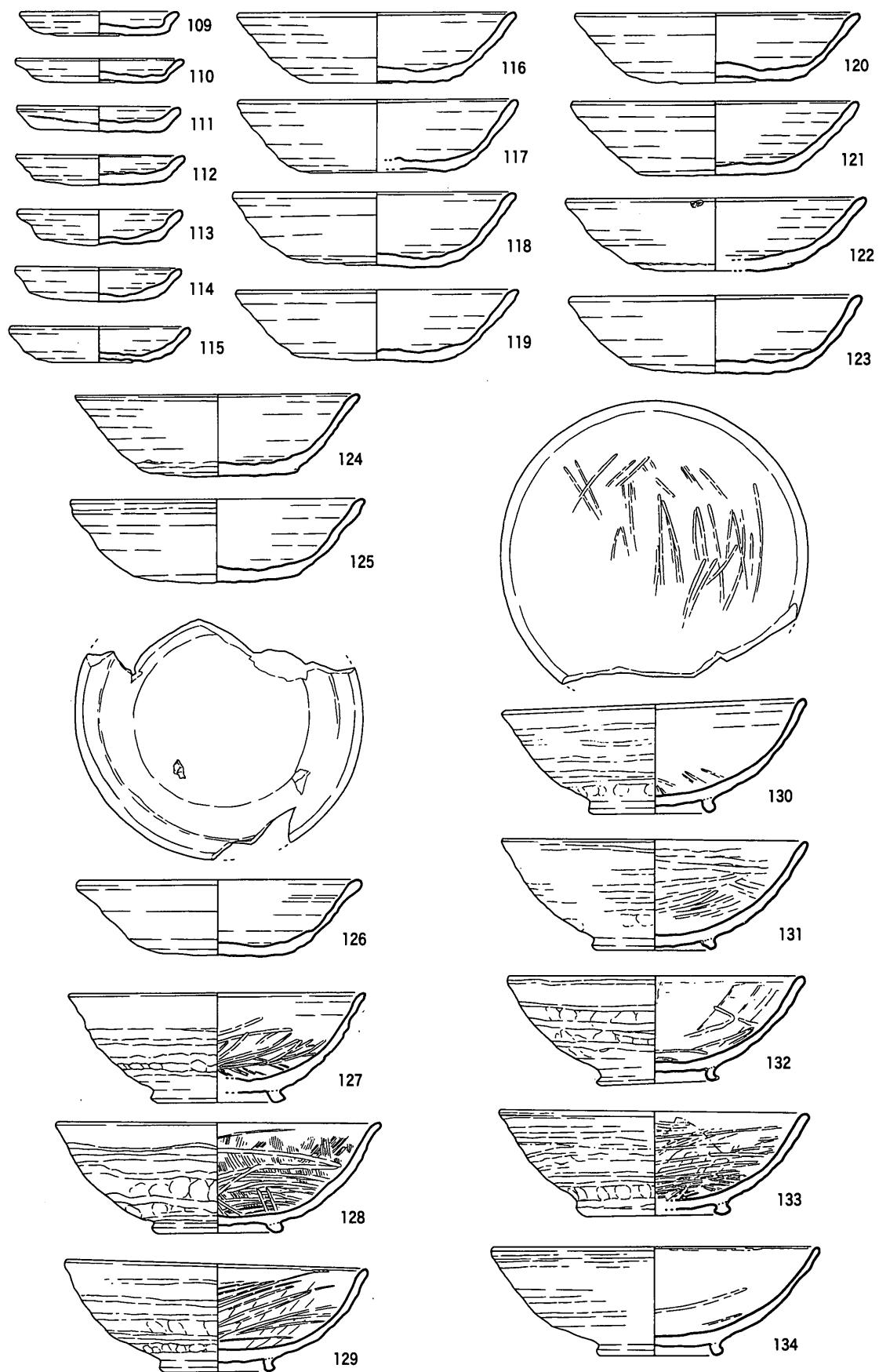


第424図 西村遺跡西村北地区N2-SK02出土遺物(1) (1/3)



103~108 須恵器

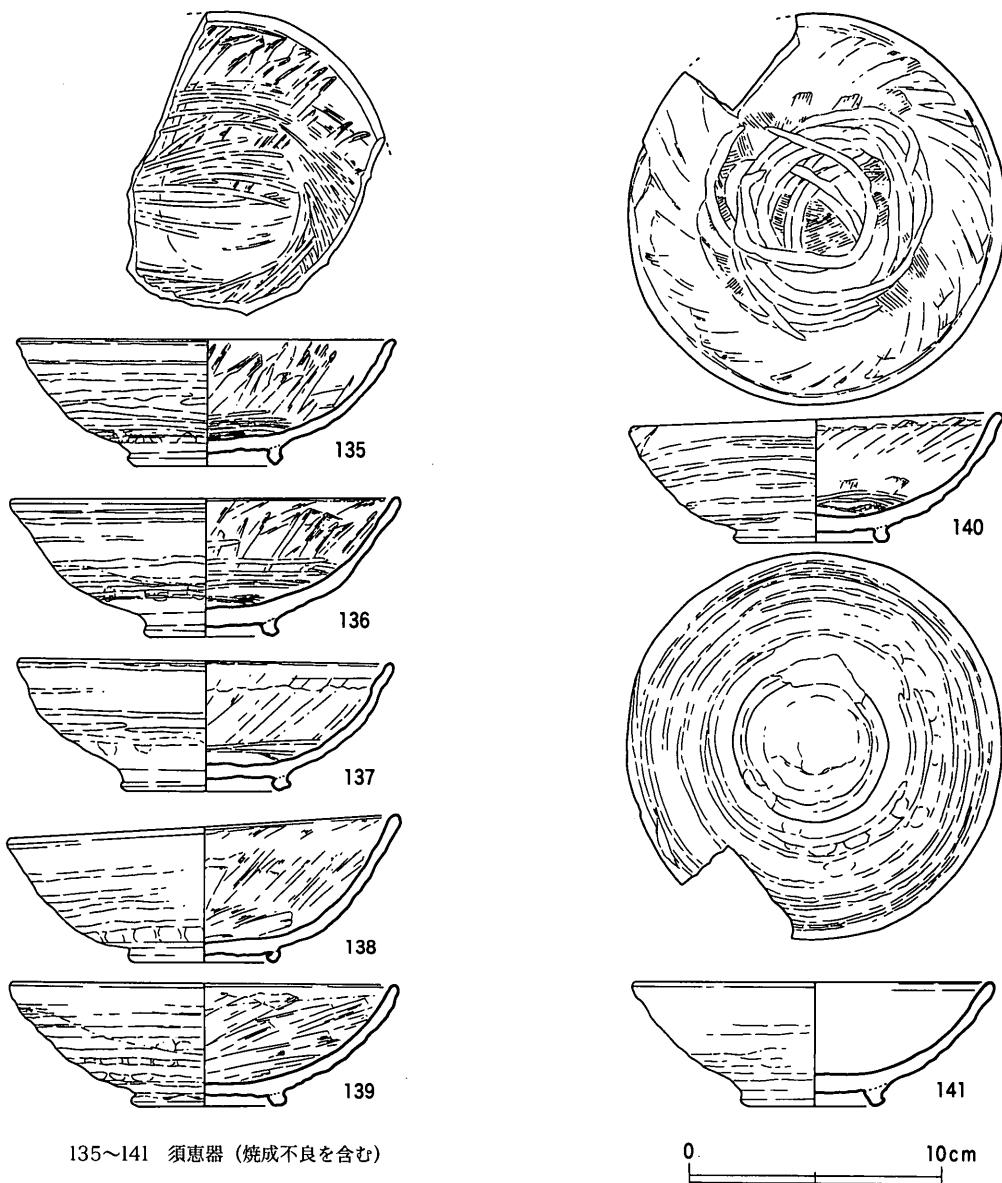
第425図 西村遺跡西村北地区N2-SK02出土遺物 (2) (1/3)



127~134 須恵器（焼成不良も含む）

0 10cm

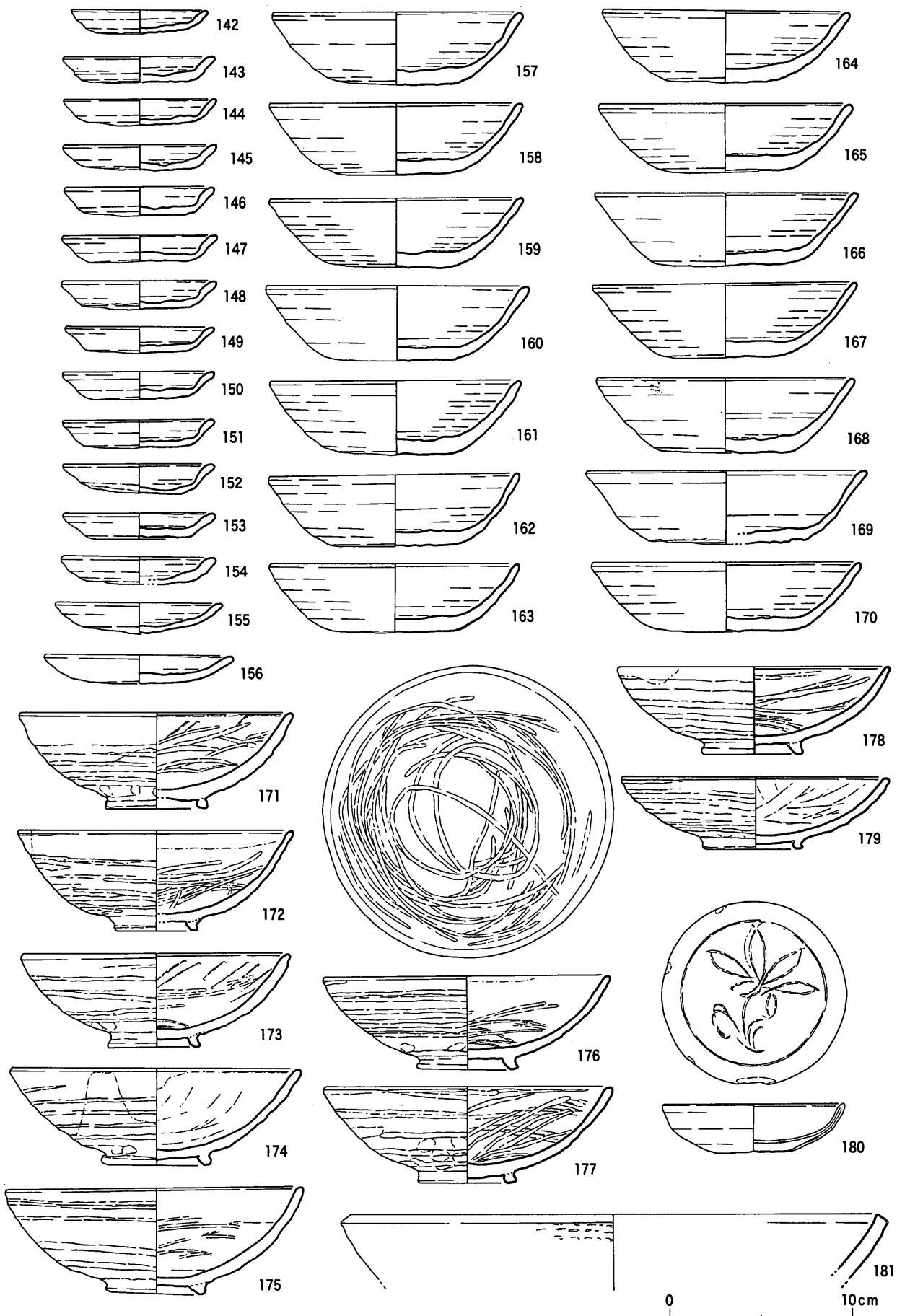
第426図 西村遺跡川北地区N35-SK25出土遺物（1）（1/3）



第427図 西村遺跡川北地区N35-SK25出土遺物（2）（1/3）

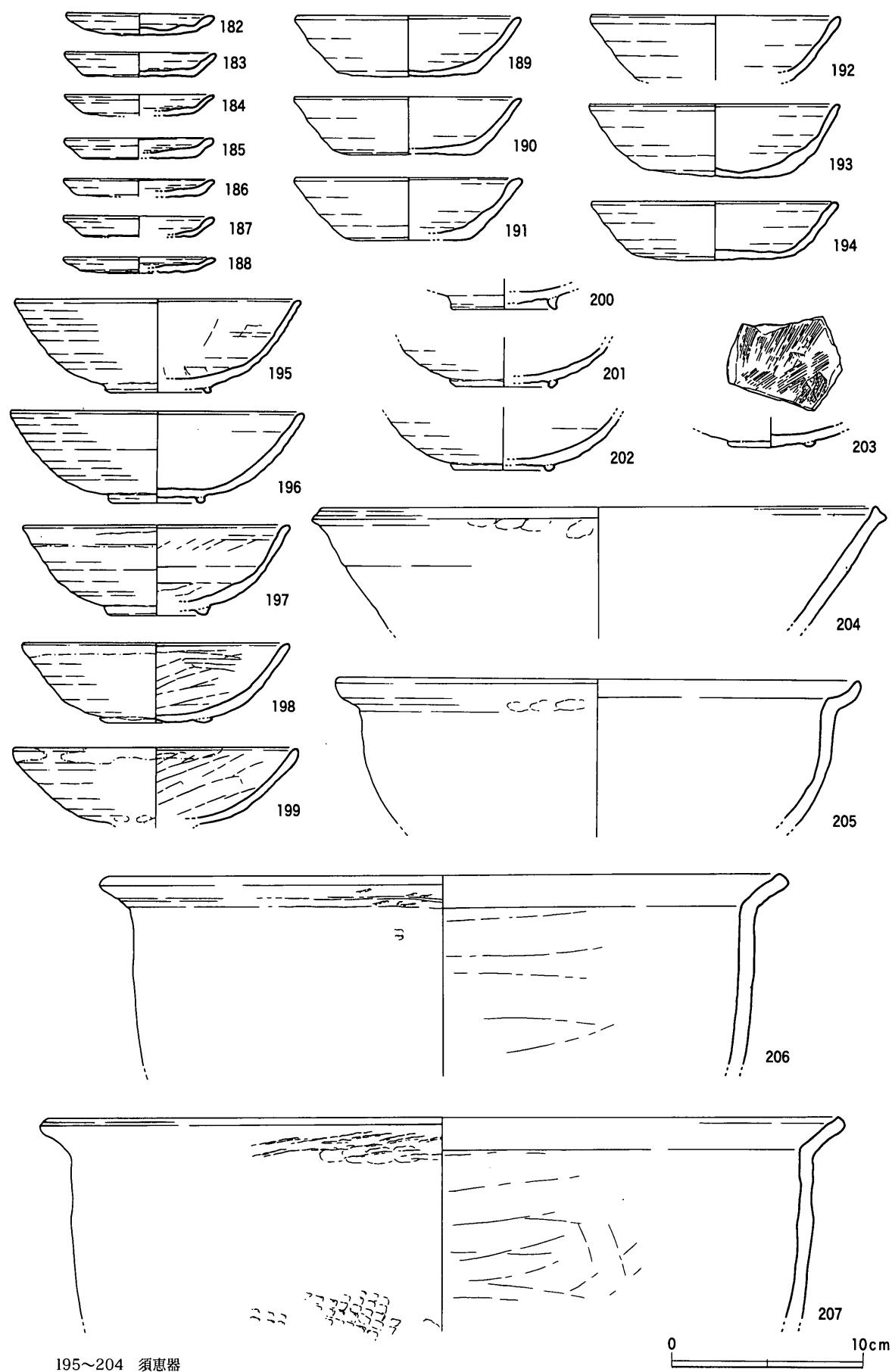
ターンで異なる組成となるのは皿B II・杯D IIと椀A IIであり、皿B IIIはやや雑然とした状況にあるが、複数のパターン単位で異なる組み合わせ関係にある。また、須恵器椀Bの型式もしくは存否もパターン1～4の区分に対応している。十瓶山窯産須恵器杯と捏鉢D・Eの存否についても複数のパターン単位で差異が指摘できる。

型式組列 各遺構出土土器は、上記のように一括資料としてよいものが多いが、切り合いでによる遺構同士の前後関係が明確でないものがほとんどである。唯一、a)→e)が確認できるのみである。しかし黒色土器・須恵器椀A IIにみられる、径高指数（器体の深浅）、ヘラ削り・ヘラ磨き調整、高台の高低などの属性は一定の整合的な関係にある。つまり①傾向指数（高）・削り（有）・磨き（緻密な分割）・高台（高）と②傾向指数（低）・削り（無）・磨き（無）・高台（低）を両極として、①→②（椀A II-2→10）もしくは②→①（椀A II-10→2）という型式組列が想定できる。他地域の事例から、この型式組列は椀A II-2→3→4→5→6→7→8→9→10の可能性が高いという見通しが得られるが、これは高松平野南部での椀A II-4→7・8→9という知見と整合する。問題は椀A II-



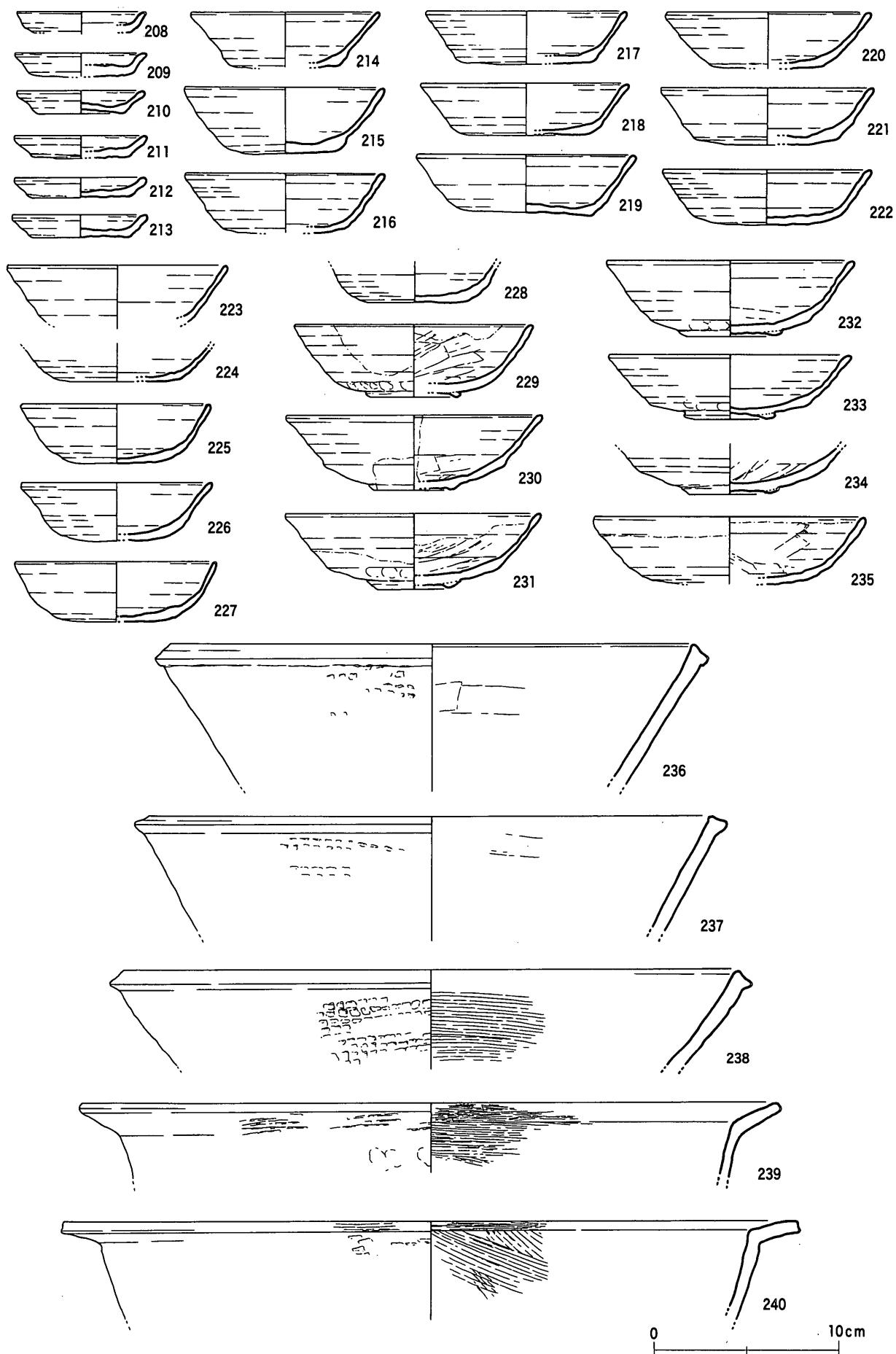
171~179・181 須恵器
180 青磁

第428図 西村遺跡山原地区S20-SD01出土遺物 (1/3)



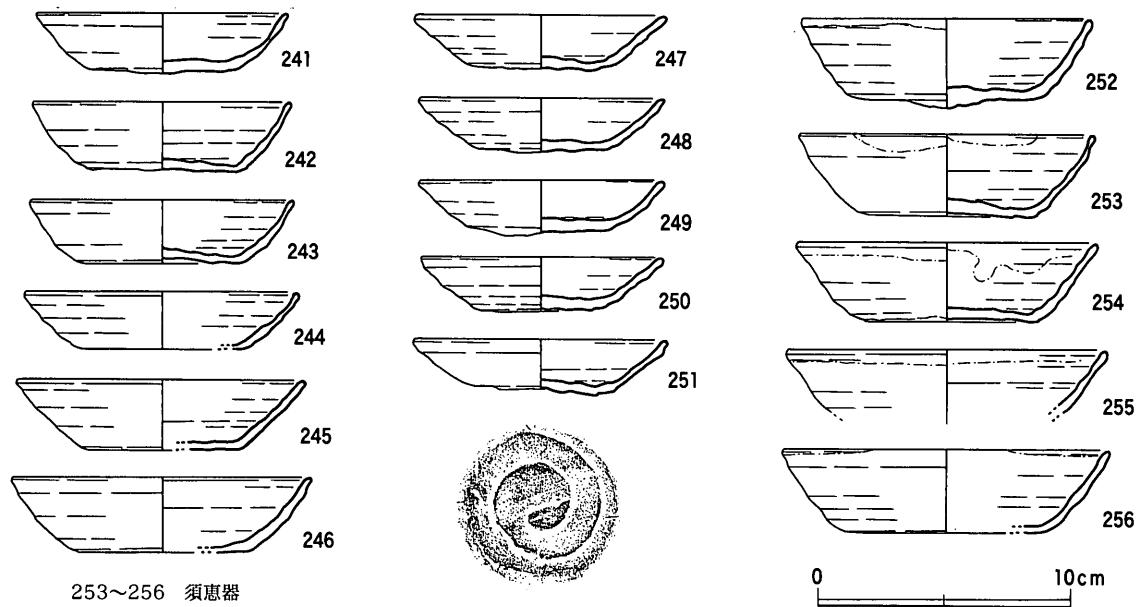
195~204 須恵器
206は須恵質焼成により歪む

第429図 西村遺跡山原地区S16-SK16出土遺物 (1/3)



229～238 須恵器

第430図 西村遺跡川北地区S33-SK01出土遺物 (1/3)



第431図 西村遺跡西村北地区S5-SK01出土遺物 (1/3)

1とA II-の関係である。椀A II-2~8に普遍的な外面の回転ヘラ磨き調整は、A II-1にはみられないからであり、製作技法上の断絶とも解し得る。ただし、形態的には「深椀」形を呈してA II-2と共通することから、A II-2出現時に併行して製作された、より古相を呈する型式と見なしておきたい。

土師質土器杯D IIは、外傾度の強い浅手の型式から、外傾度の緩いやや深手の型式、さらに外傾気味で浅手の型式へという変遷をたどる。法量的にはD II-1→2が若干大型化という方向をたどるが、それ以後の型式は一貫して縮小化傾向を明確にする。椀A IIのような直線的な連続関係ではないが、空港跡地遺跡での知見からD II-1→2→3→4→5→6→7→8という型式組列が想定できる。皿B IIIについても空港跡地遺跡の知見から、B III-2→3→4という組列の方向が想定できる。

須恵器椀Bは、型式組列としてはB-1→2→3→4もしくはその逆が想定できるが、上記してきた椀A IIや杯D IIとの共伴関係から、前者の組列でよいと判断できる。

以上、各形式での型式組列ならびに組み合わせは、高松平野南部と整合的に理解できる。土師質土器皿B III-5、十瓶山窯産須恵器杯・捏鉢D・Eの存否についても同様である。したがってパターン1~7は、パターン1→2→3→4→5→6→7という序列として理解できる。

(4) 杯D IIと椀A IIの法量について

以上の基準資料からは、片桐氏が指摘する「杯D+高台=椀A II」という想定を首肯することは難しい。何故なら、共伴関係が認められる土器群中において、杯D I・IIと椀A IIの法量が一致しないからである。口径でみると、杯D I・IIは椀A IIよりも一回り小さいことが多い、唯一、杯D IIの口径が最大になるパターン4において椀A IIとほぼ同一口径となるのみである。またパターン2の杯D Iと椀A IIでは、底部ヘラ切りの範囲が異なる上に、体部の外傾度も全く異なる。仮に杯D Iを素形として「底部押し出し」を行ったとすると、口径や体部形態の変形が著しいこととなるが、杯D Iの方が椀A IIよりも器壁が薄く、想定される素形とは矛盾することとなる。このことは、パターン3においても同様で

あり、杯Dを碗A IIの素形とする見解は支持できない。さらに西村遺跡の杯Dが他地域の杯Dよりも大振りであるという点についても、後述するような併行関係からは首肯できず、むしろ他地域と軌を一にした法量変化を示すと認識している。

5. 丸龜平野での様相と対応関係

(1) 対象土器群と出土状況

対象資料は、以下の13遺構出土土器である。

- a) 下川津遺跡 S D III 03 出土土器
- b) 下川津遺跡 S D III 05 出土土器
- c) 下川津遺跡 S D III 75 中央部上位
- d) 北内遺跡 S D 26
- e) 龍川四条遺跡 A地区 S R 01 出土土器
- f) 川津元結木遺跡 S D 10 第1溝
- g) 佐古川・窪田遺跡井戸2
- h) 下川津遺跡 S D III 71 東部
- i) 川津二代取遺跡 S D 28
- j) 川津二代取遺跡 S K 05
- k) 飯野東二・瓦礫遺跡 S P 459
- l) 龍川四条遺跡 A地区 S P 01
- m) 郡家原遺跡 S P 45

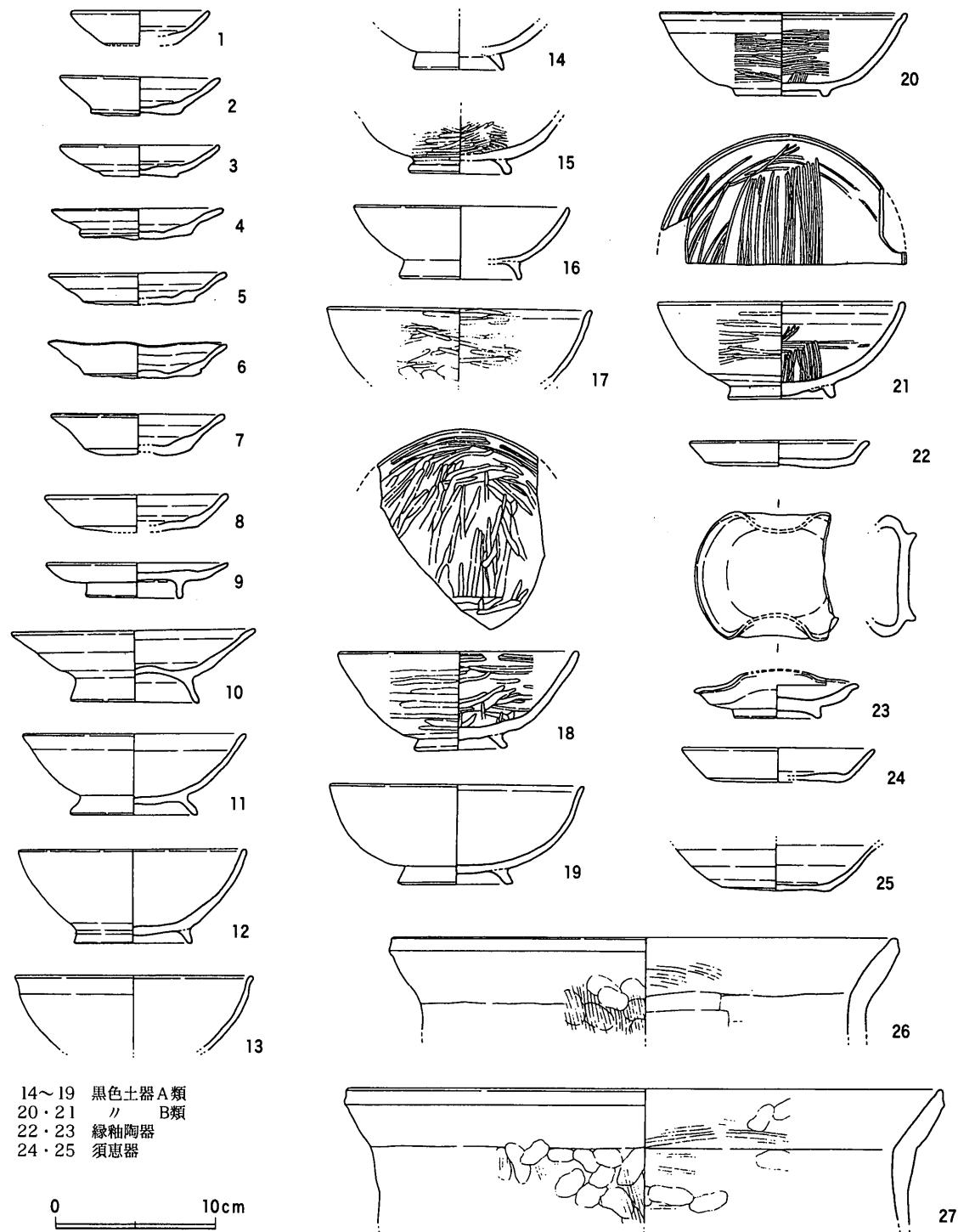
これらの中で一括資料としてよい事例は、井戸廃絶時の一括投棄であるg), ピットへの一括埋納であるk)・l), 地鎮土坑への一括埋納であるm)に限られる。その他は溝や旧河道、大型の土坑などであり、一括資料とはいひ難いが、型式の組成がある程度まとまっていることから検討対象とする。

(2) 形式・型式の組み合わせ

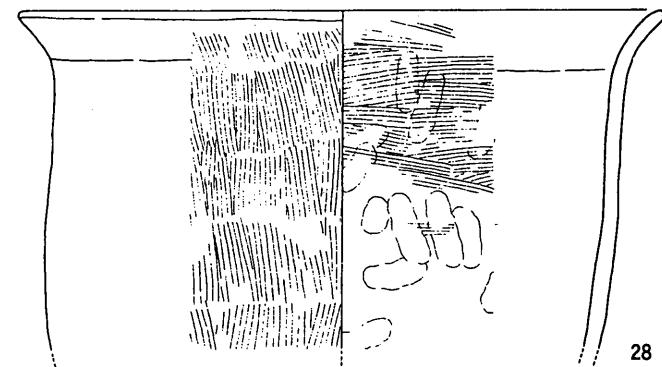
第9表に示したとおりであり、組み合わせからパターン1～6に区分できる。高松平野と比較して、皿B Iが目立つことや、皿・杯のヘラ切りがパターン1～3ではL主体でパターン4でも一定量Lが認められること（高松平野では一貫してR主体）が特徴的である。特に皿B Iとヘラ切りLとの結び付きが強い。杯D IIは、形態的には高松平野の同形式との識別が難しい。

パターン	佐藤 廣瀬	出土遺構	皿B										杯D II										須恵器・黒色土器										
			II	III	I	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	E	D	C
1	1	西村2号墓跡																															
2	2	西村北N3- SK 01																															
3	3	西村N31-32-S D 01																															
4	5	西村北N2-SK 02																															
5		川北N35-SK 26																															
6		山原S20-S D 01																															
7		山原S16-SK 16																															
		山原S17-SK 201																															
		川北S33-SK 01																															
		西村北S5-SK 01																															
		(西村北N6-S B 03)																															

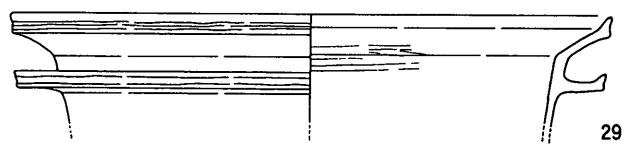
第8表 西村遺跡における形式・型式の組み合わせ



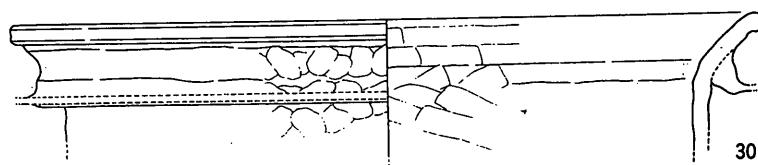
第432図 下川津遺跡SD III 03出土遺物 (1) (1/4)



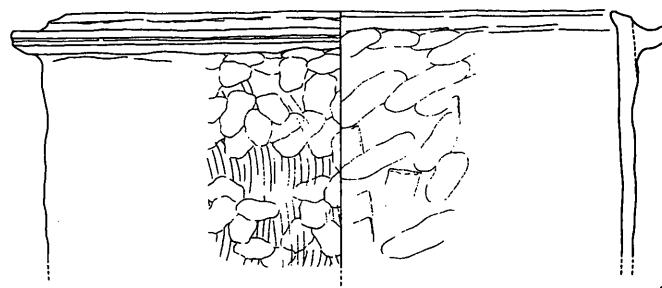
28



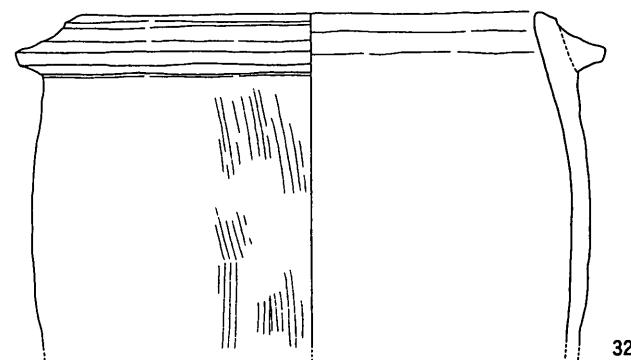
29



30



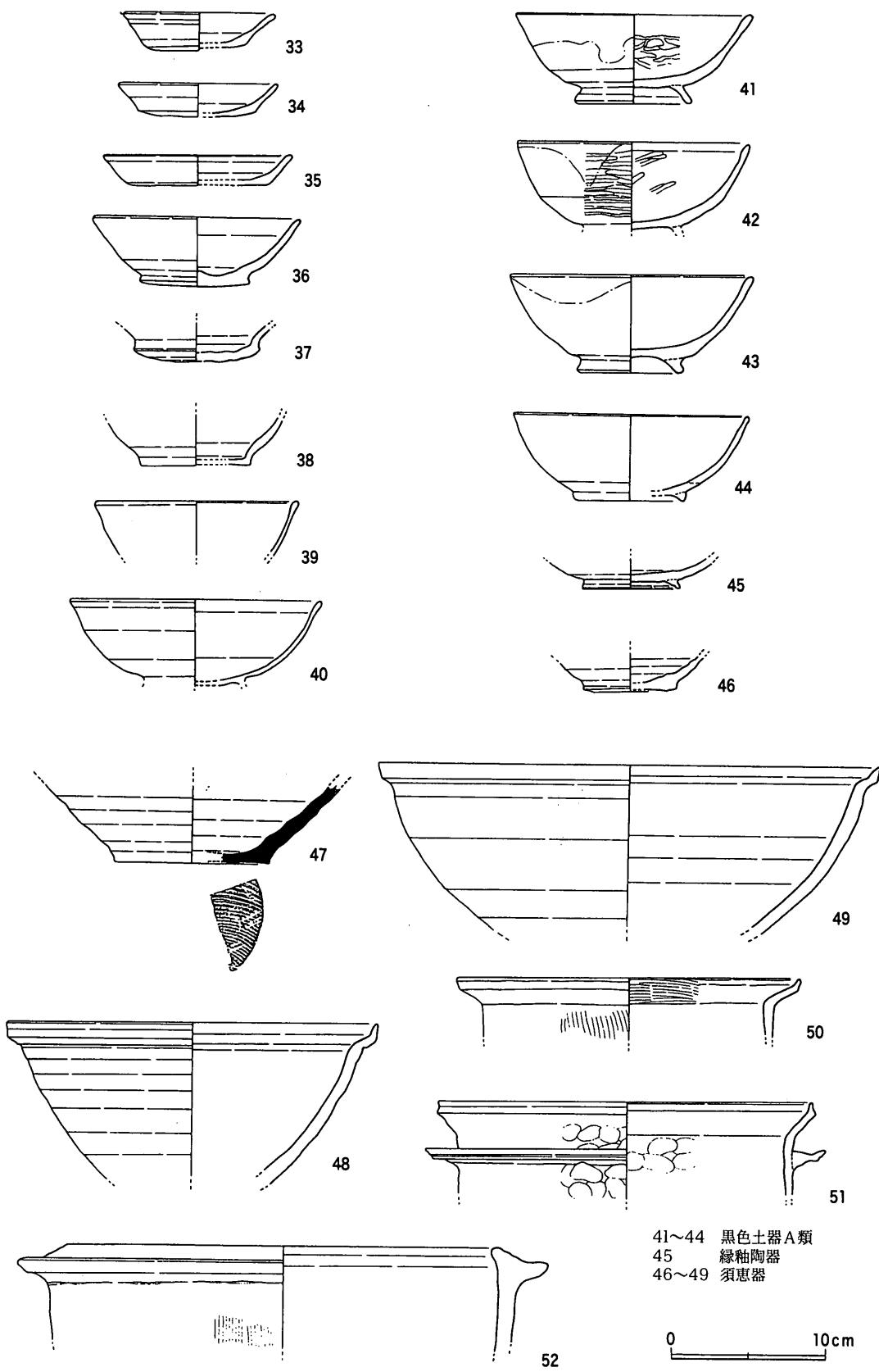
31



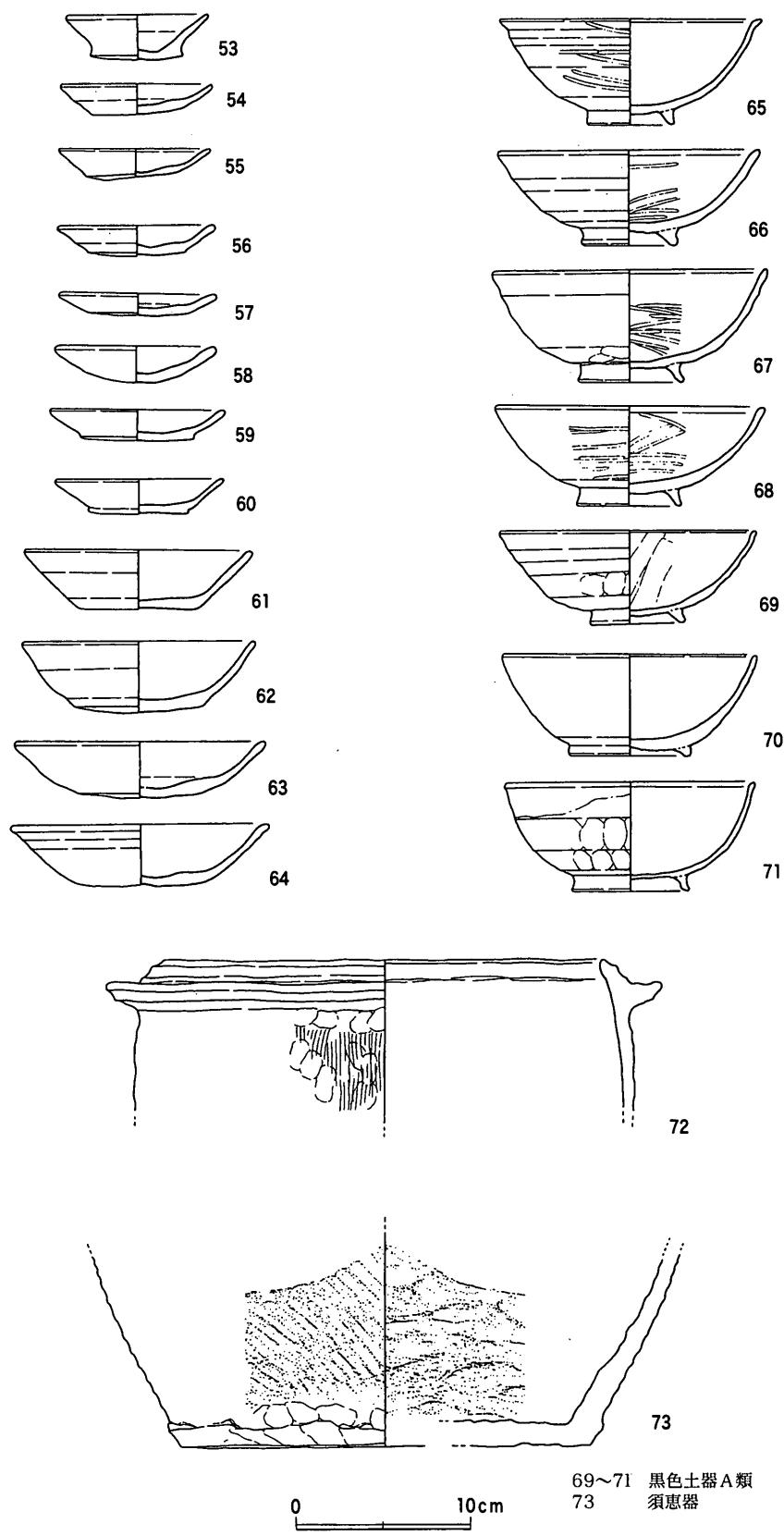
32

0 10cm

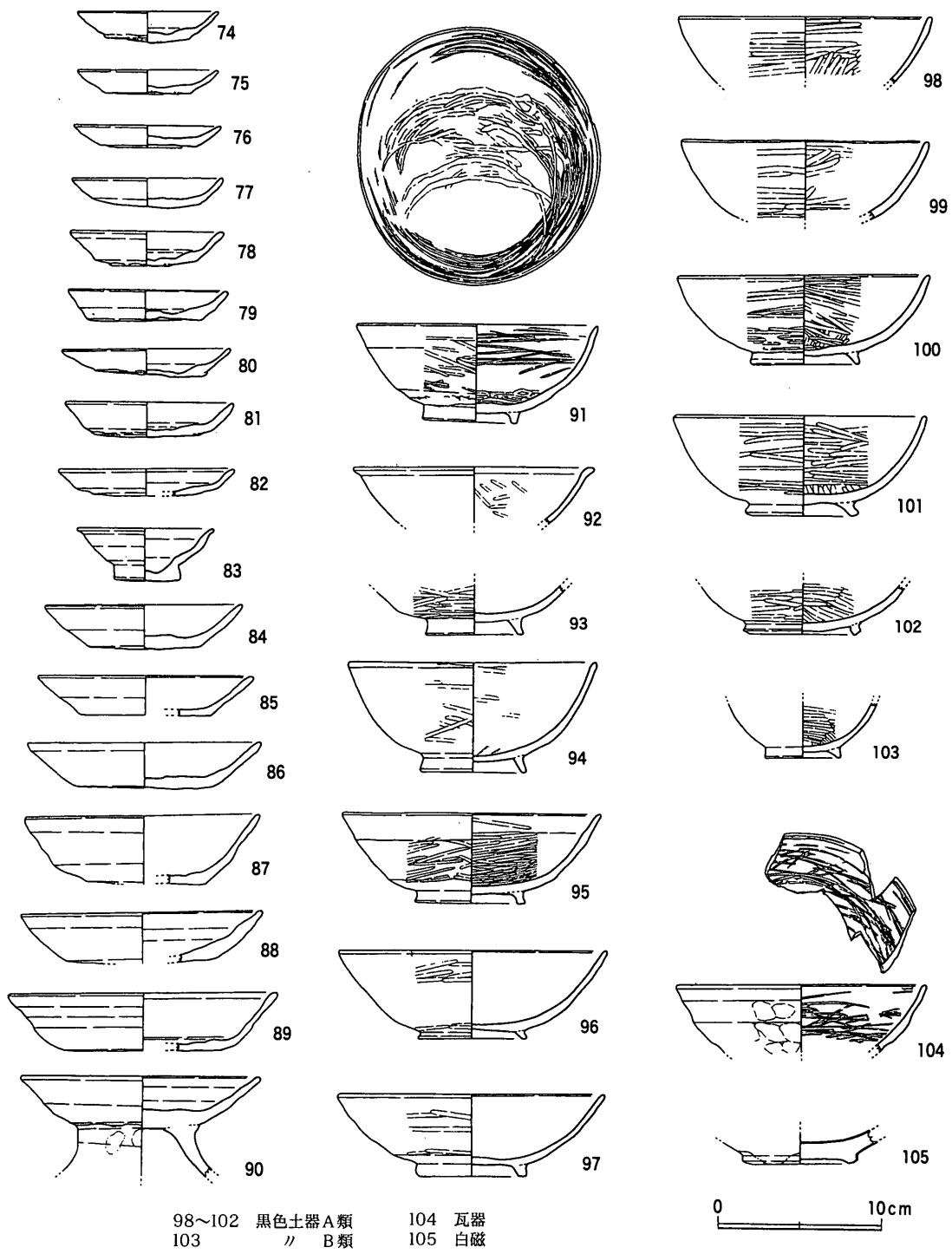
第433図 下川津遺跡SDⅢ03出土遺物 (2) (1/4)



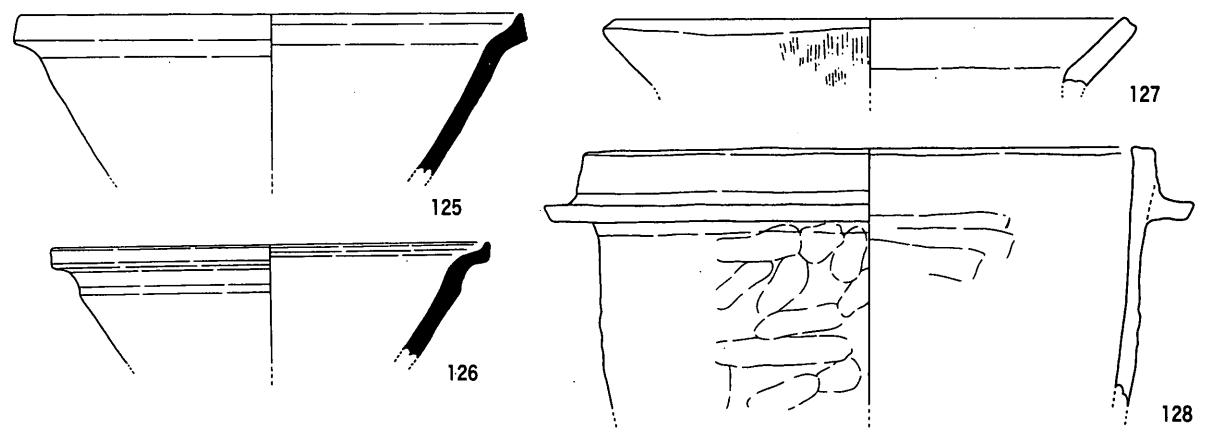
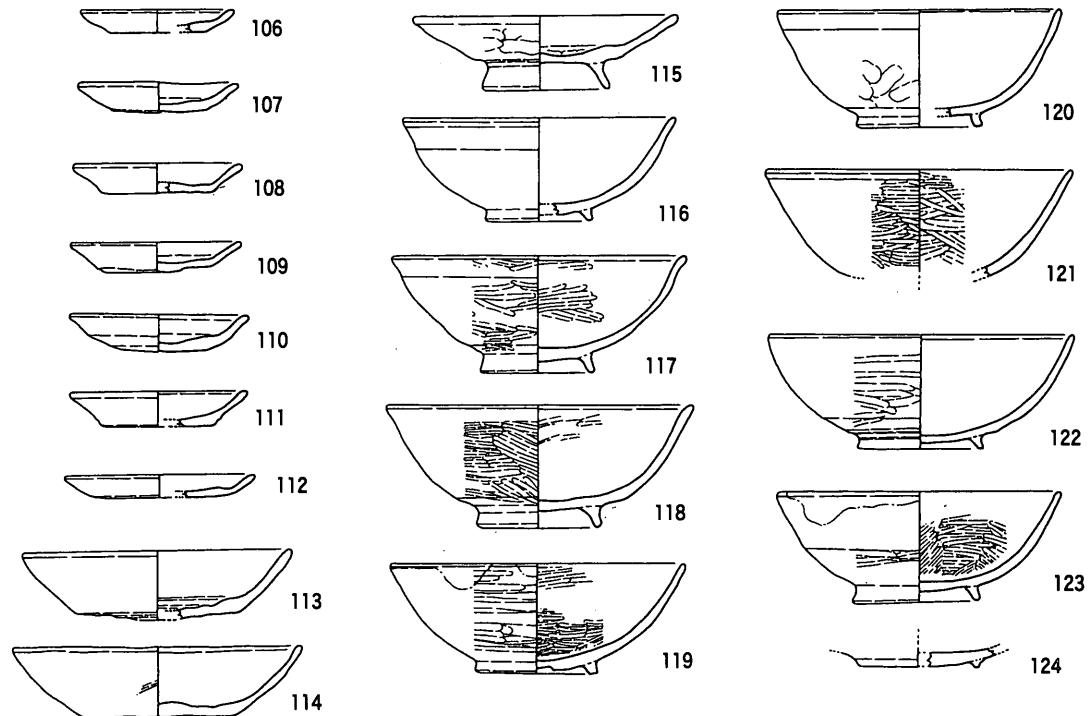
第434図 下川津遺跡SD III 05出土遺物 (1/4)



第435図 下川津遺跡SD III 75中央部上位出土遺物 (1/4)

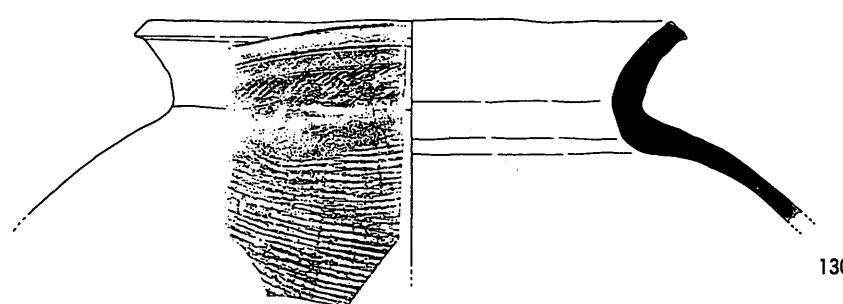
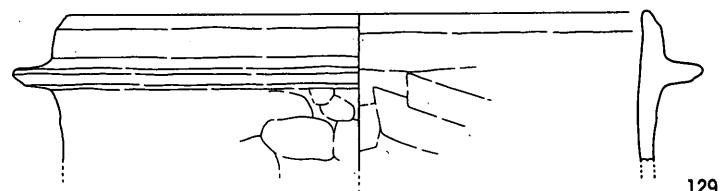


第436図 龍川四条遺跡A地区SR01出土遺物 (1/4)

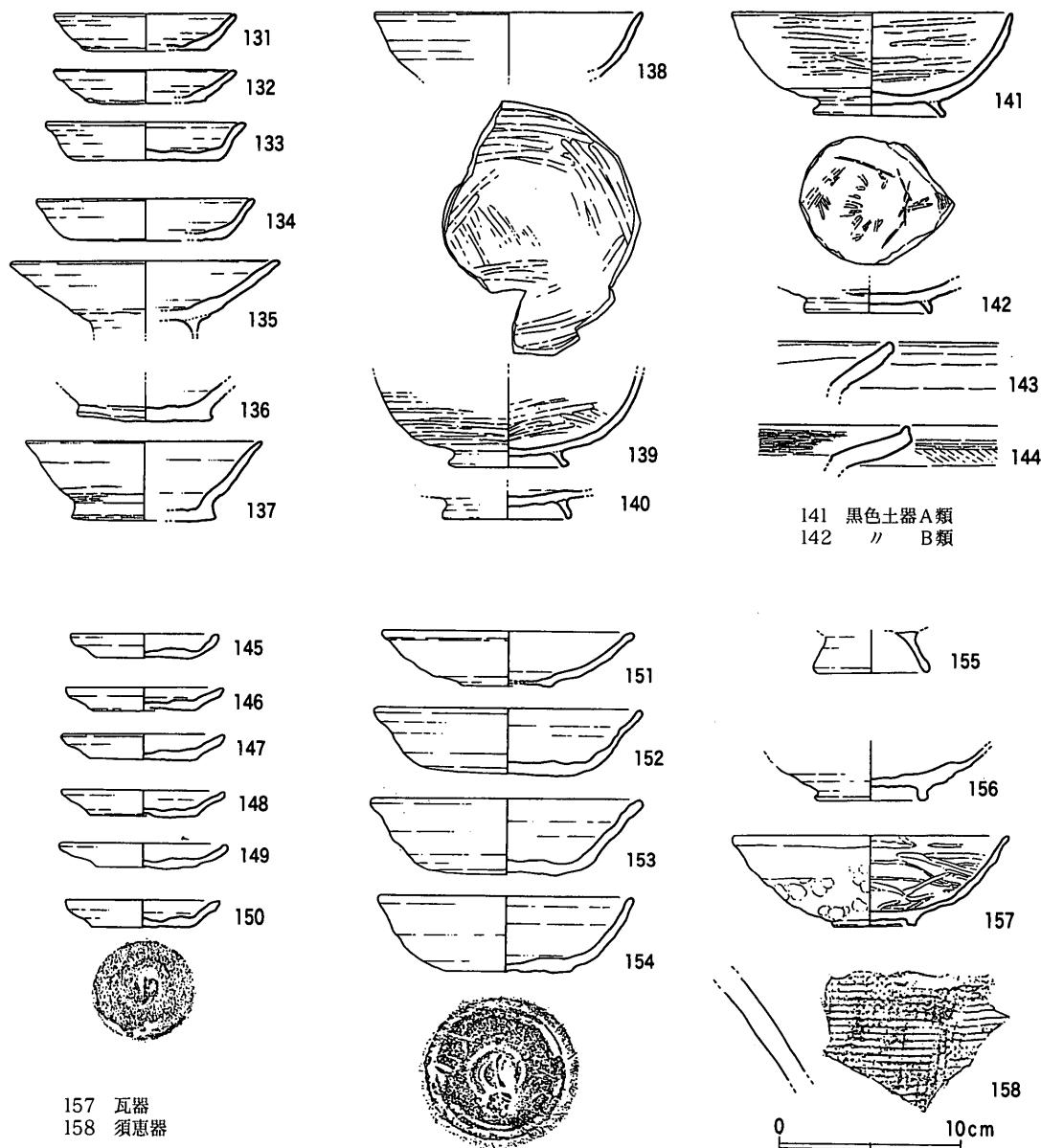


0 10cm

119~123 黒色土器 A類
124 ツ B類
125・126・130 須恵器



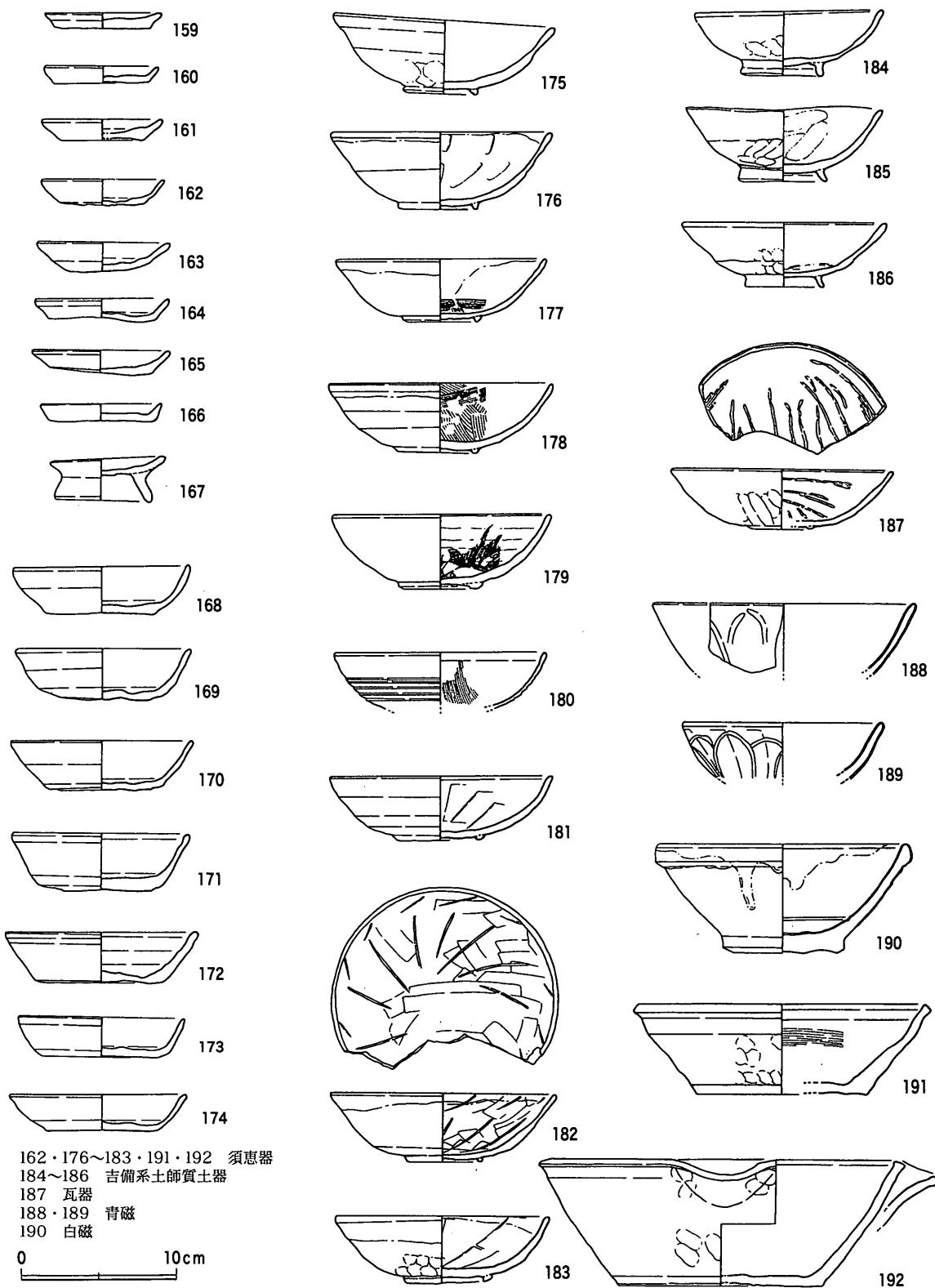
第437図 川津元結木遺跡SD10第1溝出土遺物 (1/4)



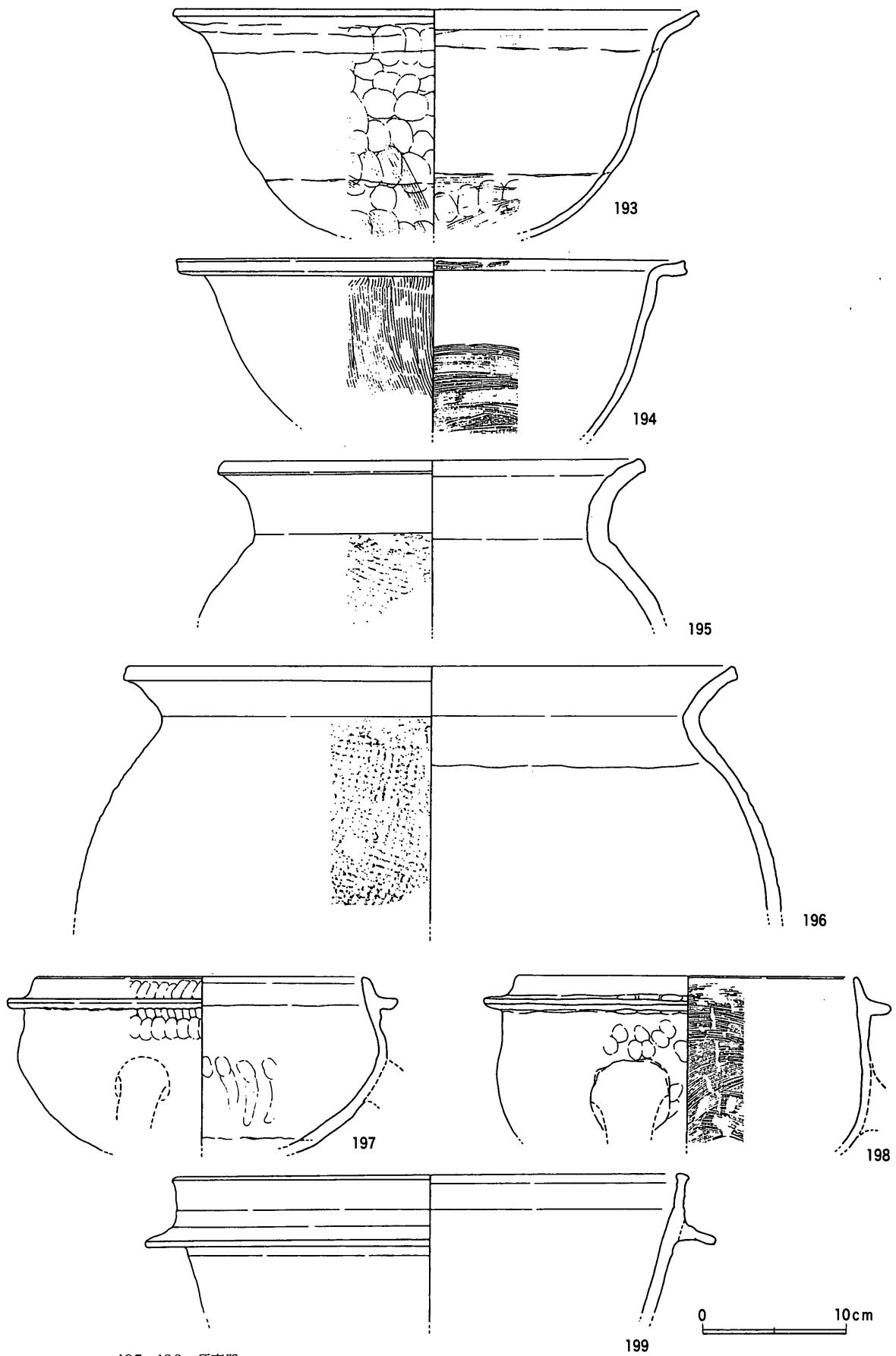
第438図 北内遺跡SD26出土遺物（上段），佐古川・窪田遺跡井戸2出土遺物（下段）（1/4）

良好な資料が少なく、形式・型式の組み合わせにも不確実な部分が残るが、パターン2での杯D II-1と椀A II-4の組み合わせは、高松平野・西村遺跡と同じである。しかし、パターン4は高松平野と若干食い違い、パターン5は高松平野・西村遺跡と若干食い違う。これを実態を反映した地域色とみるとどうか、判断が難しい。しかし、パターン4として取り上げたh)は幾度かの再掘削を示唆する土層堆積状況を示し、パターン5のi)も屋敷地の小規模な区画溝ではあるが、散在的で一括投棄とはいえない難い遺物の出土状況を示す。このことから、パターン4・5については若干の時期幅を見込んだ方が妥当であると考える。

ここで片桐編年II-③～⑥の基準資料とされてきた川津元結木遺跡SD10出土土器について、少し検討してみる。この資料に関する片桐編年の当否は、最下層→第2溝→上層という層位区分にもとづいた土器群が、上記してきたようなパターン区分として認識できるかどうかにかかっているといえる。最下層は出土点数が少ないが①土師質土器杯C（報告書870～872）を含んでおり、やや先行的な形式

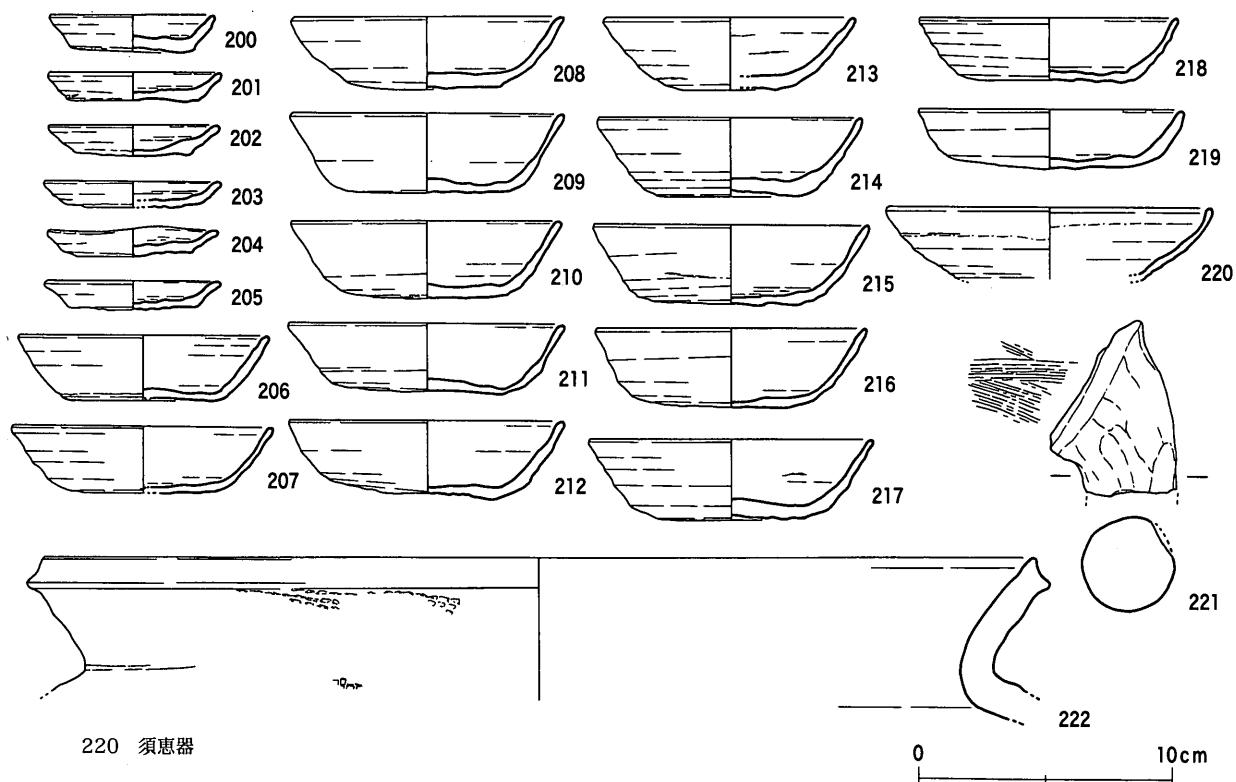


第439図 下川津遺跡SDⅢ71東部出土遺物（1）（1/4）

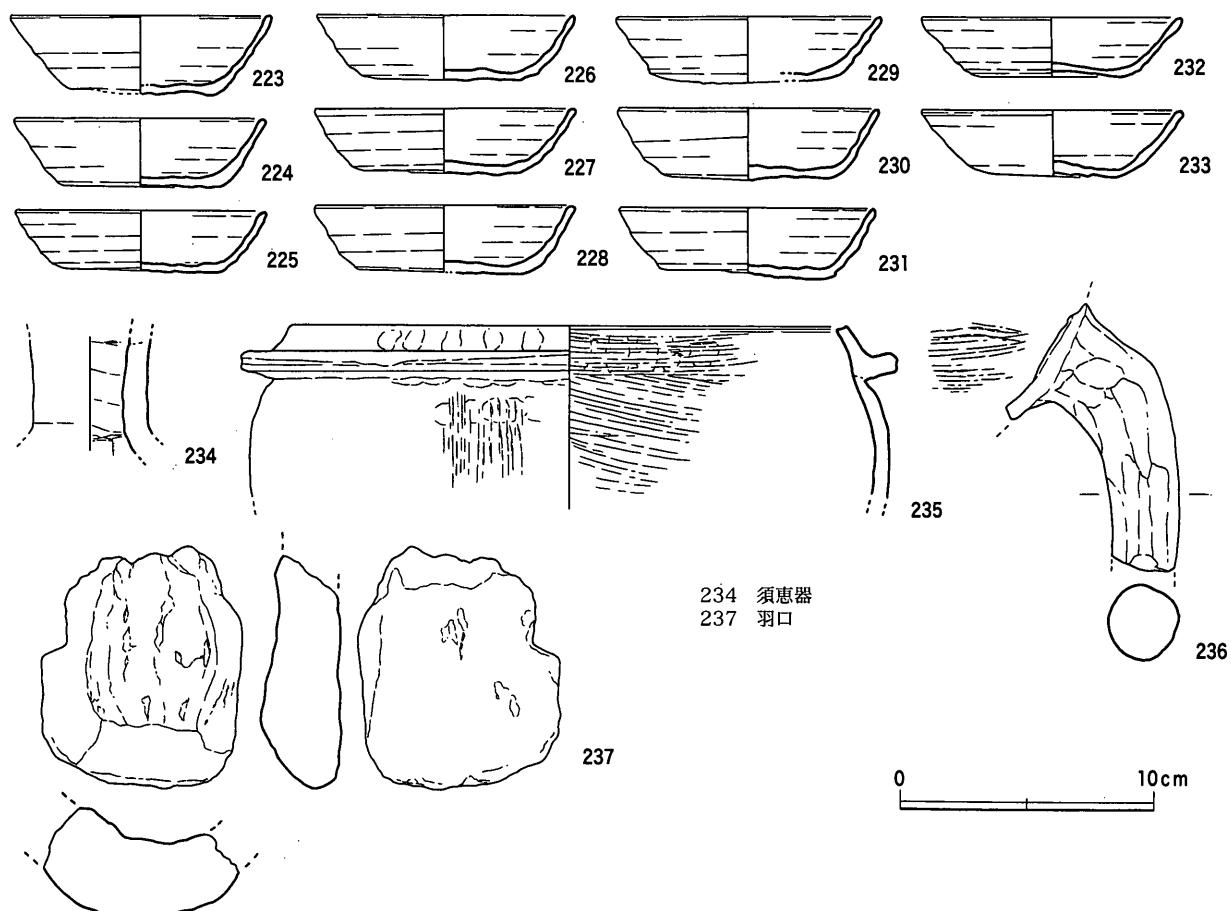


195・196 須恵器

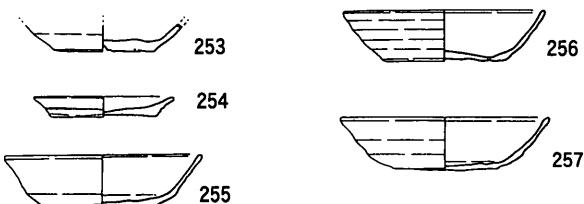
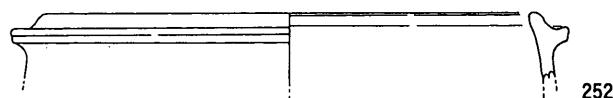
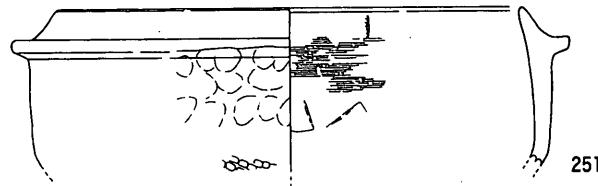
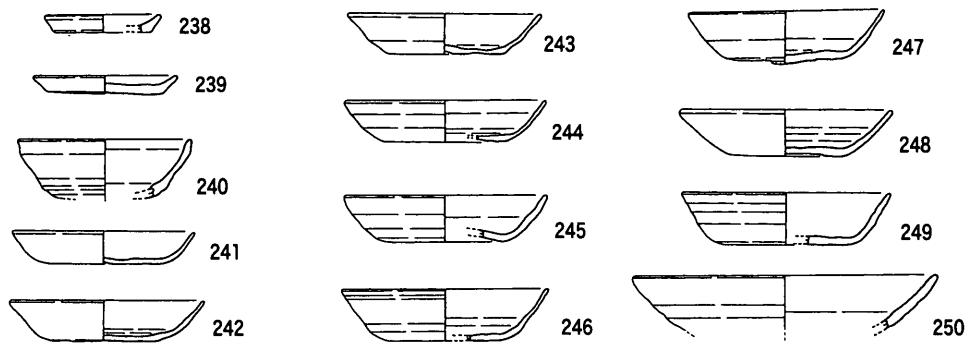
第440図 下川津遺跡SD III 71東部出土遺物 (2) (1/4)



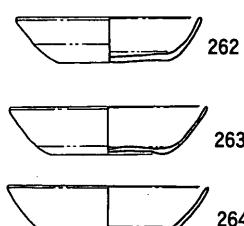
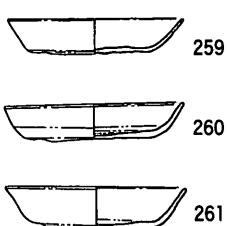
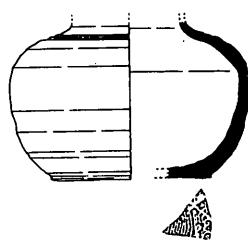
第441図 川津二代取遺跡SD28出土遺物 (1/3)



第442図 川津二代取遺跡SK05出土遺物 (1/3)



258 備前焼



266 須恵器

第443図 飯野東二・瓦礫遺跡SP459(上段)・龍川四条遺跡A地区SP01(中段) 郡家原遺跡SP45(下段) 出土遺物(1/4)

が存在するとも評価できる。しかし一方で、②器体の浅い黒色土器椀（報告書878）や、③平高台の退化した椀B-2（報告書883）が存在することも看過できないであろう。②・③は西村遺跡ではパターン3にみられるが、①はおそらくパターン1よりもさらに先行的な形式といえるのであり、短期間のまとまった資料というよりも長期間の混在した状態を示している土器群とするのが妥当であろう。第2溝と上層出土土器については、土師質土器皿B I・杯D II、黒色土器椀A II、須恵器鉢D・甕Cのいずれもが極めて近似した型式から構成されており、両者を別のパターンとして区分するのは困難である。両者ともに西村遺跡のパターン3に近い内容をもつとしてよく、最下層の②・③と共に通する。以上から、SD10出土土器は全体としては西村遺跡のパターン3（つまり丸龜平野のパターン2）として捉えて

第9表 丸龜平野各遺跡における形式・型式の組み合わせ

パターン	出土遺構	須恵器・黒色土器										握鉢	
		皿B I	皿B II	皿B III	杯D I	杯D II	A II	須恵器	杯	D	E		
1	下川津 S D III 03	●											
	下川津 S D III 05		●										
	下川津 S B III 112			●									
2	下津 SD III 75 中央部上位				●	●	●	●	●				
	北内 S D 26					●							
	龍川四条 A 地区 S R 01						●						
	川津元結木 SD 10 第1遺							●					
3	佐吉川・蓬田井戸 2								●				
4	下川津 S D III 71 東部								●				
5	川津二代取 S D 28									●			
6	川津二代取 S K 05										●		
	飯野東二・瓦礫 S P 459											●	
	龍川四条 A 地区 S P 01												●
	郡家原 S P 5												

よく、最下層出土の一部に先行的な形式が存在するがそれは混在した在り方を示すのに過ぎず、層位的区分=パターン区分ではないことがわかる。

6. 中世 I・II期の設定と細分

(1) 各地域のパターンの併行関係

以上記述してきた3地域でのパターンは、各々が明確な対応関係にあるとは必ずしもいえないが、大枠では皿B III・杯D II・椀A IIの形式・型式の組成が一致する。高松・丸龜の両平野の資料は消費地での資料であり、ことに丸龜平野では上記したようにパターン4・5に時期幅が想定されるなど、若干の問題を残す。したがってこれらの地域の併行関係は、生産地の一括資料から構成される西村遺跡を基準として検討するのが望ましい。

普遍的な西村産の器種である椀A IIの型式と各地域の土師質土器皿・杯の型式との組み合わせから、第10表に示したようなパターンの併行関係が推測できる。ただし、いくつかの検討課題は残る。それは、①西村遺跡1・2については、高松・丸龜平野ともに比較資料が少ないので存在しない。このため西村遺跡でのパターン区分が妥当なものか、十分な検証が現時点では行えない。高松平野では、西村遺跡1にわずかに先行するとと思われる前田東・中村遺跡E区S D 19出土土器から高松平野1に至るパターン区分が検討課題となる。また丸龜平野1・2では、西村遺跡ではみられない皿B Iが主体を占めるため、西村遺跡1~3との厳密な対応関係やパターン区分の検証が不十分である。②高松平野3~6の区分は皿B III・杯D IIの型式の組み合わせからは区分が可能であり、時期幅が問題となるが丸龜平野でも区分ができる見通しにある。しかし西村遺跡ではこれに対応するのは西村遺跡5・6であり、現段階ではそれ以上の細別は難しい。西村遺跡5の杯D II形式はD II-4・5であるが、高松平野3の杯D IIはD II-3・4であり、微妙な食い違いがみられる。西村遺跡6と高松平野5とは概ね一致する。このため、西村5のS 16-S K 16が高松平野3・4に細分できる可能性を考えておく。逆に西村遺

高松平野	西村遺跡	丸亀平野	期
	パターン1	パターン1	
	2		1
パターン1	3	2	2
2	4	3	3
3	5		1
4	6	4	2
5		5	3
6	7	6	4
			5

第10表 高松・丸亀平野、西村遺跡の各群別の対応関係

跡4は、椀A IIの型式の組み合わせ（出現頻度）から2つのパターンに細分できる余地があるが、高松・丸亀平野では資料不足もあり十分な検証ができない。

(2) 「期」設定の指標

上記したような検討課題が残るもの、各地域のパターンの併行関係について一応示すことができた。そこで併行関係を踏まえた各パターンを一括して編年区分に再編する。

編年区分は、形式上の組み合わせの大きな変化を「期」とし、型式の組み合わせの変化を「小期」と認識して行った。「様式」でなく「期」と呼称するのは、主要形式・型式以外にも多様な在地系・搬入系土器から構成される土器群が遺跡・小地域毎でかなりの変異幅を有する実態があるからであり、どのレベルで「様式」と認識してよいのか、明確でないことによる。このため、単に土器の共伴関係によつて示される共時性を示す用語として「期」を用いたい。

今回検討した土器群は、中世I期・II期に大別できる。中世I期の指標としたのは、①土師質土器皿B（小皿）の出現、②西村型土器椀である椀A IIの出現、③十瓶山窯産中世須恵器としての鉢D・壺C（広口瓶）・甕C（いわゆる「十瓶山式甕」）の出現、の3点である。また④土師質土器杯Dの出現も指標となるものの、当初から存在するのではなく、この期の後半から急速に普遍化する。②の椀A IIは、黒色土器と須恵器の両者があるが、この期には黒色土器として生産されることが多い。

中世II期の指標としては、①椀A IIの大多数が須恵器で占められるようになること、②十瓶山窯産須恵器捏鉢Eの普遍化、③土師質土器鍋Aの普遍化と足釜A・Bの出現、の3点が挙げられる。②の須恵器鉢Eと③の鍋Aは既に中世I期に少量が先駆的に認められるが、この期に調理・煮炊器種の主体的な存在となったものである。また③は、古代的な器種である土師器羽釜・甕の消滅と一致する動きである。

なお本稿では資料不足のため詳しい記述ができないが、これに続く中世III期は①杯Dが小型化・浅手化した新たな形態の皿の出現、②楠井窯産擂鉢・甕の出現、の2点を指標とする。①は土師質土器皿B・杯D、須恵器杯、須恵器椀A IIの消滅と軌を一にする。また②と同時に、須恵器鉢E・壺C・甕Cが消滅する。

以下、小期毎に各形式・型式の変化について記述する。

(3) 中世I-1期

西村遺跡の西村2号窯跡灰原、西村北N3-SK01を良好な一括資料とし、下川津遺跡SDIII03・05もこの期に含めることができる。西村遺跡では須恵器とともに黒色土器椀の生産が確実であり、回転ヘラ磨き調整が汎用される。この技法は、時期的に先行する前田東・中村遺跡E区SD19出土土器群に見出せる（佐藤1999）が、この期より西村遺跡産を主体とするようになる。また土師質土器小皿の生産も西村遺跡で行われた可能性が高く、一つの窯場での多面的な土器生産が認められる。さらに須恵器においても中世を特色付ける十瓶山窯産捏鉢・広口瓶・甕の3器種が定型化し、技法的にも古代とは断絶的な側面が指摘できる。一方、煮炊具については新たな形式の出現はあるが、むしろ古代後半からの連続的な様相を呈している。高松平野の状況が不明であるが、土師質土器皿や黒色土器椀の形式の組成は西村遺跡と丸亀平野で異なっており、地域色の明確な状況が看取される。

土師質土器皿 皿B I-1・B II-1がある。前者は丸亀平野で系譜が追え、後者は生産地である西村遺跡で一貫した系譜が確認できるため、別系統（生産地）の小皿と判断できる。いずれも古代後半の皿Aとは異質な形態をもつことから、この期に出現した形式といえる。ことに前者は、古代の杯C形式を浅手にしたような形態であることから、杯Cを祖形としていることが推測される。

須恵器椀 楓B-1・2、A II-1がある。楓Bは西村2号窯跡灰原で多量に出土しているが、最近では川津川西遺跡など、集落での類例もわずかながら増加している。西村2号窯跡では、B-1が多くB-2は少ない。楓A II-1は、既に述べたように回転ヘラ磨きを施さない点がA II形式の他者とは異なり、系譜関係が問題となる。量的には極めて少ないと存在である。

黒色土器椀 楓A II-2・3、楓A IIIがある。楓A II形式は、外面回転ヘラ磨き+内面6分割磨きを施す「深楓形」のもの（A II-2）と、外面回転ヘラ磨き+内面4分割磨きを施すやや器体の浅いもの（A II-3）があり、前者が多くみられる。ともに底部外面には回転ヘラ削りが施される。

楓A IIIは、西村遺跡以外での生産が考えられるものである。楓A IIよりも浅手であるが、高台が高く作られているのが特徴的である（第432図16）。また、ヘラ磨きは回転を利用していない。

土師質土器楓 良好的な資料に恵まれないが、西村型土器楓A IIは、土師器としては生産されていないようである。下川津遺跡SDIII03では、黒色土器楓A IIIと同じ形態のものが少量みられる。

須恵器捏鉢 十瓶山窯産の鉢D-1がある。古代後半の鉢Cからの系譜を引くものと考えられる。

土師器甕 甕D-3、E I・II-1、Fがある。後3者は、この期もしくは直前期に出現した形式である。

土師器羽釜 羽釜B-3・4、C I-3がある。いずれも古代後半からの連続的な系譜が辿れるものである。

土師質土器鍋 ごく少量にとどまるが、西村遺跡N3-SK01では器体の浅い鍋が認められる（第420図37）。口頸部が緩いカーブを描いて外反し、口縁部を中心としたナデ調整は回転ナデの可能性が指摘できる。中世II期に出現する鍋とは形態的に異なっており、明確な断絶期を介した先駆的な事例として捉えられる。

須恵器広口瓶 十瓶山窯産の壺C-1がある。

須恵器甕 十瓶山窯産の甕C-1がある。口頸部には右上がりの叩き目が、体部には右下がりの叩き目が施され、吉岡康暢氏のいう「一連叩打成形」が行われている点が古代後半の十瓶山窯産甕とは異なる。なお口頸部の叩き目は回転ナデ調整で消去される。

その他 須恵器皿A・杯DIが少量認められる。杯DIは、黒色土器楓同様に見込みのヘラ磨き調整を

行っており、一部には外面の分割磨きも行われている。煮炊具の加熱具としては、土師器竈がある。他地域からの搬入品としては、楠葉産黒色土器B類椀や近江産緑釉陶器椀・耳皿・皿、篠窯産鉢、東播系須恵器椀がある。多くは11世紀前葉～中葉までに編年されるものであるが、東播系須恵器椀は平高台の低いものであり、遡っても神出釜ノ口5号窯段階（11世紀後葉）でのバリエーションに類例がみられるのにとどまる。楠葉産黒色土器や緑釉陶器などの特殊品は、入手後一定期間使用されたことを示すと考えられる。

(4) 中世 I - 2期

西村遺跡のN 30・31-S D 01出土土器、庄屋池3号窯跡採集土器があたる。資料数が少なく、土器群全体の様相については明確ではないが、黒色土器椀はI-2期よりも後出的であり、また新たな器種としては土師質土器杯D Iの存在（出現）が挙げられる。

土師質土器皿 皿B IIIとしては口径のやや小振りなB III-1・2がある。B III-1は比較的長く外傾気味の口縁部をもつ。B III-2は口縁部が直立し口径もやや小振りであり、II-1期以降にみられるものである。N 30・31-S D 01付近はII期にも継続して建物群がみられるため、混入と捉えた方がよいかもしない。

土師質土器杯 杯D Iがある。形態的にはI-1期の須恵器杯DIに近似するが、ヘラ磨き調整は施されない。また口径が13cm台と小振りである。

須恵器椀 椋B-2・3がある。庄屋原3号窯跡での採集資料は3点にとどまり量的な比率の分析は難しいが、B-2が1点、B-3が2点あり、後者が多いようにも判断できる。

黒色土器椀 椋A II-3のみで占められる。一部の個体に底部ヘラ削り調整が省略される。また見込みのヘラ磨きは平行線状主体であるが一部に螺旋状を呈するものがある。これらの特徴がI-1期とは異なる。

土師器竈 竈E II-1がある。外傾する口縁部端面の直下にも強い横ナデによって面が形成される。

須恵器甕 十瓶山窯産の甕C-1・2がある。

(5) 中世 I - 3期

西村遺跡西村1号窯跡・N 2-S K 02、空港跡地遺跡S P il21、下川津遺跡S D III 75中央部上位、川津元結木遺跡S D 10第1溝、北内遺跡S D 26、龍川四条遺跡A地区S R 01の出土土器が当該期の資料である。土師質土器皿・杯が極めて少量のため基準資料から除外していたが、高松城跡（西の丸町）下層遺構であるS X 8 C 204出土土器は、黒色土器椀・須恵器捏鉢・広口瓶の型式からこの期を主体とする、やや特殊な器種組成の事例と理解できる。

この期は、土師質土器杯D IIの出現と集落遺跡における急速な普遍化を指標とする。黒色土器椀も西村型の椀A IIが多く認められるようになり、非西村系統である椀A IIIの明確な事例はない。北内遺跡では伝統的な在地の胎土をもつ椀A IIがみられ、西村型土器椀の模倣が行われている。これらのことから、黒色土器椀については、十瓶山窯（西村遺跡）産もしくはその系統の形式でほぼ独占される状況が指摘できる。その一方で、丸龜平野北半部～中央部では土師質土器皿B Iや特徴的な土師質土器椀が多量に

みられ、I-1期で看取された地域性が依然として踏襲されていることがわかる。このことは、土師質土器杯D IIが地域を超えた形態の同一性をもちながらも、ロクロ回転の方向の違いから丸龜平野独自の生産が想定されることにも表れている。

土師質土器皿 皿B I-2, B II-2, B III-1・2がある。前2者は口径8.5~9.5cmとI-1期よりも縮小し、また系統を超えた法量のまとまりが生じているように見える。B III-1はこれらよりも大振りな口径をもつものであり、出土遺構の性格を考慮すると西村遺跡で生産されたものと考えられ、西村遺跡では2系統（B II形式とB III形式）の土師質土器皿の生産が行われるようになった可能性がある。

須恵器皿 西村1号窯跡で皿A I・A IVの2者がみられる。古代以来続いてきたA I形式が認められるのはこの期までであり、以後は須恵器としての独自の形式はみられなくなる。A IV形式は土師質土器皿B II形式の口径を大型化させたものであり、以後の土師質土器主導の皿形態の在り方をよく示すといえよう。

土師質土器杯 杯D II-1がある。高松・丸龜両平野の集落遺跡で一定量確認できる。ただし、西村遺跡の杯D II-1のヘラ切りの進行方向が右（R）なのに対して、丸龜平野の杯D II-1は川津元結木遺跡では左（L）、龍川四条遺跡ではRである。このため、丸龜平野には西村産の杯D IIと他生産地（おそらく皿B Iの生産地と同じ在地窯）からの供給が想定できる。

須恵器椀 椭B-4, A II-4がある。椭B-4は、極めて低い形骸的な平高台をもつものであり、以後は全く認められなくなる。西村遺跡N 2-S K 02出土の椭A II-4は、廣瀬編年で「瓦質土器椀」の初現例とされたものである。口縁部から体部にかけて、やや直線的に伸びることと、見込みのヘラ磨きが幅広いことが、黒色土器椀の同型式とは異なるイレギュラーな特徴といえる。西村1号窯跡でも椭A II-4は焼成されているが、これは黒色土器椀と同一の形態・技法をもつ。

黒色土器椀 椭A II-3・4があるが、量的に多いのは椭A II-4である。I-2期よりもさらに器体は浅手となるが、直立気味に内弯する口縁部に「深椀」形態への意識の残存を看取することができる。また底部外縁をヘラ削り調整するものが依然多く、ヘラ磨き調整（外面回転磨き+内面4分割磨き）も比較的密な間隔で施されるなど、丁寧な調整方法の枠組みが踏襲されている。

須恵器捏鉢 十瓶山窯産のD-2・3, E-1がある。西村1号窯跡ならびに川津元結木遺跡での状況をみると、鉢D-2が多く生産・消費されていることがわかる。鉢E-1はこの期では少ないとみてよからう。この他、西村遺跡では内外面にヘラ磨き調整を密に施す鉢があり、高松城跡（西の丸町）下層遺構からも出土している。

土師器甕 甕E I, E II-1・2がある。古代後半からの甕Dではなく、I-1・2期のいづれかをもって消滅しているものと思われる。器面調整は木目の浮き出ない板ナデが主体であり、ハケ目調整への依存度が極めて低下する。形式・技法ともに古代的な要素が払拭されたといえる。

土師器羽釜 羽釜B-4, C II-1・2がある。羽釜B-4はごく少量であり、畿内的な形態（摂津C 2型）の変容した在地色の強い羽釜C IIが多くみられる。羽釜C IIの器面調整は板ナデであり、甕と同様、器種組成と技法の新たな動きが指摘できる。

須恵器広口瓶 十瓶山窯産の壺C-2がある。国府周辺の火葬骨蔵器としての使用例があるが、高松城跡（西の丸町）下層遺構からも出土しており、集落での貯蔵具としても使用されたと考えられる。

須恵器甕 十瓶山窯産の甕C-2・3があるが、前者が多い。

その他 十瓶山窯産の須恵器杯がごく少量みられるが、土師質土器杯D II - 1と同じ形態であり、皿と同様、土師質土器に主導される形式の互換性が認められる。土師質土器の平高台椀は小型品を中心にお定量認められる。他地域からの搬入品としては、和泉型瓦器椀（II - 1・2期）、楠葉型瓦器椀（I - 3期）、京都系土師器皿（平安京IV期新～V期古）、東播系須恵器小皿・椀・捏鉢・甕（I - 2期）、吉備系土師質土器椀（I - 2期）などがある。輸入磁器は量的な検討が難しいが、白磁IV・VII類碗がみられ、明確にこの期に比定できる青磁の出土例はない。搬入品が土器群全体に占める割合はかなり低いのが一般的であるが、高松城跡（西の丸町）下層の土器群は土師質土器杯D IIがごく少量であり、椀形態も和泉型瓦器椀が圧倒的に多い状況である。明らかに地域内からは遊離した土器組成を備えているといえ、海浜部における交易の拠点としての性格を示すものと思われる。

(6) 中世II - 1期

西村遺跡N 35 - S K 25・S 20 - S D 01、空港跡地遺跡 S D f32、佐古川・窪田遺跡井戸2の出土土器が該当する。また須恵器捏鉢・広口瓶・甕の型式から、赤瀬山2号窯跡・奥下池南窯跡も当該期の資料としてよからう。西村遺跡の基準資料では、土師質土器杯D IIと椀A IIの細別型式の組成に微妙な差異が指摘できる。すなわち、①N 35 - S K 25では杯D II - 2が多いが、S 20 - S D 01では杯D II - 3が多い、②N 35 - S K 25では椀A II - 5が多いが、S 20 - S D 01では椀A II - 6が多い、という違いである。こうした差異を同じ期の中での違い（古相・新相とでも区分できるもの）とみると、あるいは別個の期として設定できるのかは判断が難しい。しかし、基本的には型式の組み合わせを同じくし、その量比だけが異なるという点で、他の「期」の設定基準よりもより細かなレベルの差異であることは明らかだため、ここでは同じ「期」として捉え、その中の古相・新相という認識に立ちたい。

II - 1期は、椀A IIにおける黒色土器の消滅と須恵器の増加に特徴付けられる。このことは同時に、9世紀後半以来続いた供膳具組成の終焉を意味しており、供膳具ではほとんど椀形態のみに特化した中世須恵器生産の新たな動きを示すとも評価できる。また西村遺跡の当該期に位置付けられる遺構（N 6 - S K 01・S 17 - S D 02・N 20 - S D 03など）出土土器から、煮炊具では土師質土器鍋Aが普遍的な存在であることが窺える。土師器甕・羽釜は、当該期の明確な事例はなくI - 3期をもって消滅したと考えられる。土師質土器足釜は、II - 2期からは明確な事例があるが、この期での有無は今のところ明確にできない。また前代の供膳具にみられた地域色がどのように変化したかは、川津地域における良好な事例がないため不明であり、今後の検討課題とせざるを得ない。

土師質土器皿 皿B I - 2、B II - 3、B III - 2・3がある。丸龜平野での系統である皿B I形式は、高松平野の空港跡地遺跡でも確認できるが、ここではヘラ切りがRであり丸龜平野とは異なる。皿B II - 3とB III - 2・3は、西村遺跡で併存する型式であり、法量的には両者ともに同じである。口径の縮小に伴い口縁部長も短くなり、B II形式に特有の口縁部内面下端の窪みが古相では依然明確だが、新相では曖昧な作りとなることが観察できる。したがって、B II・III形式の境界が次第に不明瞭な、統合化の方向を示しているともいえる。

土師質土器杯 杯D II - 2・3がある。杯D II - 1よりも体部の外傾度が弱くなり、器体も相対的に深くなる。その中でも浅手のもの（D II - 2）と深手のもの（D II - 3）に細分でき、古相ではD II -

2が多く、新相ではD II - 3が多いという傾向がある。法量的にはこの期の型式が最も大きく、II - 2期以降は縮小化傾向を明確にする。

須恵器椀 梗A II - 5・6・7がある。体部内面と見込みのヘラ磨き調整が省略化の方向を明確にする時期といえ、このため急速な型式変化を辿る。古相では体部内面と見込みのヘラ磨きが別に施されるA II - 5が多いが、新相では一体化した円弧状の磨きを施すA II - 6が多い。また古相・新相ともに内面には磨き調整を行わないA II - 7が少量ある。外面調整の大きな変化は、底部外縁の回転ヘラ削りがみられなくなるという点にあり、回転ヘラ磨きも1本の幅が太く間隔の空いたものになる。焼け締まらない軟質な須恵質焼成が多く、口縁部に炭素の吸着がみられる。短時間の焼成の最終段階で焼しに近い状態の還元雰囲気にあったことが窺え、西村遺跡で多数確認された地上式の小型窯（煙管状窯b類）で焼成されたことが想定できる。

須恵器捏鉢 鉢D - 4, E - 2がある。奥下池南窯跡窯体床面・S X 01出土土器から、依然として鉢D形式が存在することがわかるが、西村遺跡の当該期の遺構出土土器では鉢E形式も一定量認められ、I - 3期の圧倒的な鉢D優位とは異なる状況が看取できる。焼成は、焼け締まらない軟質な須恵質ないし瓦質焼成がみされることから、窯窓の他に西村遺跡の小型窯での生産が想定される。

土師質土器鍋 鍋Aがある。西村遺跡での事例は個体差が大きいが、いずれも口頸部が緩やかに外反し、口頸部と体部の大半に叩き目がみられるものである。器体の深いものと浅いものがある。須恵器甕と同様に口頸部を叩いて外反させ、また体部と底部も叩き作業で丸く膨らませたと推測される。口頸部は叩き後に回転ナデ調整と思われるナデが施される。また焼成も還元気味のものがある（N 20 - S D 03出土例）。明らかに須恵器系の技法を採用しており、中世I期以前の土師器甕・羽釜とは異なる系譜が想定できるため、「土師質土器」鍋と呼称する（足釜も同じ）。

須恵器広口瓶 十瓶山窯産の壺C - 3がある。

須恵器甕 十瓶山窯産の甕C - 3がある。

その他 佐古川・窟田遺跡では、西村型土器椀とは異なる形態をもった土師質土器椀がみられる。資料不足ではあるが、I期にみられた地域色は完全に解消されるには至っていないことが予測される。搬入品としては、和泉型瓦器椀（II - 3～III - 2期）、白磁VII類皿がある。

(7) 中世II - 2期

西村遺跡S 16 - S K 16・S 17 - S K 201出土土器、東山崎・水田遺跡E区S D 03、空港跡地遺跡S D f16下層・S T f01の出土土器が当該期の資料である。ただし、先述したように西村遺跡S 16 - S K 16出土土器の杯D IIの組成が高松平野とは微妙に異なるため、西村S 16 - S K 16は次のII - 3期も含む土器群であると捉えておく。また若干の時期幅を含む可能性があるが、西村遺跡N 14 - S K 03出土土器も大半がII - 2期にあたるものと考えるため、同様の須恵器甕を焼成した、かめ焼谷2号窯跡出土須恵器も当該期に操業期の一点があると判断できる。ただし、同窯出土資料には皿・杯・椀など、直接的に基準資料と比較できる形式がないため、下限については確定的でない。また鍋Aの特徴から、国分寺楠井遺跡土器溜まり1第III層出土土器の上限をこの期に置くことができる。

II - 2期は、土師質土器皿・杯における底部糸切り技法の出現と、須恵器椀A IIにおけるヘラ磨き調整の消失、また土師質土器鍋Aの形態・技法の定型化に特徴付けられる。底部糸切りは、西村遺跡を含

む十瓶山窯ではついに採用されなかつた技法であり、地域的には高松平野南東部と三豊平野に集中する（三豊平野の事例については本節7.を参照）。非十瓶山窯系の生産地の新たな動きを示す事例である。鍋Aにおいても同様な動きを指摘できる。西村系鍋Aの定型化とともに楠井系鍋Aが出現・定型化しており、断片的な事例ではあるが集落遺跡では楠井系鍋Aが主体をなしている。しかしその反面、須恵器捏鉢・壺・甕といった器種については十瓶山窯（西村遺跡）がほとんど唯一の在地生産地である。

土師質土器皿 皿B II-3, B III-2・3, C I がある。生産地の西村遺跡では、皿B II形式はみられずB III形式のみで構成されている。空港跡地 S D f16下層での皿B II-3（259）は非西村産であろうか。皿C Iは空港跡地、東山崎・水田では主体をなす形式である。

土師質土器杯 杯D II-3・4・5, E I-1・2 がある。西村遺跡ではD II-4・5が、空港跡地遺跡ではD II-4が多い。いずれもII-1期よりも口径が縮小し、浅い器体となっている。両遺跡での型式の微妙な違いは、わずかな時期差に起因するのか、遺跡の性格（生産地・消費地）の違いによるのか、良好な資料の蓄積を待って改めて検討する必要があろう。東山崎・水田遺跡では、杯E I形式の底部糸切りが静止のものと回転利用の2者がある。

須恵器椀 椥A II-7・8・9 がある。A II-7は集落遺跡で例外的にごく少量みられるだけで、流通・使用の時間差もしくは混入とみられる。大半を占めるのはA II-8であり、内外面ともにヘラ磨き調整は施されなくなり、さらに浅手な器体となる。内面の板ナデ調整は、工具原体が木目が浮き出て、ハケ目状になったものを多用するようになる。

須恵器捏鉢 十瓶山窯産の鉢D-4, E-3 がある。西村遺跡では当該期の資料に鉢D形式がなく、既に生産されていない可能性があり、やはり混入と思われる。

土師質土器鍋 西村系鍋A・Bと楠井産鍋A I がある。西村系鍋Aは、外反する頸部の屈曲が明瞭になる。口頸部と底体部は叩き成形され、内面には板ナデ調整が施される。須恵質焼成品が少量あり（第429図206），依然として須恵器系技術との強い関わりが認められる。楠井系鍋A Iは、西村系よりも強く屈曲する口頸部をもち、口縁端部や体部外面に粗いハケ目調整が多用されるのが特徴である。底部は叩き成形であるが、口頸部は叩き成形かどうか明確でない。

土師質土器足釜 足釜B I がある。楠井系足釜A Iは、鍔部端面がハケ目調整によって明確な面をなすものであり、体部中位から底部にかけて叩き成形される。空港跡地 S D f16下層出土の足釜（286）は、口縁端部の形態や脚基部の接合角度が楠井系とは異なり、畿内（山城）にみられる瓦質足釜に近い形態をもつ。

須恵器広口瓶 壺C-4 がある。また西村遺跡N 14-S K 03では、体部外面に縦方向のヘラ磨きを施した仏花瓶形の壺が出土しているが、これは空港跡地遺跡 S D f16（484）、三豊郡豊中町延命遺跡で確認できる。

須恵器甕 甕C-4・5 がある。空港跡地 S D f16下層では甕C-1が出土している（292）が、これは細片で摩滅が著しいことから、この型式の長期間の使用もしくは混入の可能性を考慮すべきであろう。

その他 他地域からの搬入品がかなり多い。和泉型瓦器椀（III-2・3期）・皿、吉備系土師質土器椀・鍋（III-1期）、東播系須恵器甕、白磁V-1・3類碗、青白磁合子、青磁I-7類碗があり、特に瓦器椀は東山崎・水田遺跡では椀形態の主体を占めるようにみえる。ただし、II-1期の土器群に伴出する瓦器と年代的に重複するため、長期の使用もしくは混入の可能性も考えられ、直ちに使用の実態

を示すのかは資料の増加を待って検討を重ねる必要がある。

(8) 中世II－3期

西村遺跡S16－SK16出土土器の一部、空港跡地遺跡SDf16中層・SDf19、六条・上所遺跡SB03、下川津遺跡SDIII71東部の出土土器が当該期にあたる。また空港跡地遺跡SDf25出土土器も当該期の所産を主体としていると考える。この期は、II－2期での形式の組成が踏襲されており、大きな変化に乏しい。皿BIII・杯DII・椀AII形式の口径の縮小化と、椀AII形式の浅手化と調整の粗雑化傾向が指摘できる。

土師質土器皿 皿BIII－3・4、CIIがある。皿BIII形式は大半がBIII－4である。口縁部はかなり短く立ち上がるようになり、底部切り離しの際に半周～1周程度口縁部F端にヘラを当てている個体がしばしばみられる。下川津遺跡SDIII71東部出土の皿BIII形式5点のうち、ヘラ切りの方向はR4点、L1点であり、丸龜平野でみられた地域色が解消されつつあることを窺わせる。皿CIIは、空港跡地遺跡でのみ出土しており、極めて限定された単位（集落）での地域色を示す形式である。粘土円盤の外縁を強い回転ナデで窪ませ、その外側の粘土を挽き出して口縁部とする。このため、見込みと口縁端部との高さが極めて近くなっている。また、見込みには糸切り痕のみられるものがあり、ロクロ上の粘土円柱から連続して製作していたものと推測される。口径は漸移的で、ヘラ切りのBIIよりも法量の幅が大きく、まとまりに欠ける。これはCIIの粗い作巧とも関連しよう。

土師質土器杯 杯DII－5・6、EIII－1・2・3・4がある。杯DIIは、高松平野ではDII－5のみであり、丸龜平野ではDII－5・6がほぼ同量存在し、後者の方が若干小振りなものを含むようである。しかし資料的制約のため、これが微妙な時期差を示すのか、地域差を示すのかはわからない。杯EIIIは、土師質土器皿CII形式と同じ胎土・焼成であり、空港跡地遺跡のみで集中的に出土する形式である。口縁部の回転ナデの後に、底部外縁から体部上半にかけて回転ナデ調整を施しており、体部形態にかかわらず同じナデの手法を用いている。

須恵器椀 楓AII－8・9がある。AII－9は高台が極めて矮小化しており、また粗雑に張付けられている。体部下半にはヘラ切り時の底部外縁の屈曲が残されており、杯に高台を貼付けしたようなプロポーションになる。

須恵器捏鉢 十瓶山窯産の鉢E－3・6がある。

土師質土器鍋 鍋AIがある。空港跡地では楠井系統の鍋AIが多いが、体部と口頸部に叩きを施したやや硬質な焼成の西村系統の鍋AIも極めて少量出土している。また、楠井系統であるが楠井窯ではみられなかつた肉厚の口頸部をもつものや、吉備系土師質土器鍋に近い形態をもつものの底部には叩き成形がみられる在地的特徴が看取できるものなどがある。下川津遺跡でも楠井系鍋AIとともに、口縁端部をツマミ上げるか端部を丸く収め、ハケ目調整をほとんど行わず叩き成形によらない在地色の強い鍋Aがみられる（第440図193）。II－2期に続く生産地の拡散状況を示すかの如くである。

土師質土器足釜 空港跡地遺跡では楠井系足釜BIがある。また下川津遺跡では楠井系とは異なる足釜Bがみられ（第440図197・198），やはり地域色が看取できる。

須恵器甕 十瓶山窯産の甕C－5がある。

その他 搬入品には、国産土器・陶器として和泉型瓦器楓（III－3～IV－1期）、吉備系土師質土器

椀（III-2期），東播系須恵器捏鉢，常滑窯産陶器捏鉢・甕，亀山窯産須恵器甕がある。また輸入磁器として，白磁IV類碗・V類碗・IX類皿，龍泉窯系青磁I-5a碗・I-5b碗があり，青磁碗の増加と口禿の白磁IX類の出現が認められる。

(9) 中世II-4期

西村遺跡S 33-S K 01，空港跡地遺跡S D f16上層・S T f02，前田東・中村遺跡S X 04，川津二代取遺跡S D 28の出土土器が当該期の資料である。II-2期以来の形式の組成が踏襲され，大きな変化は読み取れないが，土師質土器皿B III・杯D II形式の口径縮小化がさらに進み，須恵器椀A IIが最終型式になるとともに須恵器杯Dが新たに出現することが明確な変化として指摘できる。

土師質土器皿 皿B III-3・4・5，C IIがある。皿B III形式で主体をなすのは，B III-4である。またB III-5は，空港跡地遺跡III-1区S D f16の最終埋没層である上層から1点のみ出土していることから，次のII-5期の混入の可能性を否定できない。C II形式は前代同様，空港跡地遺跡のみに集中して認められ，周辺遺跡では確認できない。

土師質土器杯 杯D II-5・6・7，E III-2・3・4がある。D II形式で量的に多いのはD II-6である。口径がさらに縮小し，器壁も薄手になっている。西村S 33-S K 01でのD II-7は，底部が丸く若干深手の形態をもっており，次のII-5期の西村遺跡の基準資料のD II-7とも異質な特徴をもっているため，別の型式として認識した方がよいかもしれない。E III形式は空港跡地遺跡のみに集中する。また，上記以外に前田東・中村遺跡では体部が直立気味の杯D IIIがみられるが，これは寒川・大内平野で普遍的な形式であり，当遺跡の地理的な位置関係に規制されてもたらされたと思われる。

須恵器椀 椭A II-9・10がある。

須恵器杯 杯D II-1が新たに出現する。

須恵器捏鉢 鉢E-3・6がある。E-3には，体部内面に粗いハケ目調整を施すものがみられる。

土師質土器鍋 鍋A Iがある。西村系統と楠井系統の2者が依然として認められるが，西村系鍋Aは内面と口縁部端面にハケ目調整を施しており，口頸部の外反がより強くなつて楠井系への近似傾向を強める。ただし口頸部の叩き成形は依然として保持している。楠井系鍋A Iは，II-3期から大きな変化はない。

土師質土器足釜 足釜B IIがある。鍔端部に平坦面を作らなくなるもので，これは器面調整が専ら横ナデないし板ナデになり，器表を搔き取るようなハケ目調整が行われなくなつたことと関連しよう。

その他 国産の搬入品には，吉備系土師質土器椀（III-2期），東播系須恵器捏鉢・甕，亀山窯産須恵器甕，備前窯産陶器甕がある。また輸入磁器としては，白磁IV類碗，龍泉窯系青磁I-5b碗がある。瓦器椀の搬入は，この期には終わっているようである。

(10) 中世II-5期

西村遺跡S 5-S K 01・N 6-S B 03，空港跡地遺跡S D f48下層・S K c77，百相坂遺跡S X 08，薬王寺遺跡S E 03，川津二代取遺跡S K 05，飯野東二瓦礫遺跡S P 459，龍川四条遺跡A地区S P 01，郡家原遺跡S P 45出土土器が当該期の資料である。須恵器椀A II形式の消滅と須恵器杯D形式

の盛行がこの期の特徴である。

土師質土器皿 皿B III-4・5がある。B III-5は口縁部の立ち上がりが極めて短い、コースター状の形態を呈するものである。

土師質土器杯 杯D II-7・8がある。口径はさらに縮小化し器壁も薄く、やや深手のもの（D II-7）と浅手で体部の外傾が著しいもの（D II-8）の2者がある。ことに後者は皿との形態的区分が難しいが、杯D IIの最終型式として捉えておく。技法上の特徴として、口縁端部の回転ナデ調整が体部の回転ナデ調整に先行することがある。このため、口縁部外面直下に体部ナデによる弱い段がつくことがある。このナデの手順はII-4期の杯D II形式の一部にも認められるが、当該期から明瞭に認められるようになり、中世III期の土師質土器皿のナデ手法に継承されていく。

須恵器杯 杯D II-2がある。土師質土器杯よりも大振りな法量をもつ。

須恵器捏鉢 鉢E-4・5がある。焼成はかなり軟質になり、器表が弱い還元状態にあるのにとどまる。また、体部の叩き成形は行われなくなり、器面調整として粗いハケ目ないし板ナデが施される。口縁部のナデの状況をみても、明らかに本来伴っていた回転調整への依存度が低下しており、十瓶山窯産須恵器としては最末期の様相を示しているといえよう。

土師質土器鍋 鍋A I・A II-1・2がある。生産地系統の識別が難しいが、楠井系鍋Aでは意図的な粗いハケ目調整を施さないA IIが出現する。

土師質土器足釜 足釜A II、B IIがある。足釜A IIは依然としてハケ目調整を多用するが、B IIでは鍋同様にハケ目調整が次第にみられなくなる。なお、この期でのA IIの存在から、型式学的に先行するとみられるA IはII-4期以前に出現していたことになる。

須恵器甕 西村遺跡N 5-S K 01で十瓶山窯産甕C-5が1点のみ確認できる。しかし、既にII-4期から貯蔵具は搬入品（亀山・備前）に移行しつつあると捉えるのが妥当であり、この期まで生産が継続していたのかは、資料の蓄積を待って改めて検討していくことが肝要である。

その他 搬入品として、白磁IX類皿、龍泉窯系青磁I 2類碗、東播系須恵器捏鉢、備前窯産陶器擂鉢（III期）がある。資料不足であるが、おそらく調理・貯蔵具については在地産とともに搬入品がかなりの比率を占めているものと考えられ、中世III期には搬入品と在地製品が相互補完にある流通構造が明確化するようである。

(II)想定される暦年代

搬入品の組成と年代観 以上述べてきた在地土器の編年に立脚して各期の暦年代を考察するが、在地土器のみで年代を想定することは極めて困難である。従来の方法と同じく搬入品に頼らざるを得ないことは、いうまでもない。しかし問題になるのは、搬入品がどのような出土状況にあるのか、ということである。つまり、「混入」として捉えるべきなのか、長期間の使用の後の廃棄とみるべきなのか、あるいは入手から廃棄が在地土器と同じく短期間のうちに行われたとみるべきなのか、認識の違いがそのまま想定年代の微妙なずれとなって表れてくるのである。ただ、この点では全ての資料の検討にまで至っていないので、出土状況からの峻別は現段階では困難である。

当然のことながら搬入品の年代観=在地土器群の暦年代ではあり得ず、在地土器に立脚した各「期」に伴出した搬入品が、前後の「期」との対比でどのように整合するのか整理することが議論の前提とな

る。

こうした前提に立ち、各期に伴出する搬入品で年代観がある程度特定できるものを改めて示す。

I－1期 楠葉産黒色土器B類椀（IX期）、近江産緑釉陶器椀、篠窯産須恵器捏鉢、東播系須恵器椀（I－1期）

I－3期 和泉型瓦器椀（II－1・2期）、楠葉型瓦器椀（I－3期）、京都系土師器皿（平安京IV期新～V期古）、東播系須恵器皿・椀・捏鉢・甕（I－2期）、吉備系土師質土器椀（I－3期）、白磁IV・VII類碗

II－1期 和泉型瓦器椀（II－3～III－2期）

II－2期 和泉型瓦器椀・皿（III－2・3期）、吉備系土師質土器椀・鍋（III－1期）、白磁V－1・3類碗、青白磁合子、青磁I－7類碗

II－3期 和泉型瓦器椀（III－3～IV－1期）、吉備系土師質土器椀（III－2期）、白磁IV・V類碗・IX類皿、龍泉窯系青磁椀I5a・b類碗

II－4期 吉備系土師質土器椀（III－2期）、東播系須恵器捏鉢（III－1期）、備前窯産陶器甕（III期前半）

II－5期 東播系須恵器捏鉢（II－1～III－2期）、備前窯産擂鉢（III期）、白磁IX類皿、龍泉窯系青磁I－2類碗

太字で示したのが最も新しい年代観を示す土器・陶磁器である。最新の年代観を示すものと他者との年代観の開きが大きいのは、I－1期であるので、この点をいま少しみてみる。I－1期の近江産緑釉陶器と篠窯産須恵器は、想定年代が10世紀後葉～11世紀初頭であり、東播系須恵器椀の11世紀第3四半期との隔たりは著しい。同様の緑釉陶器・篠窯産須恵器は、I－1期よりも先行する前田東・中村遺跡E区S D19、讃岐国分寺跡SK25・26（古代III期）でみられるため、これについては先行期の遺物の混入と捉えたい。楠葉型黒色土器椀は11世紀中葉頃に位置付けられるもので、東播系須恵器椀よりもわずかに先行する年代観を示している。大宰府条坊跡第88次SE040では、山本信夫氏編年XⅠ期の土器群の中に十瓶山窯産須恵器鉢D－1型式がみられるため、I－1期は11世紀中葉を含む幅で捉えるのが妥当であろう。その他の期についても若干の時期幅をもっているが、時期幅の上限＝「期」の上限とみるかどうかは、直前の「期」の伴出資料との比較の中で考えなければならないであろう。

各期の想定年代 一応以上のような認識で各期を捉えた上で、あえて暦年代を示す。なお暦年代付との問題点については、中島恒次郎氏が指摘しており（中島1998）、今後の資料の増加による各「期」の一層の実態化と、搬入品との対応関係の整理が進んだ時点で改めて検討すべき課題といえる。

I－1期 11世紀中葉～第3四半期

I－2期 11世紀第4四半期

I－3期 12世紀第1四半期～第2四半期

II－1期古相 12世紀第3四半期

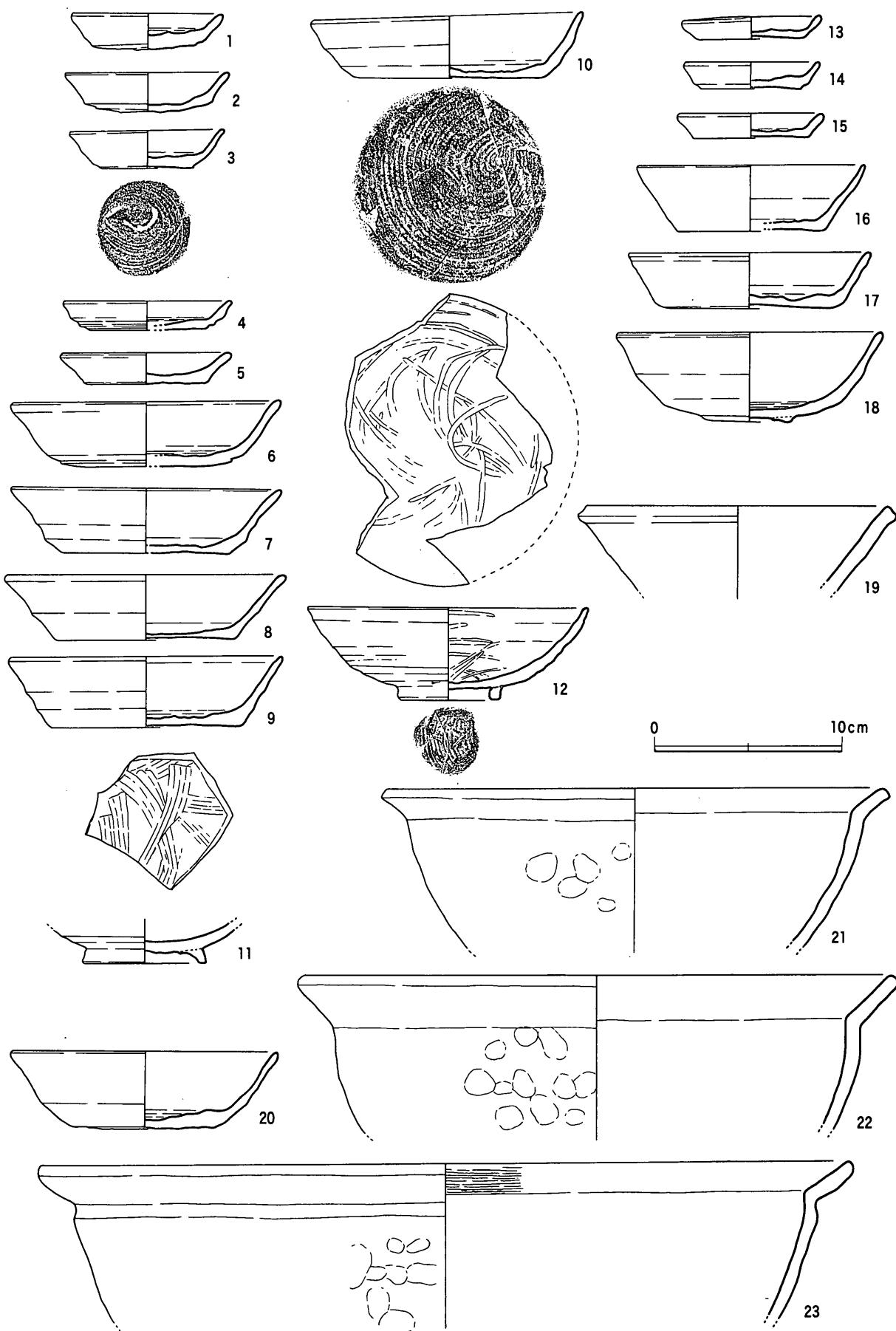
新相 12世紀第4四半期

II－2期 13世紀第1四半期

II－3期 13世紀第2四半期～第3四半期

II－4期 13世紀第3四半期～第4四半期

II－5期 13世紀末葉～14世紀前葉



第444図 三豊平野における特徴的な中世土器 (1/3)

片桐編年との相違は、須恵器椀A II形式の消滅時期に最もよく表れている。椀A IIは片桐編年では13世紀第1四半期まで続くとされており、以後は在地産土器椀ではなく木椀と輸入磁器碗で椀形態が賄われるとしている。その根拠は、下川津遺跡S D III 71や延命遺跡S K 18の出土土器における搬入品と椀A II形式との「共伴」にあるが、在地土器での検証が十分でなく搬入品の示す暦年代に専ら依拠した併行関係の設定にやや問題があるように見受けられる。また、従来から議論のあった西村1号窯の操業年代であるが、杯D II形式や椀A II形式の組列からみる限り、鳥羽南殿の造営期である応徳3年(1086)まで引き上げることは難しい。このことは型式認識こそ異なるものの、大山真充氏の指摘した年代観と一致する。また松井忠春氏が軒瓦の文様系譜から想定した、12世紀初頭という年代観を含むこととなる。

7. 三豊平野における様相

高松平野と丸亀平野、また生産地の西村遺跡（十瓶山窯）の中世土器を、細かな地域色や遺跡間偏差をあえて捨象して編年案を提示してきた。この地域でのパターンの併行関係の想定が可能であったのは、土師質土器皿・杯の様相が形態・法量・技法ともに概ね近似した属性をもっていたからであり、十瓶山窯産須恵器椀A II形式での検証とうまく整合した。しかし、以下に検討する三豊平野での土器様相は、高松・丸亀平野とはかなり異なる内容をもっており、土師質土器皿・杯でのパターンの併行関係の想定がかなり困難である。その意味でまず、それぞれの地域でのパターン認識をまず行う必要があり、その上で十瓶山窯産須恵器の検証作業を行い他地域との併行関係を議論すべきである。三豊平野では、野中寛文氏による先駆的な編年案の提示（野中1987）以降は延命遺跡出土土器がまとった内容を示すにとどまり、現段階では編年案の提示は難しい。このため以下では、ある程度地域内での在地土器の変遷を念頭に置きつつ、高松・丸亀平野での様相の違いに重点を置いた土器様相の素描を行うのにとどめたい。ただし、ごくわずかな高松・丸亀平野産もしくはその系統の皿・杯と在地土器との共伴事例で併行関係を想定したため、若干の時期差を内包する可能性があることを付言しておく。

延命遺跡八反地地区S K 18, S D 47・51出土土器を検討の対象とする。これらの資料の中でS K 18とS D 51出土土器は、土師質土器皿・杯に口径の差異が明確に読み取れる。皿はS K 18では8cm台が主体（ヘラ切り・糸切りあり）であり、S D 51では7cm台が主体（糸切りのみ）で5～6cmの極小型品もある。また杯はS K 18では13.5～15.0cmの幅に概ね収まり（ヘラ切り・糸切りあり）、S D 51では12cm台である（糸切りのみ）。高松・丸亀平野での事例から、経験的にはS K 18→S D 51が推測できるが、これは後述する西村系須恵器椀の変遷観とも一致する。この想定が一応妥当なものであれば、S D 47出土土器は、両パターンの混在した内容をもっているといえる。

高松・丸亀平野との併行関係を考える材料は決して多くないが、土師質土器杯D II形式と十瓶山窯産鉢E形式の存在が注目できる。①S K 18で杯D II-2型式が伴出（第444図6）、②S D 51で鉢E-3型式が伴出（第444図19）、③S D 47で杯D II-3型式が伴出（第444図20）、の3資料である。①・③は中世II-1期、②は中世II-2～4期に各々該当する。さらに在地（三豊平野）系統とみられる土師質土器皿はヘラ切り・糸切りともにほぼ同一形態をとるが、この口径を高松・丸亀平野と対応させると、S K 18出土例は中世II-1期に、S D 51出土例は中世II-2・3期に近似する。和泉型瓦器椀や東播系須恵器捏鉢・甕、常滑産陶器甕の型式も、この対応関係と矛盾しない。現段階では以上のよ

うな認識で併行関係を捉えておくこととし、以下に高松・丸龜平野との相違点を指摘して地域色を考える。

皿・杯の底部切り離し手法 延命遺跡では、既に中世II-1期（SK18）から土師質土器皿・杯の多くに回転糸切りが認められる。皿ではヘラ切りがむしろ多いが、杯では西村系の搬入品とみられるもの以外、ほとんど糸切りのみで占められる。中世II-2・3期（SD51）には皿も糸切りのみで構成されるようになる。今日までの知見では、糸切り手法の普遍化が高松平野よりも徹底しており、しかもその時期が若干早いことになる（高松平野ではII-2期以降で、あくまでヘラ切り主体）。

在地産土師質土器椀の存在 片桐氏が指摘するように（片桐1990・1994），体部外面下半に指頭圧痕が顕著な在地産土師質土器椀が存在する（片桐氏のいう「西讃型」）。II-1期に多くみられ、II-2・3期には存在しないことから、より先行する系譜の追求が課題である。

在地産須恵器椀の存在 延命遺跡で「西村産瓦質土器椀」として報告されているものは、実見したところ全てが西村遺跡産とは考えられない特徴をもっていることが判明した。II-1期では、見込みの斜放射状の板ナデ原体が粗く器面を引っ搔くように施されるもの（第444図11）や、一見すると須恵器椀A II-6型式に近似するが、体部外面に回転ヘラ磨きがないこと、体部下半から底部にかけての広い範囲をヘラ削り調整することなど、椀A II-6とは明らかに異質な属性をもつもの（第444図12）がある。またII-2・3期には、一見椀A II-9型式に近いが、底部外面に斜放射状の板ナデ（西村産では通常内面に施すもの）を施す点で異なるもの（第444図18）がある。そしてこれらに共通するのが、回転ナデ調整1周分が幅広で粗いために器面の滑らかさに欠ける点であり、さらに第444図12底部外面には糸切り痕があることから、詳細に観察すれば西村遺跡産とは明確に識別できるものである。

しかし反面、形態的には第444図12・18のように西村遺跡産にむしろ近似するものが多く、また技法の組み合わせや施し方（製作集団のくせ）に違いがあるものの、個々の技法のバリエーションは西村遺跡産須恵器椀に通有のものであることに注意する必要があろう。つまり延命遺跡の須恵器椀は、非西村産であるにもかかわらず、形態的特徴や技法の種類には西村産須恵器椀との一定度の関わりが想定できることである。少なくとも先述した土師質土器椀や周辺地域の他の土器椀からは、この須恵器椀の系譜の説明が困難であることは確かであり、十瓶山窯（西村遺跡）と技術基盤を同じくする在地窯（換言すれば十瓶山系窯）の存在が確実視される⁽¹⁾。中世II-1期の前後は、吉野川中・下流域において十瓶山窯系の甕窯が成立する時期であり（佐藤1996・1998），同地域で煙管状窯による須恵器椀A II形式近似の椀の生産も近年確認されるに至った（徳島県埋文センター1998）。また、岡山県龜山窯が成立するのもこの時期であり、その成立にあたっては間接的ながら十瓶山窯との密接な関わりが想定できる。以上のような、十瓶山窯の技術拡散の一環として、延命遺跡の須恵器椀が位置付けられる。

特徴的な土師質土器鍋の存在 II-1期とII-2・3期の混在資料とみられるSD47出土土器には、体部外面がほとんど無調整で指頭圧痕が顕著な土師質土器鍋がみられる（第444図21～23）。これはSK18出土土器にもみられることから、II-1期には出現していたことになる。技法的には西村系とも楠井系とも異なり、在地系統の鍋とみて間違いなかろう。また、II-2・3期には瓦質焼成の鉄鍋模倣品（鍋B型式）がみられるのも特徴的である。

8. 中世後半への見通し

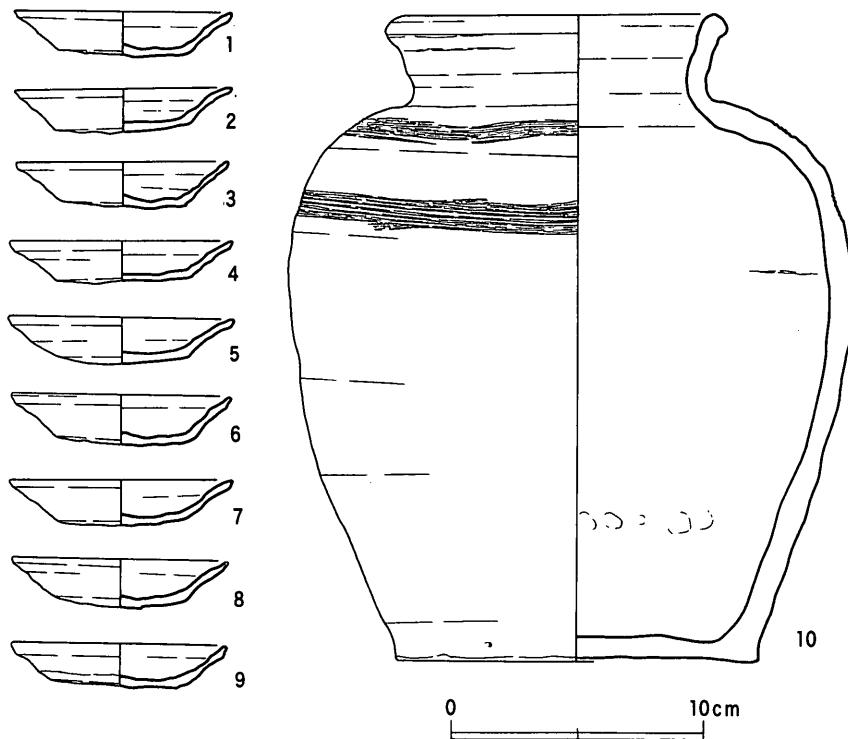
(1) 「口縁部→体部ナデ手法」の土師質土器皿

中世後半の土師質土器皿口縁部には、端部外面よりやや下った位置に段状のロクロ目を施す一群が顕在化している。今回報告した空港跡地F地区においても、かなりの割合でこのタイプの皿が認められた。この段付近の調整痕を観察すると、口縁端部の回転ナデが先行し、体部上端の回転ナデがこれを下側から覆うように施されており、この調整の境が段状に見えることがわかる（第445図）。これを「口縁部→体部ナデ手法」と仮称する。これは、II-4期の前田東・中村遺跡S X 04出土の杯D II形式に既にみられ、以後、中世後半の高松平野では比較的普遍的な杯・皿類の調整手法として認められる。

この手法は、胎土・色調を踏まえれば、峻別困難な中世後半の土師質土器皿の系統把握の指標として用いることができると考える。その意味で空港跡地C地区SKc74出土土器は、「口縁部→体部ナデ手法」の土師質土器皿の一括埋納資料として注目される（西岡1996）。土師質土器皿は口径8.5cm前後であり、口縁部中位で外側に大きく屈曲・外反し、口縁端部に直立ないし外傾する面をもつ。胎土は砂粒をさほど含まない精良なもので、黄白色に発色する。回転ナデ調整→回転ヘラ切り（R）後に、見込みにロクロ回転を利用しない強いナデが施されており、これによって底部は若干突出して丸底気味になる。以上の特徴を共通してもつ。埋納された備前焼壺は、間壁編年IV期前半の所産とみられる。

これに先行するとみられる個体としては、SDf48下層出土の土師質土器杯（1238～1243）がある。口径9cm台であり、体部の外傾度が弱いため杯D II-8型式として分類したが、胎土の共通性から直接的な系譜関係があるものとみられる。伴出した足釜は楠井B II・B IV類であり、14世紀前半～中葉を主体として15世紀前半を下限とすることが考えられる。

また後出する個体としては、SDf57南辺部出土の土師質土器皿（1531・1532）がある。内弯する短い口縁部をもつ。時期の特定は難しいが、16世紀中葉には埋没している。



第445図 空港跡地遺跡SKc74出土遺物（1/3）

以上から、大雑把には S D f48 下層（杯）→S K c74→S D f57 という前後関係が想定され、器体の浅手化（口縁部の縮小化）という方向での変化が考えられる。しかし一括資料に乏しいため、今後の事例の増加を待って改めて検討する必要があろう。

(2) 楠井産土器群の年代観

今回報告した資料中には、国分寺楠井遺跡で生産されたと考えられる土器がかなり認められる。個々の資料については第3章を参照されたいが、指摘できるのが楠井で提示した編年案との齟齬である。例えば S E f02 上層出土擂鉢では、細別型式で楠井 A II - I 類（1647）・A III - I 類（1644・1645）・B I 類（1646）が出土しており、足釜では楠井 B IV 類（1653）・C 類（1654・1655）が認められる。これは、楠井編年（佐藤1995）の第II期第2段階・第3段階、第III期に該当する形式が混在していることになる。S E f02 と繋がる S D f57 南辺部・東辺部出土土器も、これと同様な組成である。このような状況を、生産地での形式組成の認識に問題があつたとみるのか、あるいは複数時期の混在資料とみるのかが問題となる。

詳細は機会を改めて検討したいが、これは見かけ上の「共伴」であり、実態としては複数時期の混在した資料とみるのが妥当と考える。S E f02 上層では白磁碗・皿（森田E群）、青磁碗（上田B・D類）、染付皿（小野C群）、備前焼擂鉢（間壁編年III期・IV期後半）・壺（V期）、亀山焼甕（草戸IV期）など、14世紀から16世紀に及ぶ時期幅の搬入品が認められ、人為的な埋め戻し層であることから廃棄の一括性はあるとみられるものの、使用の共時性という点ではかなり不安定な土器群と評価せざるを得ない。

また、擂鉢の使用痕（摩滅状況）を観察すると、S D f57 東辺部出土の楠井産擂鉢は器面が剥落して御し目が不明瞭になっているものがみられる（1574・1575・1577）が、備前焼擂鉢にも摩滅が著しい事例がある（1579）。両者の焼き上がりの堅さを考慮すると、楠井産擂鉢は短期間で摩滅が進行したとみられるのに対し、備前焼はこれを大きく上回る長期間の使用を経なければ、著しい摩滅には至らないと考えられる。つまり、備前焼擂鉢の伝世すら考えられる長い使用期間の間に、楠井産擂鉢は頻繁に使用・廃棄が繰り返されたという可能性を示唆する。勿論、これはより厳密に検証される必要があるが、搬入品の時期幅と、楠井産擂鉢の短期使用を併せると、生産地での共伴関係を優先させるべきと考える。

9. おわりに

1990年代に得られた中世考古学の多くの成果をより着実に深化させていくためには、やはり一度「原点」に立ち返り、土器編年の再検討を行う必要性があるとの認識から、長々記述してきた。しかし、基準資料の取り扱いや、土器群における系統の峻別が不徹底に終わったことは否めず、地域性を考慮したより厳密な作業の継続が必要であろう。

註 (I) 中・西部瀬戸内や土佐では、回転糸切りによる椀が主体であり、讃岐（西村遺跡）での在り方がむしろ特異性をもつて把えられるべきかもしれない。ただ、調整手法の属性には西村型土器椀との関連性が強く窺える。